

### 第3節 保存処理木製品の樹種同定結果

公益財団法人 元興寺文化財研究所

大柵遺跡 15（4～6区）で出土した木製品の樹種同定結果について、以下のとおり報告します。

#### 1 試料

試料番号	地区	取上番号	遺構・層位	器種	備考
No.1	4区	91	8溝（新）下層	直柄平鋏	

#### 2 同定方法

樹種同定に必要な木口面（横断面）、板目面（接線断面）、柀目面（放射断面）の3断面の切片を安全カミソリを用いて作製し、サフラニンで染色後、水分をエチルアルコール、n-ブチルアルコール等の有機溶剤に順次置換した。その後、非水溶性封入剤を用いて永久プレパラートを作製し、生物顕微鏡で観察した。

#### 3 使用機器

試料の観察には生物顕微鏡 Olympus BX-53 を、木材組織の顕微鏡写真撮影には顕微鏡デジタルカメラ Olympus DP-71 を使用した。

#### 4 同定結果

試料の木材組織は顕微鏡写真の通りである。以下に樹種同定結果とその根拠となる木材組織の特徴について記す。樹木分類および植生分布は『原色日本植物図鑑木本編』（Ⅱ）に従った。同定は木沢直子（（公財）元興寺文化財研究所）が行った。

**No.1 木製鋏** アカガシ亜属 *Quercus* L. Subgen. *Cyclobalanopsis* Oerst. （ブナ科 Fagaceae）

広葉樹、放射孔材。直径約 200 $\mu$ m の道管が単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、道管放射組織間壁孔は大型の柵状を呈する。放射組織は平伏細胞よりなる同性で、単列放射組織と広放射組織を有する。

※アカガシ亜属

分 布：本州（宮城県、新潟県以南）、四国、九州

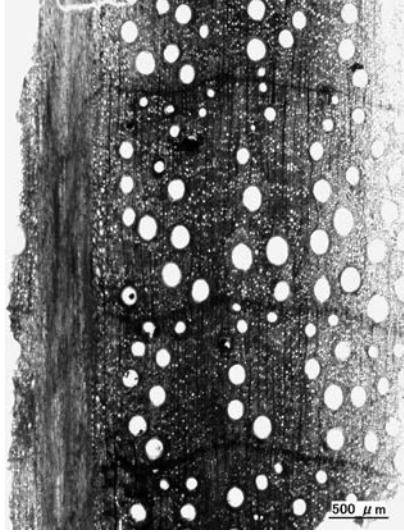
樹 形：常緑高木 樹高 20 m、胸高直径 70cm に達する

用 途：器具、農具、家具、土木、建築、薪炭 等

出土事例：建築部材、農具、工具、炭化材（燃料材） 等

試料 No.1 直柄平欵

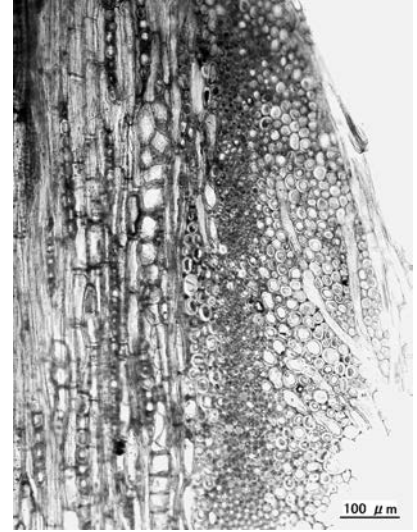
アカガシ亜属



小口面



杣目面



板目面

写真 10 木材組織顕微鏡写真

参考文献

北村四郎・村田源 1979 『原色日本植物図鑑・木本編』 II

島地謙・伊東隆夫 1982 『図説木材組織』

## 第4節 自然科学分析からみた大柵遺跡 15（4～6区）の古環境

独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 村田 泰輔

### 1 はじめに

本節では、大柵遺跡4～6区より採取した堆積物の切り出し試料について、層相観察や軟X線撮像による堆積構造観察を通して理解される堆積環境について検討した結果を報告する。また本章第1～3節において報告された自然科学分析のうち、珪藻分析と花粉分析は本節で報告をおこなう切り出し試料から採取された試料について分析した成果である。これらの成果についても取りまとめて評価したい。

本遺跡には、縄文時代晩期以降の連綿とした人間活動が認められており、特に野坂川河畔域における河道の変遷とそれに伴う氾濫原低地の形成、そして人の活動が及ぶことで地形そのものが改変されていく様相が記録されている。4～6区における各堆積層の構造や層中から検出される遺存体群から、その様相の一端について検討をおこなった。

### 2 試料と方法

試料の採取位置および層位については、第107図・第112図・第115図に記した。採取に当たっては、スチロール角形ケース11型（14×22×4cm）を用い、土層断面にこのケースを埋め込むようにして切り出した。

切り出した試料は、奈良文化財研究所埋蔵文化財センター 遺跡・調査技術研究室にて層相観察をおこなった後、同センター保存修復科学研究所の有する卓上型X線撮像装置NX-1000（フジフィルム社製）を用い、イメージングプレートによって撮像をおこなった。イメージングプレートのスキャンには、同研究室の有するFuji BAS Scanner 5000を利用した。撮像の観察にあたっては、IMGデータをフリーソフトImage-J 1.48vにISAC Managerプラグインを搭載して画像をJPG形式に変換した後、Photoshop CS5にて露出および明るさ・コントラストを調整した。

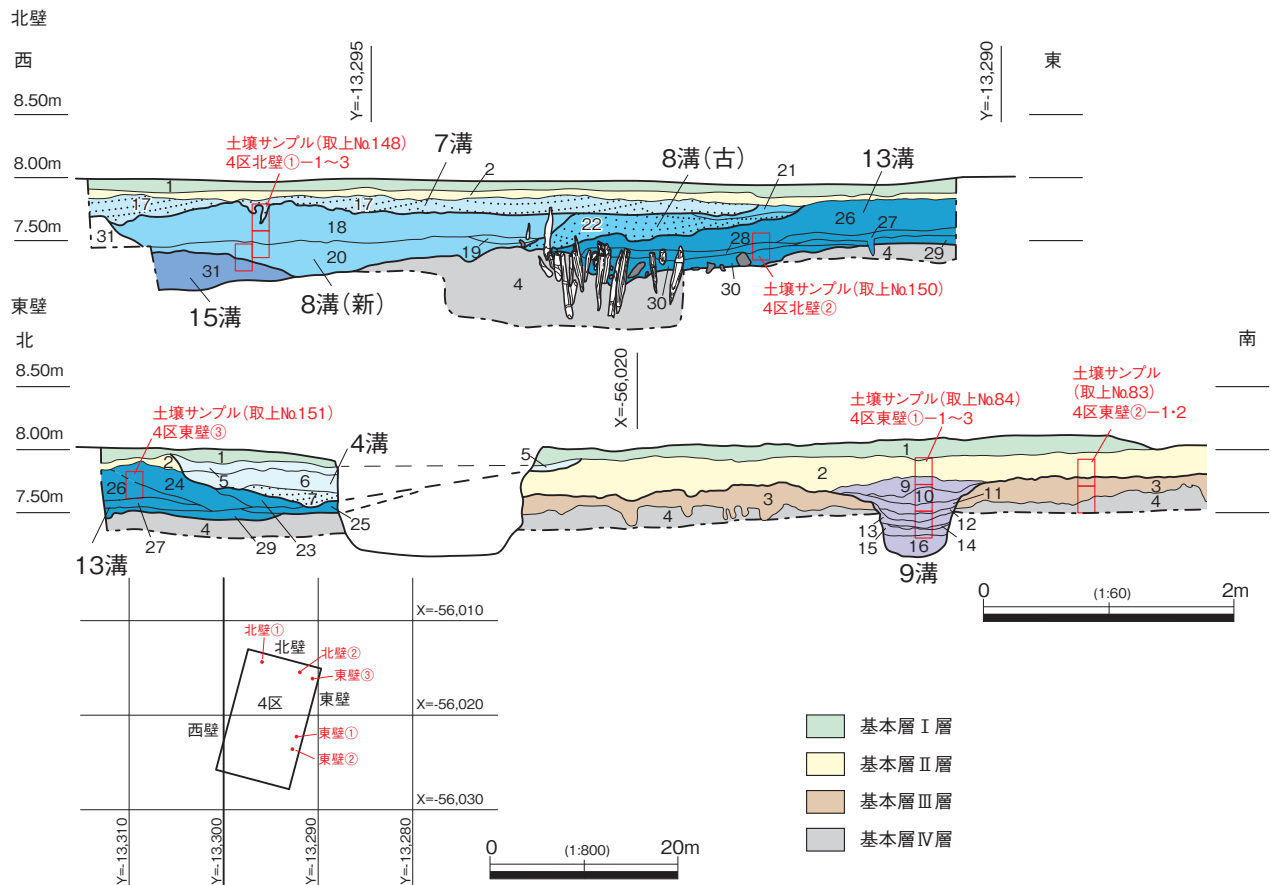
堆積層からの試料の切り出しおよび土層断面（露頭と同意）の層相記載は、鳥取県教育文化財団がおこない、試料の観察、軟X線撮像、堆積構造解析は奈良文化財研究所の村田がおこなった。

### 3 結果

各試料の結果については、調査区の試料採取壁面ごとにまとめて記載する。解析結果については、層相写真（a）、軟X線撮像（b・c）を用いて説明する。堆積構造の解釈は、軟X線撮像（c）に解釈補助線を用いて説明し、各撮像の右側面には発掘調査によって得られた分層（層番号）所見との対応関係を記載した。軟X線撮像（b）には軟X線撮像の原資データを掲載する。

#### （1）4区東壁①（第108図）

9溝の埋土とそれを被覆する1層、2層について採取した試料である（第107図；4区東壁①-1～3）。この溝は4区の南側で検出した南西-北東方向に延びる溝で、古墳時代前期初頭頃から古墳時代前期中葉の遺構と考えられている。遺構の性格としては、発掘調査の成果からは人工的な水路と推定された。



第107図 4区土壌サンプル採取位置図

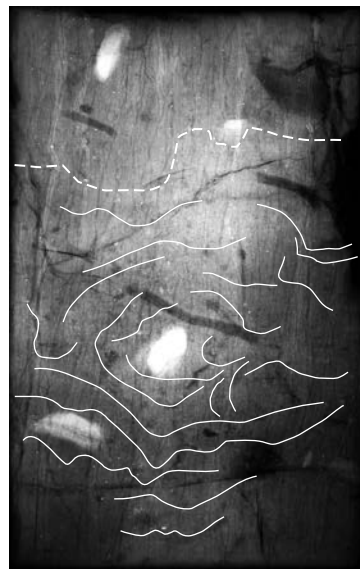
溝の埋土となる試料4区東壁①-1下部～①-3の層相についてみると、黄褐色～明褐色偽礫混明褐色～暗褐色砂質泥層である。試料①-1（12～16層）には木片を主体とした植物遺体群が、試料①-2下部～中部（10・11層）では、中粒砂～中礫サイズの砂、偽礫、河川礫が挟在し、不明瞭であるがラミナ構造を形成している。試料①-2上部（9層）および試料①-1（2・9層）は土器片を挟在し、砂が巻き込まれるような攪乱構造も観察される。発掘調査では9溝の埋土は細かな分層がなされているが、層相観察からは大きく埋土下部層（12～16層）と上部層（9～11層）、最上部（9層）の3層にまとめられる。

次に軟X線撮像画像について観察する。試料①-3では、下部に粒子径の大きなものが集まり、上部に向かって細かな粒子が堆積する級化構造堆積の繰り返しがみられる。堆積構造としては、層上部に平滑的なラミナがみられ、下部にある粗粒子がトラクション・カーペットによって堆積後、静かに細粒子が堆積したことを示唆している。また各層の粗粒子は細～中粒砂が主体であり、この中に質量の小さい植物遺体を取り込まれるように堆積する泥流構造を示している。この繰り返しが生じているということは、9溝下部の埋積は流水に伴った掃流物質による埋積というよりは、流れが基本的に弱く、供給される掃流量が度々増減するような、淀んだどぶ川のような溝であった可能性がある。

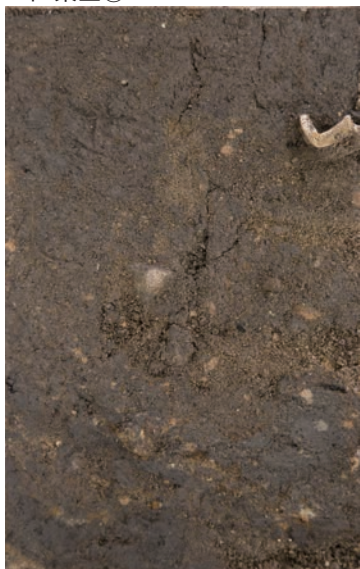
試料①-2下部～中部は、分級の悪い偽礫混砂質泥層と泥層の互層が形成されている。流速が一定以上あれば偽礫混砂質泥層の分級は進み、このような構造にはならない。偽礫の形状をみると多くのものが形状を保っており、水流運搬による摩耗・変形の影響を受けていないことを示す。これはごく近い場所から偽礫が供給されたことを示す。また挟在する河川礫についても、基質となる堆積物の粒



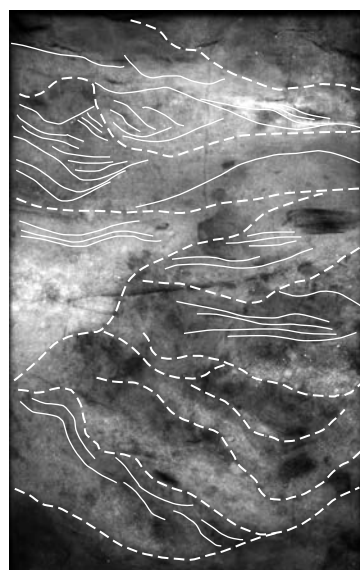
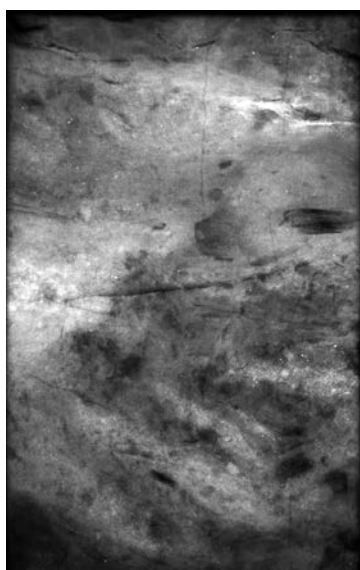
4区東壁①-1



4区東壁①-2



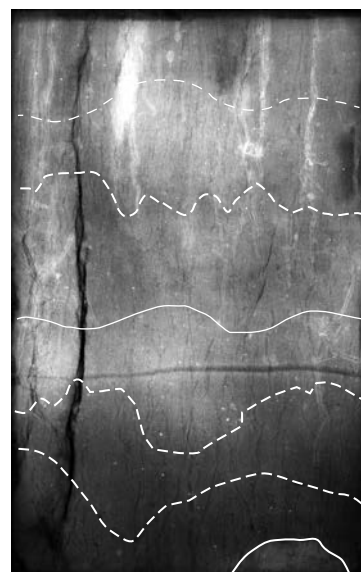
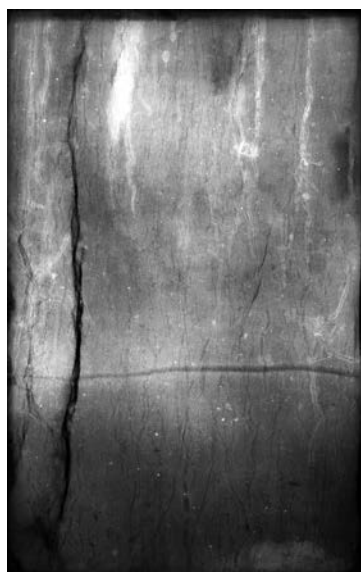
4区東壁①-3



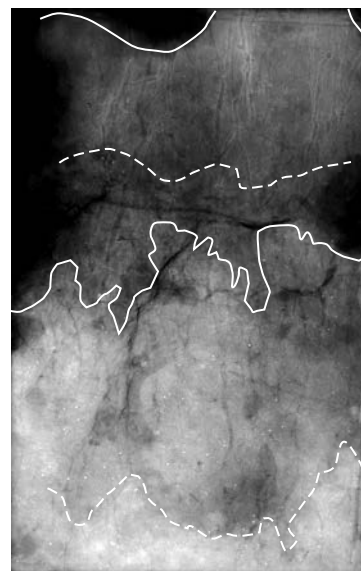
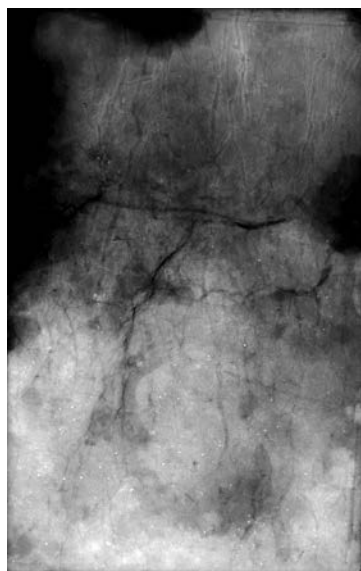
第108図 4区東壁から採取した土壌試料の岩相と軟X線画像(1)



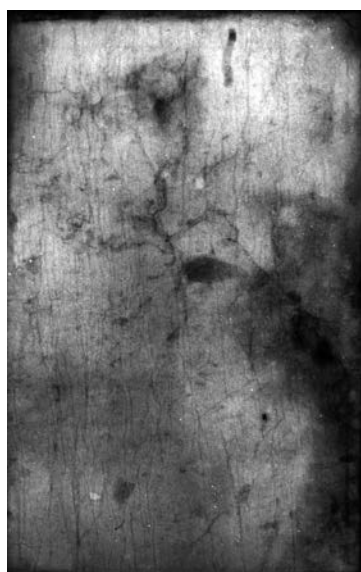
4区東壁②-1



4区東壁②-2



4区東壁③



第109図 4区東壁から採取した土壌試料の岩相と軟X線画像（2）

径の構成と比べると極端に大きく、同一堆積システムによる供給とは考えにくい。これらのことから、9溝上部層は、9溝下部層堆積時のどぶ川のような堆積場に近隣から偽礫や河川礫が投げ込まれ、それらが堆積物となる段階で僅かに分級したと推定される。9溝埋土最上部層と2層からは加重痕がみられ、人為的な攪乱と考えられる堆積構造が認められた。

1層あるいは2層上部と考えられる試料①-1上部の堆積は、植物根痕がみられる他は、ほぼ無構造の泥状構造であった。ここで試料①-1全体としては、「泥状（壁状）構造～微かではあるが単粒状構造～分別の悪い泥状構造」が認められたことになる。一般的に湛水時の作土層は、表層に泥状の微細粒子（粘土）が集積し、その直下には数mmの厚さをもつ単粒状構造が存在する。さらにその下位には代かきが十分に届かない分別の悪い泥状構造層が堆積するとされる（例えば斎藤・河口 1971、山根他 1982 など）。このことから、本層は水田作土である可能性がある。

9溝埋土からは水環境を示唆する珪藻群は殆ど検出されず、その要因は氾濫原低地における好気的環境下での短期急速堆積とされている（pp.158-159）。溝内の泥質堆積物は、不定期ながらある程度の掃流があったことを示しており、また後天的な分級化も示唆することから、一定期間はこの溝には水分があったと考えられ、珪藻から考察される堆積システムの結論とはやや見解を異にする。しかし、水域としては不十分などぶ川のような排水路において度々泥水供給が行われるとしても、産出した非陸生型の珪藻種の生産量を支持する涵養水量は十分に確保されなかった可能性は高い。この点においては、花粉の検出量の低さが堆積物の乾燥化による堆積物内への取り込み不足に依るものと考えられるならば調和的である。

## （2）4区東壁②（第109図）

9溝の肩となる3、4層とそれらを被覆する2層について採取した試料である（第107図；4区東壁②-1・2）。発掘調査の成果から、4層は無遺物層、3層は第2遺構面の基盤層（無遺物層）、2層は古墳時代前期以降の遺物包含層となる。この地点では微化石分析等はおこなっていない。

層相をみると、試料②-2下部の攪乱の進む黄褐～灰褐色泥層（4層）を底部として、試料②-2上部～試料②-1下部の暗褐色泥層（3層）、試料②-1上部の高師小僧を多数挟在する褐色泥層（2層）が堆積する。各層共通して下位層の堆積物の一部が混入しており、攪乱の影響があったことが分かる。その中で、2層上部、3層上部は泥状構造を示し、それぞれの層下部に単粒状もしくは団粒状構造が観察される。4層中には団粒構造がみられると共に、3層からの割り込みがみられる。

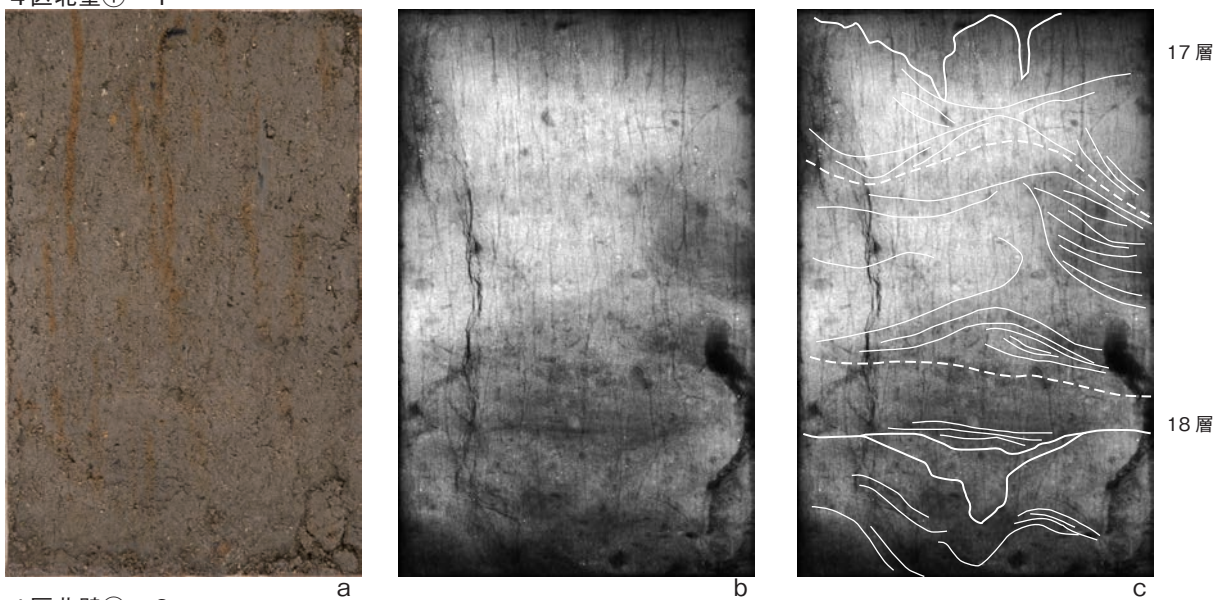
軟X線撮像からの結果もおおよそ同様の傾向であったが、2層については層相観察と異なり上部より泥状構造、単粒～団粒状構造、分級の悪い単粒を含む泥状構造の3つの層に分けられた。3層についても試料②-1下部にみられる泥状構造～僅かではあるが単粒状構造～分別の悪い泥状構造と、試料②-2上部にみられる泥状構造～分別の悪い泥状構造の2つの層に分けられた。この構造のみで決定することはできないが、水田作土の可能性はある。4層は硬化面が2面みられ、上部層は極めて大きく攪乱が進む。踏み込み痕跡は確認されないが、上位の2層、3層が水田耕作土であった場合、2層上面から4層までは40cm内外であり、4層まで攪乱を受けた可能性は十分にある。

## （3）4区東壁③（第109図）

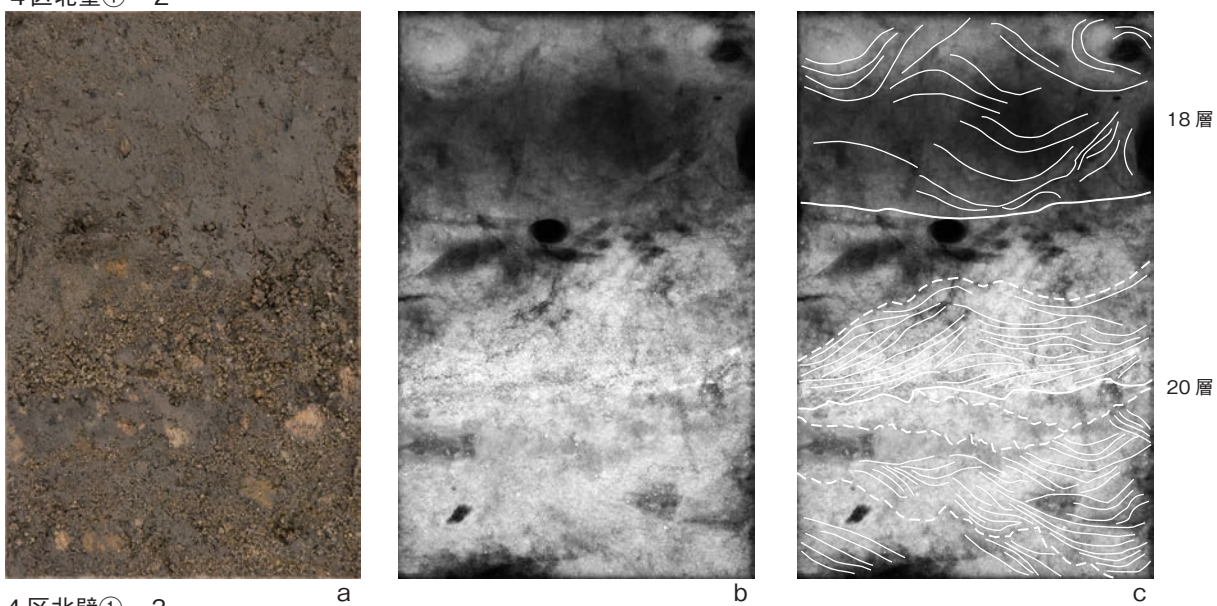
13溝の埋土となる24、26層から採取した試料である（第107図；4区東壁③）。発掘調査の成果から、この溝は4区の北側で検出した東西方向に延びる溝で、弥生時代後期前葉から古墳時代前期初頭の流路と考えられている。本試料の示す層構造と考古層位断面の対比はやや難しい。考古層位断面図



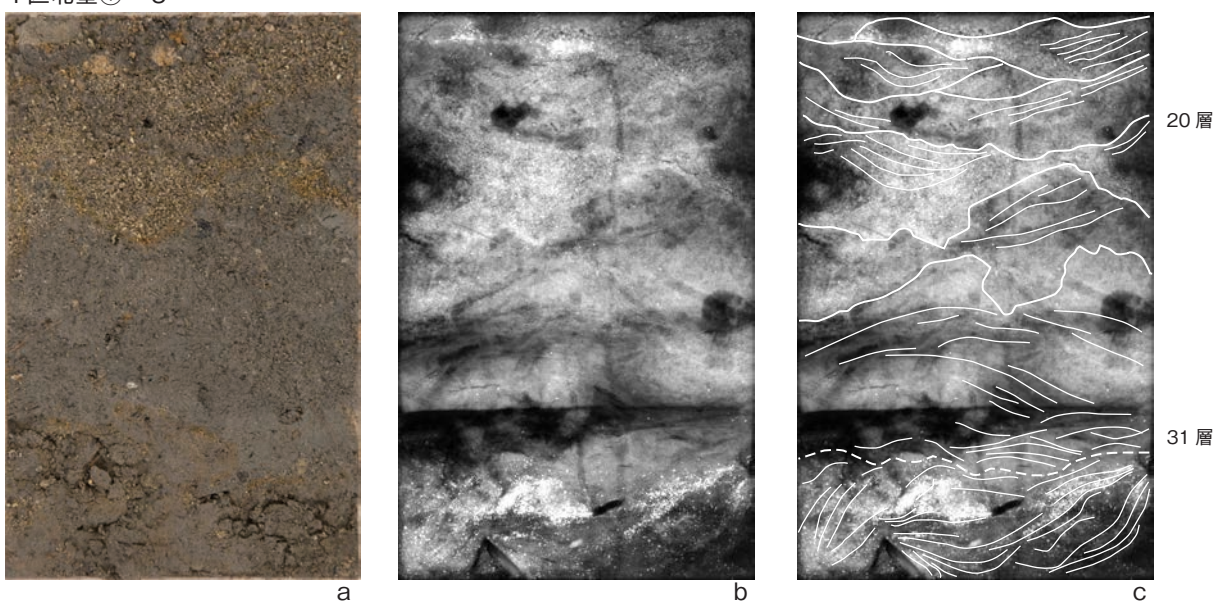
4区北壁①-1



4区北壁①-2



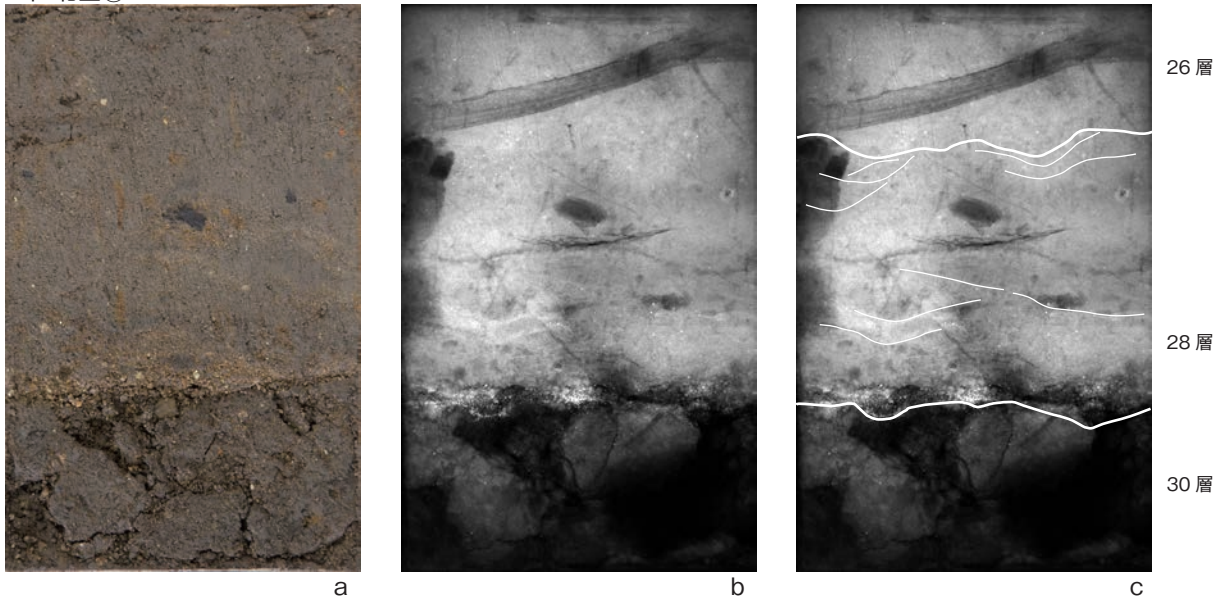
4区北壁①-3



第110図 4区北壁から採取した土壌試料の岩相と軟X線画像（1）



4区北壁②-1



第 111 図 4区北壁から採取した土壌試料の岩相と軟X線画像（2）

では、試料の右端に見える偽礫混砂質泥が24層に相当し、左上端の砂質泥につながる一連の堆積層として考えられている。試料右端に見える24層は、堆積構造や層中に偽礫混暗褐～褐色泥（26層）の偽礫を挟在していることから、26層を浸食していることが分かる。しかし、26層は左上端の砂泥層との間を完全に区切ってしまっており、2つの層の関係をもう少し詳細に検討する必要性を感じる。この問題は、軟X線撮像の観察から指摘できる。画像で示す通り、26層と考えられる堆積物は一般的な水成堆積物とは異なり、極めてシャープな構造を示すだけでなく、試料左下の攪乱層を被覆するように重なる盛土構造を示している。これは、この地点の26層が自然堆積物ではなく、人為的に埋め戻された可能性を示している。

#### （4）4区北壁①（第110図）

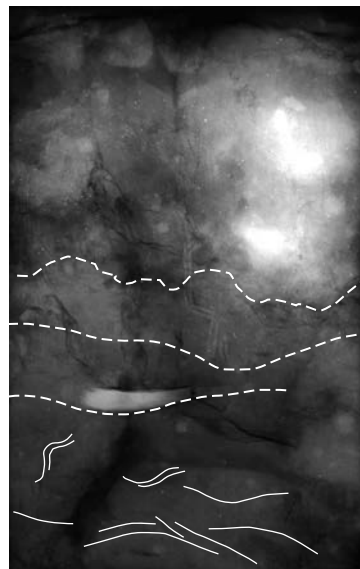
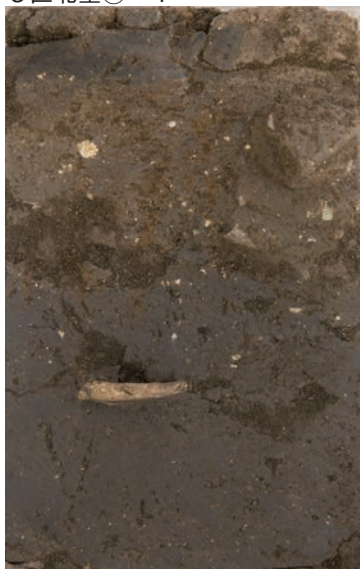
15溝埋土から連続的に8溝（新段階）埋土まで採取した試料である（第107図；4区北壁①-1～3）。発掘調査の成果から、15溝は4区の北西部で検出した南西-北東方向に延びる溝で、弥生時代中期後葉から後期前葉の流路と考えられている。また8溝は4区の北西部で検出した南西-北東方向に延びる溝で、堆積の切り合いから新旧2段階の埋積に区分される。本層は新段階の埋土にあたり、東岸に杭列群を伴う古墳時代前期前半の流路と考えられている。

層相についてみると、まず試料①-3下部に褐色ラミナ層（砂/砂質泥）、その上位に植物遺体群を挟在する細礫混ラミナ層（砂/砂質泥）が堆積する。発掘調査では、この褐色ラミナ層上限で分層し、下位を31層（15溝埋土）、上位を20層（8溝（新段階）埋土下層）としている。層相観察において土色がこの層位で変化している点ではこの分層を支持するが、軟X線撮像で堆積構造についてみると、この分層を貫進してラミナ構造が発達しており、実際には試料①-3中部まで一連の31層堆積物であると考えられる。試料①-3は当該層位で上下層を分けるように亀裂が入っており、それが土中間隙水の移動を容易にし土の酸化を促した結果、土色の変化が発生したと考えられる。このような亀裂は透水層、不透水層間の層理面で発生し易く分層を見つける目印ともなる。しかし当該層は、ラミナの構成物の変化する層位に当たり、堆積物は一連ではあるがこの様なことも発生する点に注意

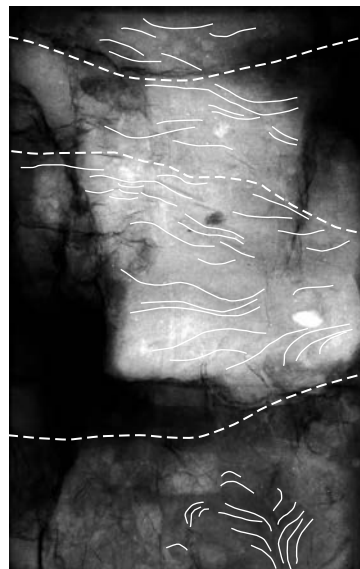
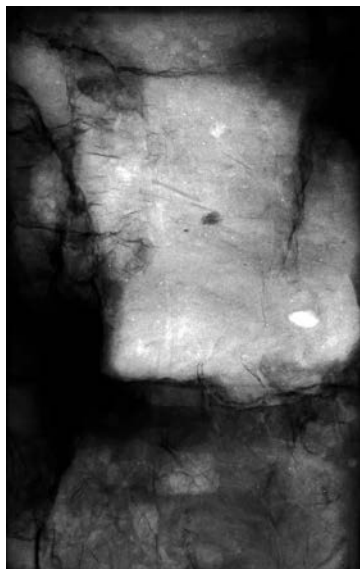




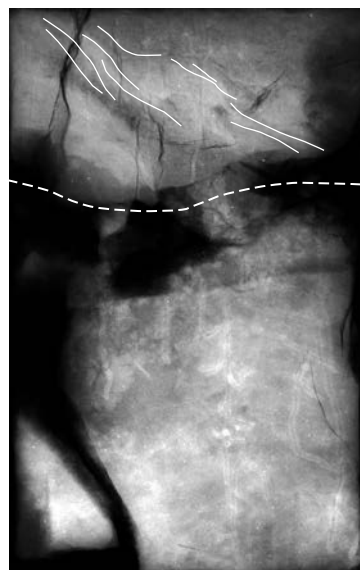
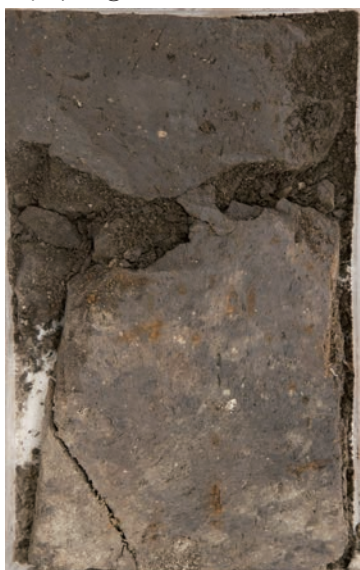
5区北壁①-1



5区北壁①-2

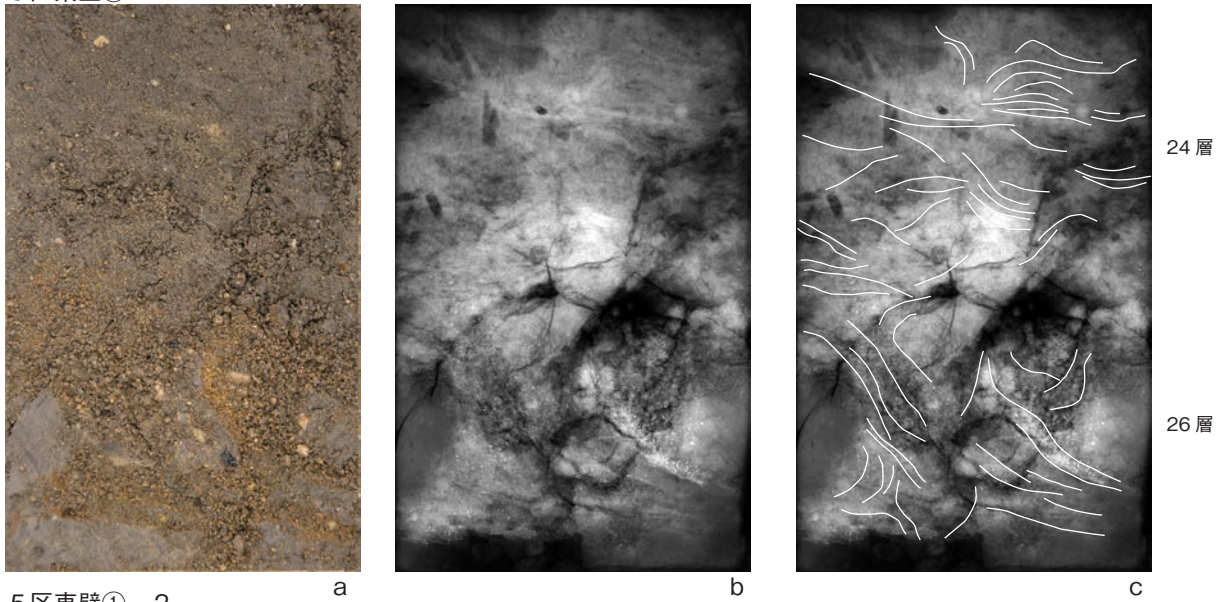


5区北壁①-3

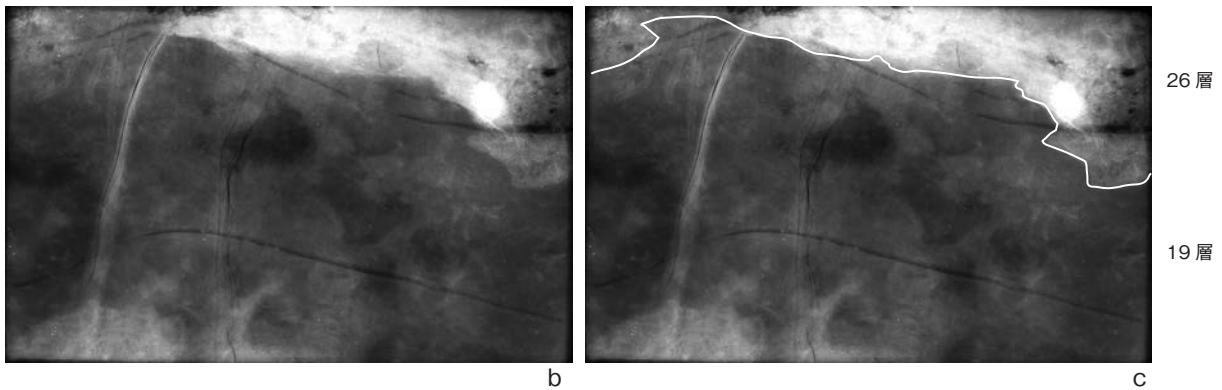


第 113 図 5区北壁から採取した土壌試料の岩相と軟X線画像

5区東壁①-1



5区東壁①-2



第 114 図 5区東壁から採取した土壌試料の岩相と軟X線画像

2中部にみられる植物遺体の集積層が形成される。

同試料上部～試料①-1にかけては、攪乱を受けた堆積構造がみられる。部分的に加重痕跡がみられたり、堆積層の切り合いが生じたりしており、人為活動の影響を受けながら堆積したことが示唆される。微化石群の産状については、15溝の状況とほぼ同一と考えられる。発掘調査による所見とは調和的である。

(5) 4区北壁② (第 111 図)

13溝の26、28、30層について採取した試料である(第 107 図；4区北壁②)。4区東壁③よりも



下位の層にあたる。

層相をみると、試料②-1下部(30層)、中部(26層)、上部(28層)に分層される。30層は偽礫混暗褐色砂質泥からなるが試料の破損が大きく層構造は不明である。28層は僅かにラミナ(砂/砂質泥)構造のみられる偽礫混暗褐～黄褐色砂質泥からなる。偽礫は30層由来も含まれる。26層は、基質を28層と同じくする偽礫を多数挟在する殆ど構造のみられない泥状堆積物と、その下位に単粒構造のみられる。偽礫の供給が多いなど、人為性の影響を強く受けていることが想定される。

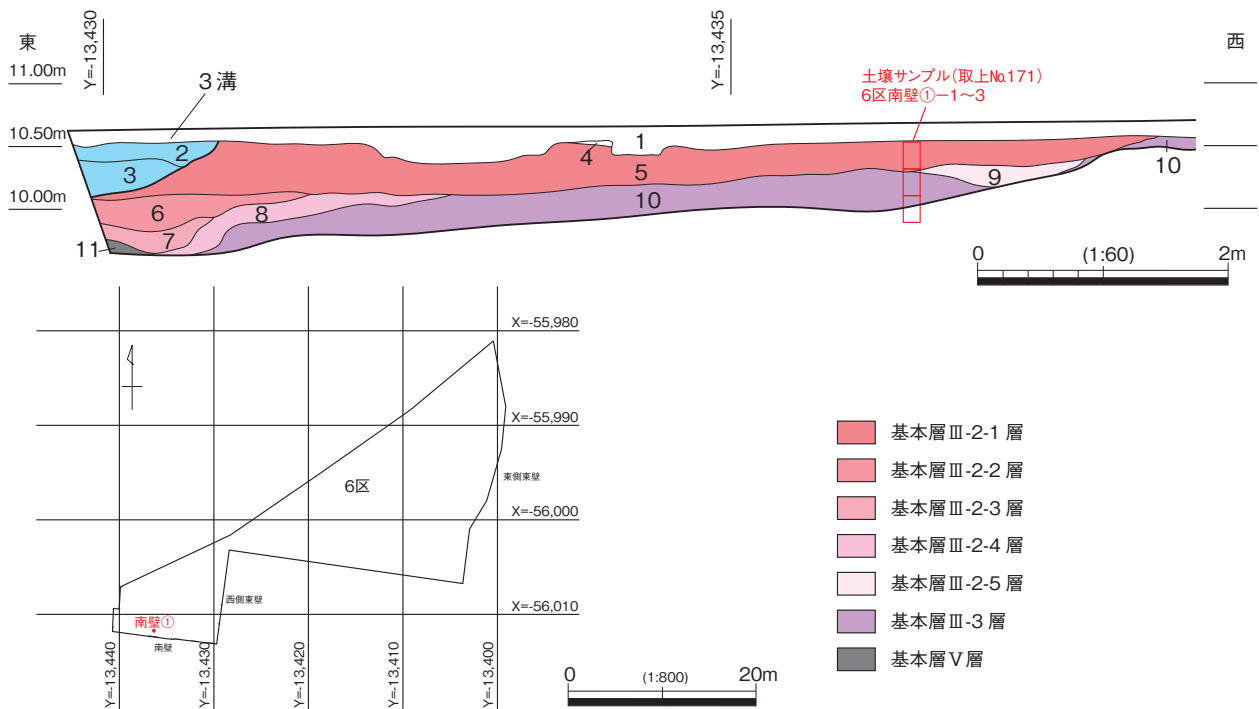
(6) 5区北壁①(第113図)

5層、12層(基本層Ⅰ層)、13・14層(基本層Ⅱ層)、19層(第2遺構面基盤層:基本層Ⅲ層)を鉛直方向に連続的に採取した試料である(第112図:5区北壁①-1~3)。試料は採取時にかなり崩れており、残念ながら堆積構造の詳細は検証しきれなかったが、全体として4区東壁②の堆積構造に類似する。堆積時期もほぼ同時期であり、類似する堆積環境であったと考えられる。

(7) 5区東壁①(第114図)

2溝埋土(24層)、6溝埋土(26層)、19層(基本層Ⅲ層)から採取した試料である。2溝は、5区の中央で検出した東西方向に延びる溝で、6溝、7溝を切る11世紀後葉から12世紀中葉頃の流路と考えられている。6溝は、5区の中央を西南西-東北東方向に伸びる溝で、1溝、2溝に切られる7溝に先行する11~12世紀頃の流路と考えられている。

試料①-2は、ほぼ全体が暗灰～明灰褐色の偽礫を挟在する暗褐色泥からなり、偽礫の混入と攪乱構造を受けた何らかの人為的盛土ないし埋土である。残念ながらその機能、目的は不明である。試料①-1最下部は、19層が砂礫に破碎された構造のみられる。試料①-2最上部および試料①-1中～上部は、ラミナ(砂/砂質泥)のみられる暗褐～黄褐色泥からなる。粗粒部には偽礫を含む。6溝、2溝の層境界は判然としない。むしろ注目したいのは、試料①-1下部から上部に向けた砂礫の構造



第115図 6区土壤サンプル採取位置図

6区南壁①-1



5層

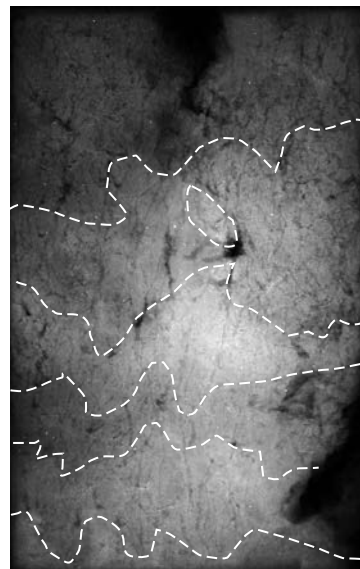
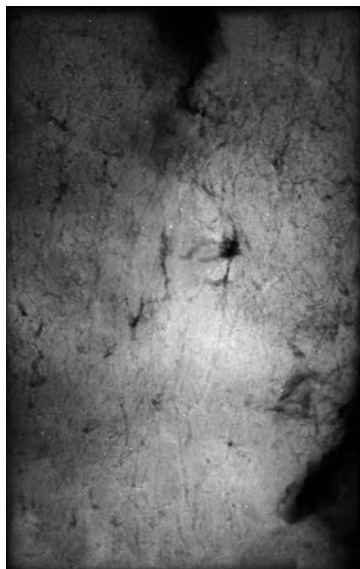
10層

a

b

c

6区南壁①-2



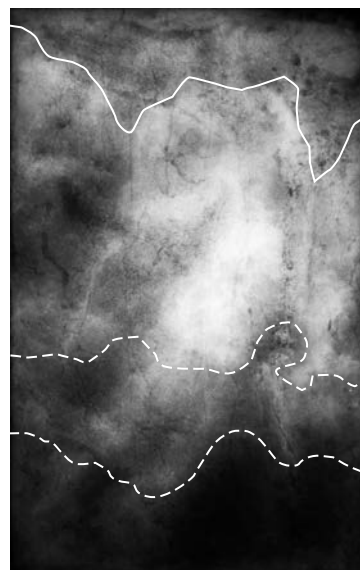
10層

a

b

c

6区南壁①-3



10層

12層

a

b

c

第116図 6区南壁から採取した土壌試料の岩相と軟X線画像

である。下部は19層を貫進し、少なくとも試料①-1中部まで鉛直方向に砂質泥層を断ち割る。軟X線撮像からはロード構造や脱水構造がみられ、液状化に伴う砂脈である可能性がある(Matsuda,2000)。この砂礫は試料①-1中部で水平に広がっており、これが噴砂頂部であるならば、2溝底部はこの砂礫上面に当たる可能性がある。

#### (8) 6区南壁① (第116図)

基盤となる地山層から連続的に10層(基本層Ⅲ-3層)、5層(基本層Ⅲ-2-5層)から採取された試料である。弥生時代後期から古墳時代前期初頭の遺物包含層である。

層相観察、軟X線撮像の結果から、地山も含め全体として攪乱構造が継続的に観察され、人為攪乱を恒常的に受けたことが示唆される。最下層となる地山には黄灰褐～暗黄灰褐色砂混泥が堆積するが、層相から火山灰粒子の再堆積が想定され、上位の土壌層とは堆積時期に大きな開きがある可能性がある。5層と考えられる試料①-3最上部から試料①-2には暗褐～褐灰色砂質泥が堆積する。軟X線撮像から層理面としては不明瞭であるが、硬化面とその直下の単粒状構造の繰り返しがみられる。この硬化面付近の堆積物は比較的大きな団粒構造を成しているものが多く、前出した水田のもつ堆積構造とは異なるが、何らかの耕作地であった可能性がある。

## 4 まとめ

全体の地形としては、氾濫原低地の一部として認識される本遺跡であるが、実際にはどの場所も人間活動の影響を強く受けていたことがわかる。特に溝状遺構については、単に集水域に発達した水路が分布しているのではなく、堆積構造や珪藻化石群集の解析から排水を目的とした遺構であった可能性が示唆された。残念ながら水田遺構の積極的な認識には至らなかったが、氾濫原低地の活用は基本的に水涵養ではなく排水に重きを置く。この基本的な地形認識が当時から成され、地形に手を入れながら生活域を形成していったことが認識される。

また、地震の痕跡と思われる構造が認められた。堆積物中に記録される災害の痕跡は、その土地の履歴を示し、今後の我々の生活へも活用される情報である。当調査のみならず、周辺の遺跡からも地震痕跡が発掘調査の際に発見されてきており、いずれそれらをまとめ発生時期の特定等を進めたい。このような情報を集積できる考古学の発掘調査という手法は、今後、防災や減災への基盤事業をも担うことに成り得る。災害痕跡の記録・調査方法の検討が必要となってくるだろう。

## 引用文献

斎藤万之助 1971. 水田土壌の構造. 土壌の物理性 (25),28-32.

山根一郎編『水田土壌学』

Matsuda, J., 2000. Seismic deformation structures of the post-2300a BP muddy sediments in Kawachi lowland plain, Osaka, Japan. *Sedimentary Geology*, 135, 99-116.



## 第7章 総括

### 第1節 弥生時代後期から古墳時代前期の集落と4区流路・杭列群

#### はじめに

大柵遺跡は、縄文時代晩期から中・近世にかけての複合遺跡で、鳥取県東部の重要遺跡として認知されている。そのうち、弥生時代後期から古墳時代前期にかけては、集落及び墓域の存在が知られていた。この時期の遺構は、低地部から丘陵部に近い部分で検出されており、今回の4～6区の調査においても、比較的丘陵に近い部分での調査であったことから、当該期の遺構・遺物が検出され、この時期の集落像をより把握できるようになったと考える。古墳時代の集落域は、平成26・27年度の調査によって中期まで存続していることが判明しているが、ここでは4～6区の主な集落遺構の時期である弥生時代後期から古墳時代前期の集落及びそれを取り巻く流路の様相について、既往の調査成果も踏まえて触れることとする。

なお、本稿で示す時期区分及び各編年案との併行関係は、第32表のとおりと考える。

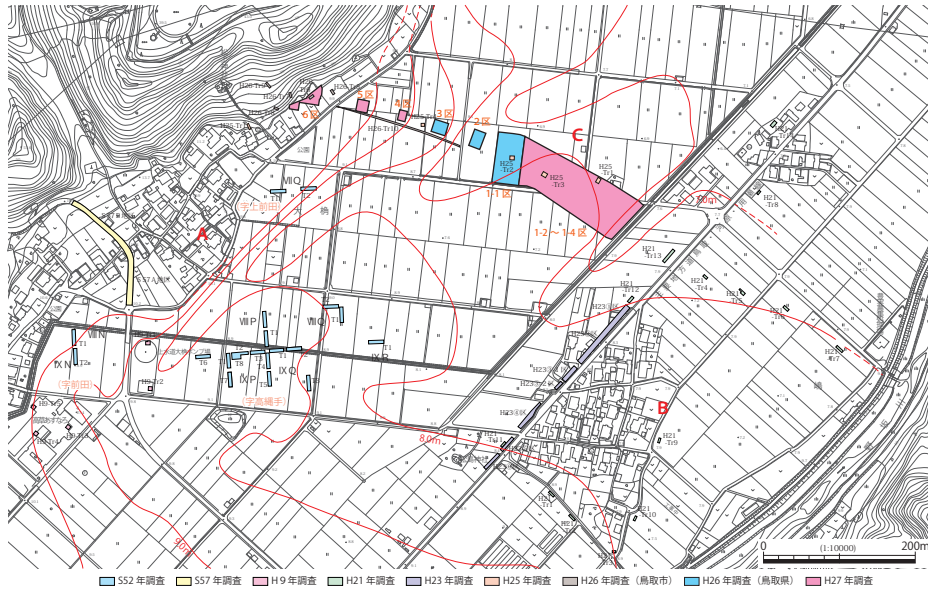
#### 第1項 大柵遺跡の地勢

まず、大柵遺跡の地勢について簡単に触れることとする。大柵遺跡は、野坂川によって形成された沖積地及び低位段丘から丘陵裾部に立地する遺跡であることが知られているが、圃場整備前の低地の地形をみると、1-1～1-4区から宇高縄手付近にかけては微高地状になり、両脇には旧河川が存在したであろう等高線の流れがみられる（第117図）。さらに、平成26年から一般国道9号（鳥取西道路）関連の発掘調査が行われ、堆積環境の変遷とともに微細な地形の変化も捉えることができる

第32表 弥生時代後期から古墳時代前期の時期区分

時期区分			土井1986	谷口1991	清水1992	松井1997	牧本 1994・1999	谷口2000	濱田2003
弥生時代	後期	前葉	阿弥大寺Ⅰ期	岩吉Ⅱ期（古）	V-1	V期	大山Ⅰ期	因幡V-1期	V-1期（古） V-1期（新）
		中葉	阿弥大寺Ⅱ期	岩吉Ⅱ期（新） 岩吉Ⅲ期（古）	V-2	Ⅵ期		因幡V-2期 因幡V-3期	V-2期（古） V-2期（新）
		後葉	阿弥大寺Ⅲ期	岩吉Ⅲ期（新）	V-3	Ⅶ期 Ⅷ・Ⅸ期	大山Ⅱ期	因幡V-4期 因幡V-5期	V-3期
	終末期	前半	上種第5貯蔵穴7号ほか	岩吉Ⅳ期	Ⅵ-1	X期	大山Ⅲ期	因幡Ⅵ-1期	
		後半	東高江2号貯蔵穴、 掘塚第2号貯蔵穴ほか	岩吉Ⅴ期（古）	Ⅵ-2	XⅠ期	大山Ⅳ期	因幡Ⅵ-2期	
	古墳時代	前期	初頭	宮ノ下4・6号住居址	岩吉Ⅴ期（新）		XⅡ期	天神ⅢⅠ期 （大山Ⅴ期）	因幡Ⅵ-3期
前葉			宮ノ下3B・7号住居址ほか	岩吉Ⅵ期（古）		XⅢ期	天神ⅢⅡ期	因幡Ⅶ-1期	
中葉				岩吉Ⅵ期（中）		XⅣ期	天神ⅢⅢ期	因幡Ⅶ-2期	
後葉				岩吉Ⅵ期（新）			天神ⅢⅣ期		





第 117 図 大桝遺跡周辺地形図（本書第 8 図と鳥取市教育委員会 1978 挿図 3 を改変・合成して転載）

ようになってきた。沖積地（1-1～1-4区、2区）の詳細な地勢については、『大桝遺跡Ⅰ・Ⅲ』の報告書に譲ることとするが、概ね縄文時代晩期以降に河川性堆積が進行して沖積平野が形成され、弥生時代前期以降に水田耕作が行われるようになり、微高地状の区域には弥生時代後期以降に集落が造営されるようになったものと考えられる。

これに対して3区から西側の部分は、ローム層が基盤層となる地質となっている。3区では上部が圃場整備により掘削・削平されており、大山倉吉軽石層（DKP）上に堆積する大山上部火山灰層（ハードローム層）が基盤層であった。4区・5区では地下水位が高くなっているために変質しているが、ソフトローム層相当と考えられる粘質土が検出されている。2区以東が沖積性の堆積層が基盤になることを考えると、2区と3区の間で大きな地形の変化があったものと指摘されている。また、4区や5区で等高線に直交する東西方向の流路が検出されていることから、現状では窺えない微地形の変化があったものと考えられる。

## 第 2 項 弥生時代後期から終末期の集落の様相

圃場整備及び道路拡幅に伴う調査が、昭和 52・57 年に鳥取市教育委員会によって行われている。平成 27 年度調査区の南西約 500 m 付近の丘陵裾部と中州状微高地において、弥生時代後期から終末期の竪穴建物跡 1 棟（IX P T4 SI002）、貯蔵穴 10 基（A 区 SK01～10）、土坑や溝といった居住域の存在を裏付ける遺構・遺物が検出された（鳥取市教育委員会 1978、同 1983）。

鳥取西道路関連の調査においても、当該期の遺構・遺物が多数みついている。1-1 区では、8 面で終末期の北西-南東方向を指向する溝 6 条（1-1 区 831・833～837 溝）を検出した。2 区では、5・6 面で終末期の竪穴建物 1 棟（2 区竪穴建物 1）、後期から終末期の土器を多量に含む溝 1 条（2 区 50 溝）、後期の土坑 8 基（2 区 53・54・56・58・66・78・85・88 土坑）などを検出した。2 区竪穴建物 1 は長軸 6.3 m を超える大型のもので、4 本柱の主柱穴をもつ。2 区 66 土坑・50 溝からは、

北近畿系土器がまとまって出土している。3区では、後期後葉の布掘建物1棟（3区布掘建物1）、終末期前半の土坑1基（3区20土坑）などを検出した。3区布掘建物1は、調査区外に延びているため建物規模の詳細は明らかではないものの、桁行3間以上（8.2 m以上）、梁行2間（4.1 m）を測る大型建物である。3区20土坑では、北近畿系土器を含む多量の土器が出土している。

以上のように、この時期の集落域は、丘陵裾部（A）（註1）から低地部分（C）中央西寄りにあり、複数の集落が分布していたと推察される。弥生時代後期後葉から終末期にかけて、当遺跡において北近畿系土器が多数出土しており、当遺跡と北近畿地域との強い関係性が窺われる。

当遺跡を見下ろす西側の丘陵頂部には里仁古墳群があり、弥生時代後期後半の墳丘墓が3基確認されている（里仁1～3号墓）。このうち、里仁1号墓は長辺21 m、短辺17.5 m、高さ1.8 mの規模で、41基の埋葬施設を有し、平坦面沿いの墳丘斜面を中心に貼石が認められる。墓壙上には供献土器や標石が認められ、供献土器には北近畿系土器が顕著に認められる。立地や出土土器から、大柵遺跡との関連が窺われよう。

### 第3項 古墳時代前期の集落の様相

圃場整備等による調査では、古墳時代前期初頭の竪穴建物1棟（IX P -T2・8 SI001）、土壙墓群（B区SX01～11）、前期後葉の竪穴建物1棟（B区SI1）が検出された。

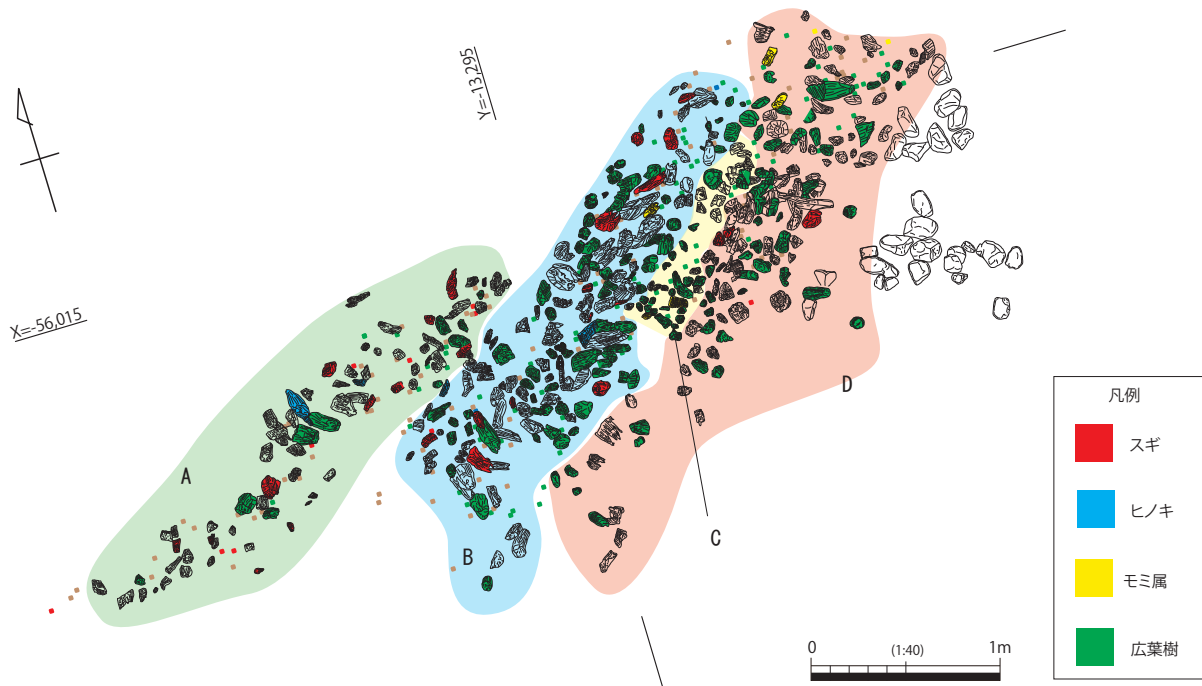
鳥取西道路関連の調査においても、当該期の遺構・遺物が多数みついている。1-1区では、6面で前期後葉の竪穴建物2棟（1-1区竪穴建物1・2）など、2区では、4面で前期前葉から後葉の竪穴状遺構2基（2区32・33竪穴）、土坑3基（2区31・39・40土坑）など、4区では、第2遺構面で前期初頭から中葉の集落際を区画するものと考えられる溝1条（4区9溝）など、6区では、第2遺構面で前期前葉の竪穴建物2棟（6区竪穴建物1・2）を検出した。

集落域は、この時期においても前時期同様に丘陵裾部から低地部中央西寄りにあり、このうち前期初頭には、集落と墓域が近接して検出されている。竪穴建物の特徴をみると、前期初頭のIX P -T2・8 SI001は隅丸方形プランと推定される4本柱、前期前葉の6区竪穴建物2は長方形プランの2本主柱という形態をなしている。後者は、この地域に特徴的な形態である。前期後葉になると、仕切り溝をもつ、いわゆる特殊ピットを備える建物（B区SI1、1-1区竪穴建物1・2）が現れている。平面形は、長方形のものと方形のもの両方がみられる。

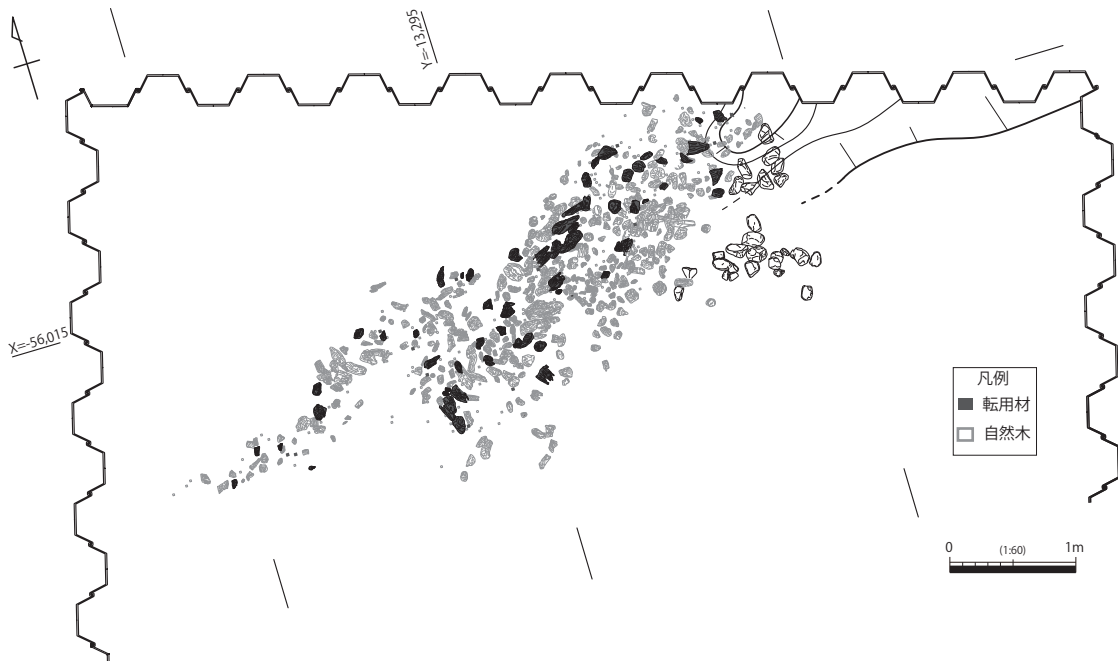
上記のように、弥生時代後期以降、丘陵裾部においては弥生時代後期前葉には集落が形成され、低地部においては弥生時代終末期前半には安定した地勢となり、集落域も広がって複数の集落が形成されるようになったと考えられる。このような状況は、古墳時代以降も同様と考えられ、集落域の周辺には水田が広がる景観をなしていたと考えられる。

### 第4項 4区の流路・杭列群について

さて、4区では、調査区北側部分において、15溝（弥生時代中期後葉から後期前葉）、13溝（弥生時代終末期から古墳時代前期初頭）、8溝（古段階・新段階：古墳時代前期初頭から中葉）、7溝（古墳時代前期中葉から後葉）とした流路を検出した。これらの流路については、調査区内の一部で確認



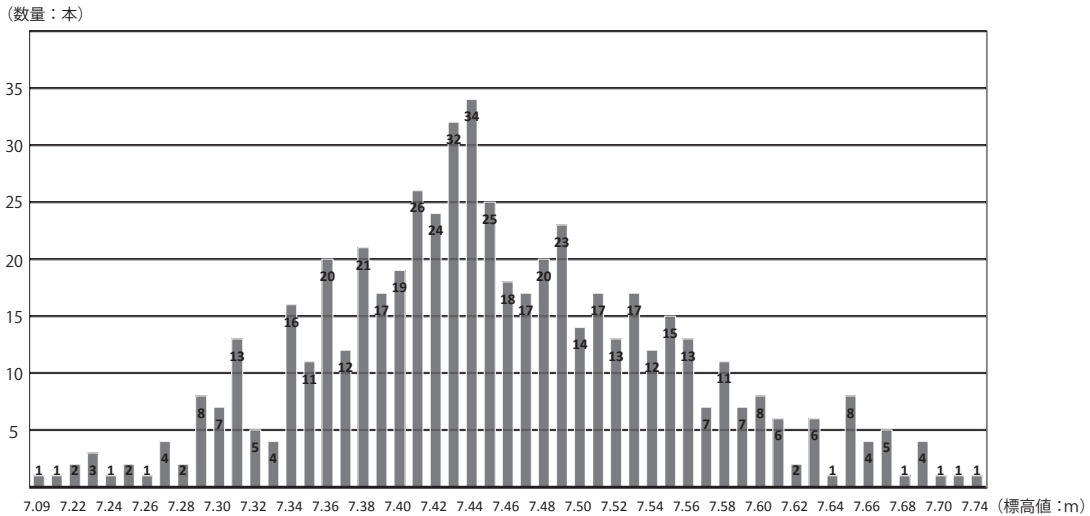
第 118 図 大楠遺跡 4 区杭列群樹種別分布図



第 119 図 大楠遺跡 4 区杭列群転用材分布図

したもので、全形が不明な上、流路肩部に当たる南側が現代用水路による攪乱で破壊されており、流路の形状・規模が把握できない状況であった。一方、流路の変遷については、土層断面の観察や出土遺物の検討によって、15溝→13溝→8溝（古段階）→8溝（新段階）→7溝の順をたどることができた。

これらのうち、人の手が加えられた痕跡が残るのは8溝（古段階・新段階）で、564本の杭が打設されていた。調査段階では、全ての杭が8溝に帰属するものとし、平面分布によってA～Dの杭列群



第120図 大柵遺跡4区杭列群上端標高別分布図

を想定して調査を行った（第3章第3節）。しかし、これらの杭列群を評価するためには、先行する13溝との関わりについても整理する必要がある。そのため、ここでは検出層位・種類・標高の差にも着目し、杭列群について改めて考察することとする。

まず、杭の打設層位についてみる（第19図）。8溝（新段階）の埋土上層（1層）中に杭上端が飛び出すものがあり、8溝（新段階）において打設された杭が存在することは明らかである。ただし、大半の杭は、8溝（新段階）の基盤層に当たる8溝（古段階）埋土中（5層）または5層堆積以前の13溝埋土中に杭上端が位置する。杭下端は、地山であるIV層まで達しているものがほとんどで、斜めに打設されるものもあったが、大半はほぼ垂直方向に打設されていた。

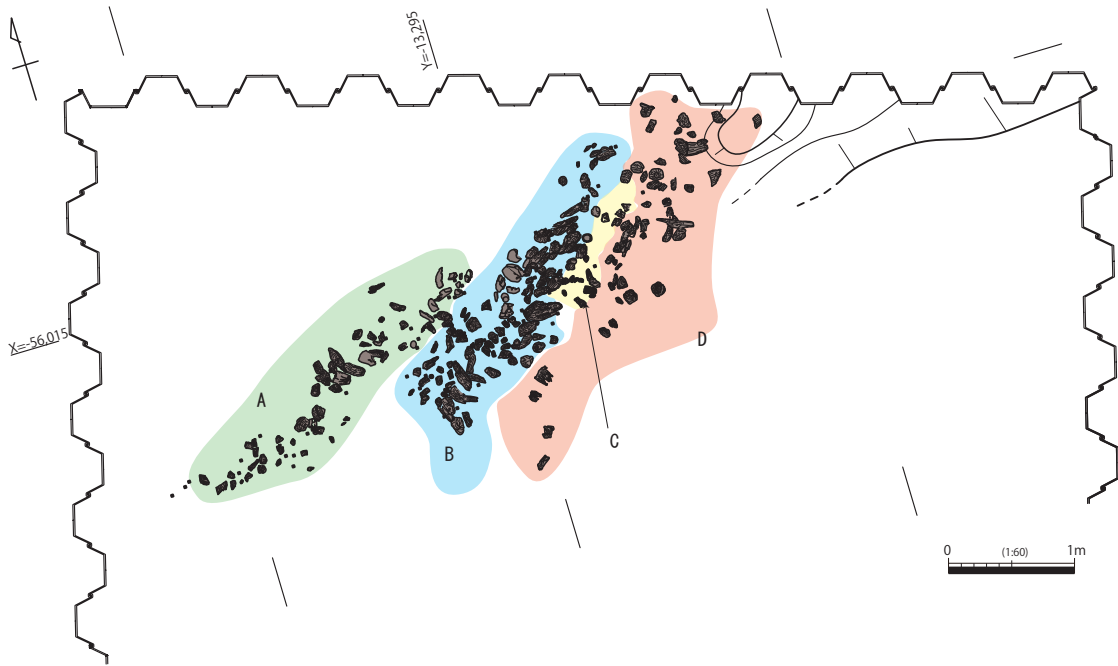
杭の形状をみると、建築材などを転用した棒状の再加工材と樹皮が残る先付けした自然木がみられ、大型のものがあるが、大半は棒状のものが多く、矢板のような扁平幅広の板材は僅かであった。転用材とそれ以外の杭の分布をみると第119図のようになり、打設には特に際立った傾向はなく、自然木の杭と転用材の杭を混在して打設しているものと考えられる。

また、調査時にも注意していたが標高の違いに注目してみると、杭上端の標高は最高7.74 m、最低7.09 mとなり、標高の平均値は約7.45 mとなる。標高別の分布状況を見ると、標高7.44 mをピークに第120図のようになる。標高7.45 mは8溝（古段階）の底面標高とほぼ一致しており、標高の分布差が、8溝（古段階）前後の時間差を示している可能性がある。厳密には区別することはできないが、8溝（新段階）と合わせて、少なくとも3段階に打設された可能性が指摘できよう。

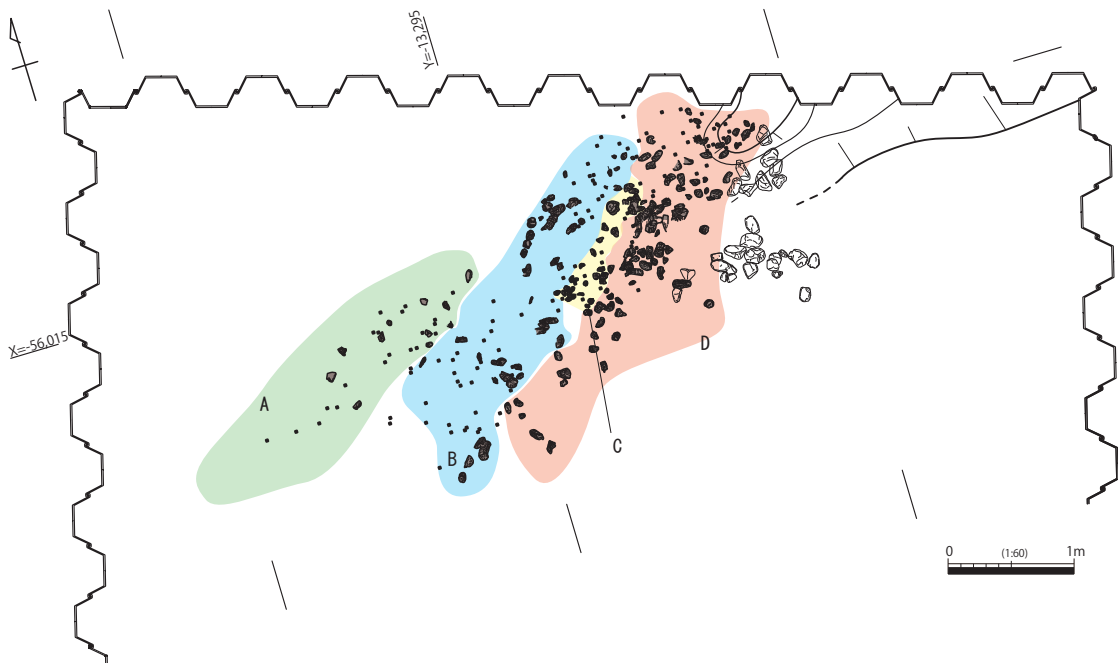
以上を勘案すると、これらの杭列の多くは8溝（新段階）の東岸基盤層中に打設されていることから、8溝（新段階）が機能していた以前に大部分の杭が打設されていた可能性が高く、このうち標高7.45 m以上のものは8溝（古段階）に伴う可能性が指摘できる。この場合、8溝（古段階）に伴う杭列群は流路内から肩部にかけて分布することとなる。なお、この時期の杭には、建築部材などを転用、再加工したものが比較的多く使用され、樹種が判明したものにはスギ・ヒノキといった針葉樹系の樹種が多数を占めていることが指摘されている（第6章第2節参照）。廃材を有効活用したものと考えられ、以下に述べるように、前段階までの打設原理とは異なる傾向が窺われる。

一方、古相を示すと思われる標高7.44 m以下のものは、13溝に伴うものが多いと思われ（第122図）、





第 121 図 大柵遺跡 4 区杭列群（標高 7.45 m 以上）分布図



第 122 図 大柵遺跡 4 区杭列群（標高 7.44 m 以下）分布図

転用材はほとんど認められず、樹皮が残る先付けした自然木が多く使用されていた。樹種同定の結果、広葉樹系の杭が多数を占めることが判明しており、打設するために近辺から自然木を伐採したものと考えられる。

13 溝は、後世の溝や用水路に大きく破壊されているために全体像は明らかでないが、流路の方向は概ね東西方向を指向すると考えられる。調査範囲の制限により不明な点はあるが、これらの流路に伴って打設されたと推定される杭の平面分布は、概ね南西－北東方向、つまり流水に対して斜行して

打設されていることになる。この段階の杭は、埋土との関係から護岸として打設されたものとは考えにくい。

ところで、杭の放射性炭素年代測定を行った結果をみると、7.45 m以上の4点は、それぞれ  $1820 \pm 20\text{BP}$  (127-251calAD：取上番号542)、 $1830 \pm 20\text{BP}$  (128-241calAD：取上番号629)、 $1830 \pm 20\text{BP}$  (126-245calAD：取上番号874)、 $1840 \pm 20\text{BP}$  (90-100,124-237calAD：取上番号950) の年代値が得られている(第6章第1節)。また、7.44 m以下の4点は、それぞれ  $1830 \pm 20\text{BP}$  (127-241calAD：取上番号518)、 $1870 \pm 20\text{BP}$  (80-222calAD：取上番号780)、 $1850 \pm 20\text{BP}$  (86-108,119-235calAD：取上番号910)、 $1840 \pm 20\text{BP}$  (89-102,123-238calAD：取上番号1042) の年代値が得られている。前者は概ね2世紀前半から3世紀半ば(弥生時代後期中葉から古墳時代前期初頭頃)、後者は概ね1世紀後半から3世紀前半(弥生時代後期前葉から弥生時代終末期頃)で、7.44 m以下のものがごく僅かに古相の年代を示す。出土土器からみた13溝の時期が弥生時代後期前葉から古墳時代前期初頭、8溝(古段階)の時期が古墳時代前期初頭であることと比較すると、いずれも放射性炭素年代測定で得られた年代幅の中に収まっていることが分かる。また、このことは、13溝が機能した段階及び8溝(古段階)が機能した段階にわたって、これらの杭列群の大部分が打設されたと考えたこととも調和的である。

## 第5項 県内出土護岸施設との比較からみた杭列群の用途

4区で検出された多量の杭列群については、前述のとおり、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて少なくとも3段階に分けて打設されたものと考えられる。柱などの構造材を割って転用した材も使用されるが、大半は自然木を先付け加工した杭が使用され、明確に列状をなすものではなく、乱杭状にはほぼ垂直に打設されている。県内で確認されている、縄文時代晩期から古墳時代前期の他の護岸施設と認識されているものや土留めとされるもの(第123図、第33表)とは異なる形態であることが特徴で、管見に触れる限り、県内では他に類例がない形態である。

青谷上寺地遺跡、本高弓ノ木遺跡、高住井手添遺跡などで検出されている護岸等の施設は、ほとんどの場合に建築材転用の横長使用材が伴う。加えて、本高弓ノ木遺跡、高住井手添遺跡例のように樹皮を用いて強固に護岸工を施しているものがあり、これらは流水による岸の崩壊を防ぐ意図が容易に窺える。

しかし、大柵遺跡4区杭列群の場合は、本来上部に横長使用材があったものが失われた可能性があるものの、現状では横長使用材はなく杭だけの構成となっている。13溝に打設された杭は、流路内に打設されていることから護岸としての性格は考えにくいであろう。この杭列群が灌漑目的である場合、菅原分類による導水施設の流水調整形態としての乱杭堰形態の杭列のみによるタイプ又は分水施設の杭列分水形態に分類されよう(菅原1980)が、流路の形状に不明な点が多いため、ここでは結論を保留しておく。現状では灌漑目的以外の用途も視野に入れておく必要がある。一方、8溝(古段階・新段階)に打設された杭は、流路の東岸に位置することから、簡易な護岸としての性格も考えられる。

古墳時代前期には、4区の東側と南側はおそらく居住域になっているものと考えられ、このことは古墳時代前期前葉に集落際を廻ると考えられる区画溝(9溝)が存在することからも窺える。8溝(新

第33表 鳥取県内の主な堰・護岸遺構（縄文時代～古墳時代）

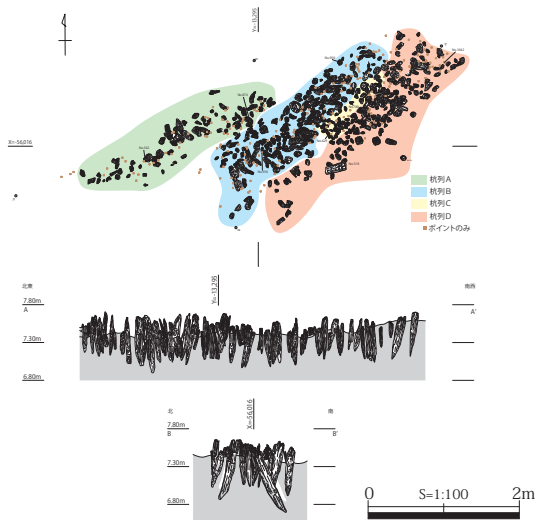
遺跡名	遺構名	用途	使用材の形状	時期	備考
大桝遺跡4区	杭列群	流水調節・護岸	杭（転用材、自然木）	弥生時代後期 ～古墳時代前期前葉	
本高弓ノ木遺跡3区	溝8・9、杭列・構造物群	導水施設	杭（転用材、自然木）+矢板（転用材）+横長使用材（転用材、自然木）+石積み	古墳時代前期中葉	
本高弓ノ木遺跡5区	2溝内木製構造物1・2・3	堰	杭（自然木）+横長使用材（自然木）	古墳時代前期中葉	
	4落ち込み木製構造物	水利施設	杭（転用材、自然木）+横長使用材（転用材、自然木）+樹皮+土囊+盛土+石積み	古墳時代前期中葉	
	776溝内木製構造物	堰？	杭（自然木？）+横長使用材（自然木？）	弥生時代終末期	
	710溝内木製構造物1	不明	杭（自然木？）+横長使用材（自然木？）	弥生時代前期～中期中葉	
	710溝内木製構造物2	不明	杭（自然木？）+横長使用材（自然木？）		
	710溝内木製構造物3	不明	杭で二股木材を固定		
	710溝内木製構造物4	不明	杭（自然木？）		
	710溝内949構造物	水利施設	杭（自然木？）+横長使用材（自然木？）		
高住井手添遺跡	14溝	護岸	杭（転用材、自然木？）+矢板（転用材）+横長使用材+樹皮	弥生時代中期後葉	
	26溝	護岸	杭（転用材、自然木）+横長使用材（転用材）+樹皮	弥生時代中期後葉	
	28溝	護岸	杭（自然木）+横長使用材（転用材）+樹皮	弥生時代中期後葉	
	4溝	堰	杭+横木（自然木）	縄文時代晚期	
良田中道遺跡	55溝・59木組み	護岸？	杭+横長使用材+一部樹皮	古墳時代前期初頭	
	65溝	護岸？	杭+横長使用材（転用材）	古墳時代前期初頭	
	1032溝・木造構造物1・2	護岸・流水調節	矢板・杭（自然木）+横長使用材（転用材）+一部樹皮	弥生時代後期？	
青谷上寺地遺跡	SD11	護岸・矢板列	杭（転用材、自然木）+横長使用材 矢板（転用材）	弥生時代後期 ～古墳時代前期初頭	
	SD17	護岸	杭（転用材、自然木）+矢板（転用材）+横長使用材+樹皮？	弥生時代終末期	
	SD20	護岸	杭（転用材、自然木）+矢板（転用材）+横長使用材	弥生時代終末期	
	SA1～6	土留め	杭（転用材、自然木）+矢板（転用材）+横長使用材+礫	弥生時代終末期	
	SD27・SA11	護岸	杭（転用材、自然木）+矢板（転用材）+横長使用材+礫	弥生時代中期中葉～後葉	
	SD33	護岸（矢板列）	杭（転用材、自然木）+横長使用材 矢板	弥生時代後期 ～古墳時代前期初頭	
	SD38	矢板列・護岸？	杭+横長使用材 矢板（転用材？）	弥生時代後期後葉 ～古墳時代前期前葉	
	SA15～17	土留め	杭（転用材、自然木）+横長使用材（転用材）	弥生時代後期後葉 ～古墳時代前期前葉	
	SA21・22	土留め	杭（転用材、自然木）+横長使用材（転用材）	弥生時代後期後葉 ～古墳時代前期前葉	
	SA24	土留め	杭（転用材、自然木）+横長使用材（転用材）	弥生時代後期後葉 ～古墳時代前期前葉	
	SD67	護岸？	杭+横長使用材	弥生時代後期	
目久美遺跡（18次調査）	水路3護岸遺構	護岸	丸木・角材杭+横長使用材（転用材）	弥生時代後期前葉	

段階）が、9溝と平行するように北東側へ流路の進路が変更されていることも、居住域の動向と無関係ではなからう。

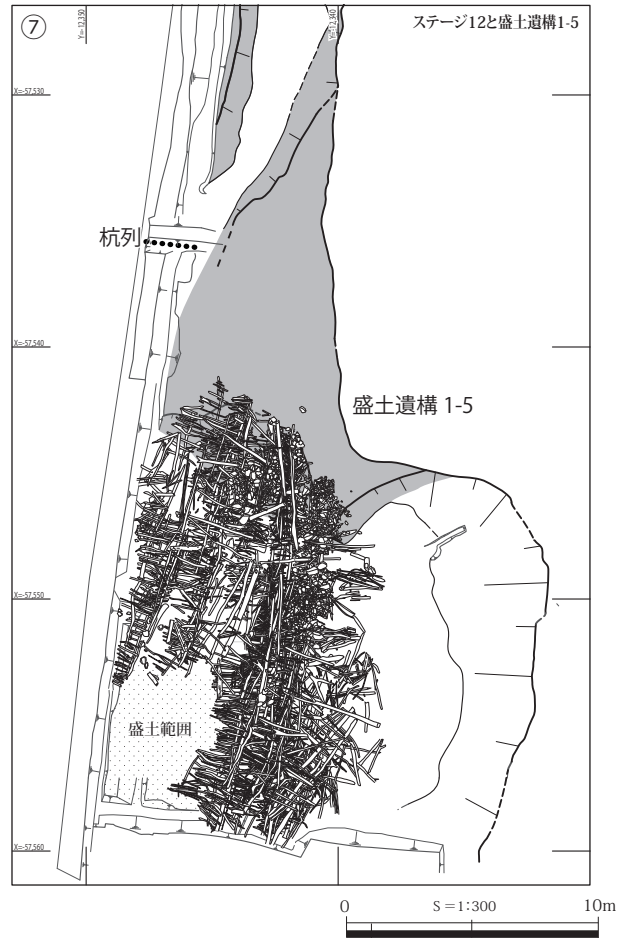
この杭列群は、13溝機能時は流水調整する機能を有していたと考えられ、当初は水田耕作のための灌漑目的で設置された可能性がある。しかし、その後、居住域の拡大等に伴う土地利用の変化によって、居住域に影響が出ないように流路の方向を変える必要が生じたのであろう。その結果、8溝（古段階）及び8溝（新段階）への変遷につながる杭列群の補強が繰り返され、最終的に564本の杭列群として残されたと考えられる。



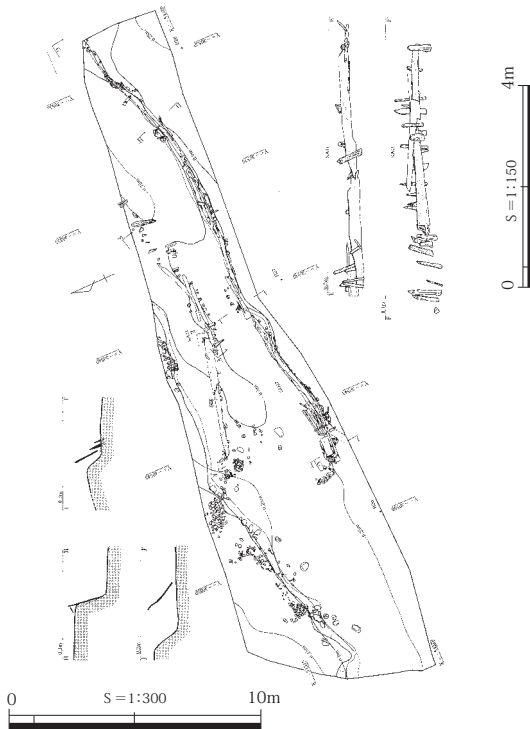
大柵遺跡4区 杭列群



本高弓ノ木遺跡5区4落ち込み 木製構造物・盛土遺構1-5



青谷上寺地遺跡 第1次国道3区 SD27・SA11



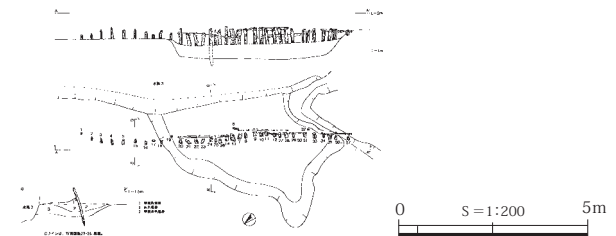
青谷上寺地遺跡 第1次県道4区 SD11・木造構造物



高住井手添遺跡 26溝 木製構造物



目久美遺跡 第18次 護岸遺構



第123図 鳥取県内の主な堰・護岸遺構 (各報告書から一部改変・転載)

## 第7章 総括

### 註

(1) アルファベットは、第2章第3節 (pp.16-18) に示したエリアに対応する。

### 参考文献

- 井上智博 2002 「弥生時代の井堰に関する予察」『池島・福万寺遺跡2』(財)大阪府文化財センター  
(財)鳥取県教育文化財団 2000 『青谷上寺地遺跡1』  
(財)鳥取県教育文化財団 2000 『青谷上寺地遺跡2』  
(財)鳥取県教育文化財団 2001 『青谷上寺地遺跡3』  
(財)鳥取県教育文化財団 2002 『青谷上寺地遺跡4』  
(財)米子市教育文化事業団 2011 『目久美遺跡(第16次～第18次調査)』  
清水真一 1992 「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社  
菅原康夫 1980 「弥生系農業における水利施設の意義と展開(上・下)」『古代学研究92・93』古代学研究会  
谷口恭子 1991 「第4章まとめ 第2節遺物について 土器」『岩吉遺跡Ⅲ』鳥取県教育委員会・鳥取市遺跡調査団  
谷口恭子 2000 「因幡における弥生時代後期から庄内式併行期の土器について」『庄内式土器研究XⅡⅡ-庄内式土器併行期の土器生産とその動き-丹波・丹後・但馬を中心とした庄内式併行期の土器の移動』庄内式土器研究会  
土井珠美 1986 「鳥取県の状況」『弥生時代後期から古墳時代初頭のいわゆる山陰系土器について』第18回埋蔵文化財研究会事務局  
鳥取県教育委員会 2013 『本高弓ノ木遺跡(5区)Ⅰ』  
鳥取県教育委員会 2015 『良田中道遺跡』  
鳥取県教育委員会 2015 『高住井手添遺跡』  
鳥取県埋蔵文化財センター 2006 『青谷上寺地遺跡8』  
鳥取県埋蔵文化財センター 2009 『青谷上寺地遺跡10』  
鳥取県埋蔵文化財センター 2011 『本高弓ノ木遺跡(1～3区)』  
鳥取県埋蔵文化財センター 2012 『青谷上寺地遺跡12』  
鳥取県埋蔵文化財センター 2014 『青谷上寺地遺跡13』  
濱田竜彦 2003 「大山地域における弥生時代後期土器の編年」『史跡妻木晩田遺跡第4次発掘調査報告書』鳥取県教育委員会  
兵庫県教育委員会 2006 『伊丹市岩屋遺跡・森本遺跡』  
牧本哲雄 1994 「第1節 土器編年について」『南谷大山遺跡Ⅱ 南谷29号墳』(財)鳥取県教育文化財団  
牧本哲雄 1999 「第1節 古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ 園第6遺跡』(財)鳥取県教育文化財団  
松井潔 1997 「東の土器、南の土器-山陰東部における弥生時代中期後葉～古墳時代初頭の非在地系土器の動態-」『古代吉備』第19集 古代吉備研究会

## 第2節 中世末から近世の集落と「村土居」

### はじめに

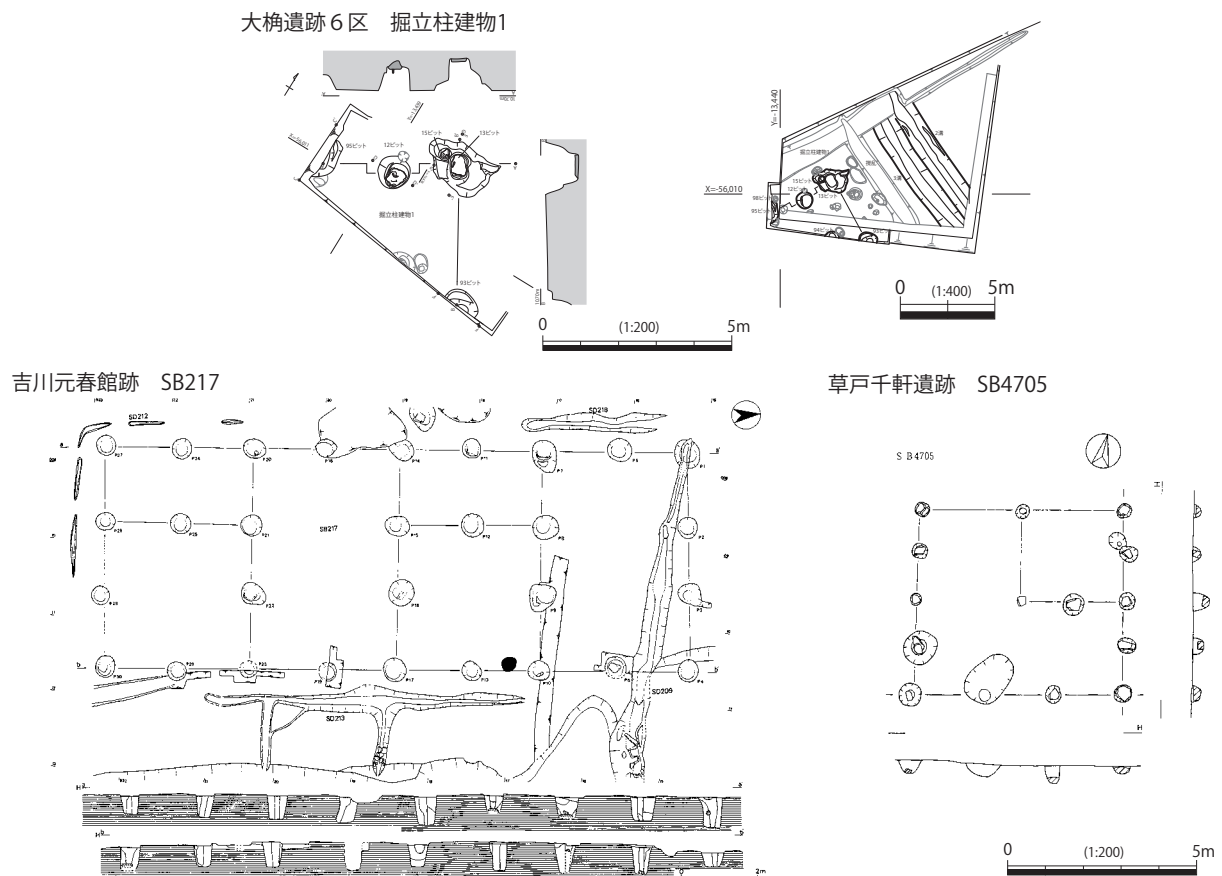
大柵遺跡6区（以下、当該調査区）では、中世後半から近世の大型掘立柱建物を検出した。この建物の所在地は字村土居であることから、建物の性格を考える上で、興味深い事例である。

ここでは、従来の地名研究の成果と併せて、若干の整理を試みたい。

### 第1項 柱穴の規模と建物

**大型柱穴の掘立柱建物** 当該調査区で検出した掘立柱建物1は大型の柱穴を伴う建物である。建物隅だけの検出であるが、12ピットは径0.86m、深さ約1.11m、13ピットは径0.96～1.26m、深さ約0.83mを測る。この2つのピットは石製礎板を伴っており、12ピットでは柱根が残っていた。13ピットは埋土が単一層で柱痕が検出できず、掘方が乱れていることから、柱の抜き取りが行われたと考えられる。柱間が広く、柱穴の規模及び構造から、かなりの大型建物であったと思われる。

鳥取県で、このような柱穴を持つ例は、古代の官衙遺構に認められる。気多郡衙に比定される鳥取市気高町上原遺跡のSB095では、石製礎板を伴った柱穴が検出されている（奈良文化財研究所2003）。掘方はやや楕円形で、幅約1.1m、深さ約0.8mを測る。他に考えられる遺構には、礎石の落とし込み穴がある同上原遺跡T8005のSX241があげられる。これらから、現耕作土直下の検出では



第124図 中世後半から近世の掘立柱建物



あったが、古代の大型建物を想定して現地での調査を終えた。

調査時は、柱穴からの出土土器がなく時期の判定ができなかったため、掘立柱建物1の12ピットの柱根（取上番号35木器：試料番号11）、13ピット（取上番号36木器：試料番号12）から出土した木製品を用いて、放射性炭素年代測定を行った。

その結果、35木器（試料番号11）が $320 \pm 20BP$ （460～310 calBP）、36木器（試料番号12）が $330 \pm 20BP$ （470～310 calBP）を示し、誤差範囲内で一致する年代を示した。得られた年代値は15世紀後半から17世紀前半を示すが、残存部位が伐採時の最外年輪に相当するか否かは判断できないため、遺構構築年代の下限年代として捉えておく必要があるとの所見を得た（註1）。

なお、掘立柱建物1が近世に比定されると、2・3溝との関係を考える必要が生じる。この溝からは近世の陶磁器や寛永通寶などが出土し、近世に埋め戻し、掘り替えたと考えられる。掘削の時期は不明であるが、他に溝状攪乱も同じ方位を示しており、近代まで区画の意識があったことになる。

**中世後半から近世の掘立柱建物** この時期の建物は、集落が現在の集落と重なり、調査例が少ない。周辺では西桂見遺跡で礎石建物、天神山遺跡の第5次調査で礎石状平石が検出されている。しかし、柱の基部を固める掘立柱建物と上部構造で固める礎石建物では建物自体の構造が異なるため、単純に比較するのは難しい。また、天神山遺跡第1次調査の掘立柱建物は一部の検出であり、遺構の状況が把握できていない（鳥取市教育委員会1973、2005）。米子市尾高城址の南大首郭では、櫓台とする柱の配置が変則的な掘立柱建物が検出されている（尾高城址発掘調査団1979）。

当該調査区の掘立柱建物1の特徴である柱穴内に礎石状の石を置く礎板遺構は、軟弱地盤に対する工法で、草戸千軒遺跡などで検出されている。16世紀後半とされる吉川元春館跡のSB217は2つの建物を繋いだような長屋状建物で、柱穴の規模が似ている。いずれにしても、掘立柱建物1が館城である可能性は低いであろう。

一般的に、建物は中世後半に入ると掘立柱建物から礎石建物に転換しているイメージが強い。しかし、建物の性格や地域によって時期幅があり、必ずしも同時期に全国で同じ動きがあったわけではない。17～18世紀から変わっていた地域もあれば、18世紀後半から19世紀に変わる地域もあるとされている（浅川他編2001）。

## 第2項 土浦里から大蒲村へ

このような大型柱穴を伴った掘立柱建物の性格を探る一つの方法に、大柵地区の名称や字名などを使った歴史地理の手法がある。まずは、近世以前に付けられた地名の変遷を整理したい。

**古代の大柵地区** はじめて確認できる地名は「土浦」である。東大寺の初期荘園、高庭荘に関する文書に記録されているが、もっとも古い「天平勝宝7年（755）田注」は現存しない。しかし、後に作成された延喜5年（905）「因幡国高庭荘検田帳案」やその他の文書に記載があり、内容を知ることができる（註2）。当該調査区は北二条土浦里に比定されるが、高庭荘ではなく、その隣の里に当たる。

昭和23年（1948）の米軍撮影の空中写真をみると、条里区画が残されていたことが分かる。これを観察することにより、流路や水路の痕跡が確認できる（註3）。耕地整理以前は大満・柵間から里仁の間が低湿地で、これを示すように水田が深いことを表す「フケ」や「スクモ」のように泥炭、「砂田」のように耕作土の状態を示す小字名が残っている（建設省中国地方建設局1978）。4区で検出し



第125図 周辺の字名 (1948年9月22日撮影 鳥取南部 (USA - M86 - 1 - 34) に加筆)

た流路やその周辺に広がる低湿地の記憶が地名となり、土浦という里名となったかもしれない。調査区周辺には、条里区画を北東へ斜行しながら、部分的に条里区画と一致する水路跡が確認できる。条里制の施行時、またはそれ以前に整備されたと考えられる。

**中世の大柵地区** 中世前半は、大柵地区を直接表す文書や絵図は残されていない。しかし、江戸時代に編集された『因幡民談記』（佐伯1914）や近世前半の絵図に中世後半の状況を窺うことができる。

高草郡には、高庭荘・味野荘・玉出荘・古海郷・布勢郷・吉岡荘など多くの荘園が存在しており、『因幡民談記』の「因幡国郡郷保庄記」には、他の郡より多い郷・保・庄・村が記載されている。因幡国では、保は郷が解体した跡に立てる、あるいは保が成立してしまうと郷が解体する傾向があった（註4）。保が圧倒的に多いことから、荘園・国衙領体制の確立期に、当郡内では在地領主が国衙在庁機構に連なる郷司・保司層として、その所領支配を確立していったと推定されている（註5）。

一つの郷が二つ、ないし三つの保に再編される傾向を考慮しながら「因幡国郡郷保庄記」の記載を見直すと、郡郷制時の高草郡に対応して書き分けられていることが分かる。

**「因幡国郡郷保庄記」にみる大蒲村** しかし、「因幡国郡郷保庄記」には、中世前半から中世末までの情報が混在している。高草郡を領地とした亀井茲矩が大井手用水開削のため、邑美郡を領地に持つ池田長吉と換地を行う以前の状況を表している。大柵地区に該当すると考えられる地名は、「大蒲村」と「柵城村」である。

「大蒲村」には「本ノママ」との注記がある。これは、編者が当時に使われていた名称「大満」を「大蒲」と誤記したのではないかとの疑いを持ったため、注記をしたと思われる。しかし、「大蒲」は「大浦」の誤記とすれば、古代に使われた「土浦」から変じたと考えられないだろうか。編者は東大寺文書にある「土浦」の情報をも持ち得ないことから、このようなよう表現になったと思われる。

「柵城村」は当時すでに見当たらず、カクマ（角間）がこれに該当し、「亀井殿」のときに成立した新村であるとしている。村の背後の丘陵には鍋山城跡があり、「郭城」が「<sup>くるわしろ</sup>柵城」に<sup>かくき</sup>変じたと考えられる。

### 第3項 大満村と角間村の成立

これらから大桒地区の名称をたどると、古代には土浦、誤記の可能性があるが中世段階では「大蒲」と呼ばれるようになった。16世紀後半には、因幡山名氏の継承争いと但馬山名氏との対立から、布勢城周辺は戦場となり、布勢城から大間谷を経て丘陵を越える道沿いに城が築かれた。この鍋山城跡の名称など詳細な記録はないが、これ以降に「大蒲村」に並んで「桒城村」が成立したことになる。

**郷帳と村数** 慶長10年(1605)「因幡国気多郡高草郡郷帳」(鹿野町誌編集委員会編1992。以下、「慶長10年郷帳」)は、亀井茲矩が作成した郷帳の写しとされている。集落は少なく、「吉岡、臥野、小山、布施・甲山、賀露、秋里、徳尾・安永・徳吉、宮谷、野坂、上原、荒田・深山口、有富、松上五ヶ、下味野、上味野、古海、服部・菖蒲、砂見、初瀬・しとり・あこた、布袋・長瀬・一本・引田・中嶋」の20ヶ所にとどまり、大桒地区に該当する地名は記載されていない。他に「気多郡・高草郡高目帳」も20ヶ所に分けられており、紀年銘はないが同じ内容である(註6)。また、慶長18年(1613)4月14日「因幡国内気多郡・高草郡帳 伯耆国内河村郡之内・久米郡之内帳」、慶長18年5月11日「因幡国内気多郡・高草郡 伯耆国内河村郡・久米郡帳」は確認できなかったが、郷村名と石高は同じであるとされている(註7)。

次に確認できる寛文4年(1664)「池田光仲宛領知判物・目録」では高草郡の村数は74ヶ村、正徳元年(1711)郷村石辻帳では78ヶ村に増加している。『因幡民談記』の「当代郷保庄記」には75ヶ村が記されており、『因幡民談記』が成立した元禄ごろを表していると思われる。

**中世村から近世村へ** 亀井茲矩は慶長17年(1612)に卒しており、慶長18年の2通の郷帳は所領を引き継いだ亀井政矩の時に作成された文書であることから、慶長10年から18年の間は大きな変化がなく、中世末の集落の状況、近世村への過渡期を示しているといえる。政矩の段階以降、元和3年(1617)に池田光政領、寛永9年(1632)に池田光仲との国替えを経て寛文4年に至る間に村数が増加、「大間村」・「角間村」は幕府に提出するために作成した『寛永国絵図』に記載された。領主の交代に伴い、支配・徴税の単位とする行政村を定める「村切り」が行われ、近世村が成立したと考えられる(註8)。では、現在の大桒地区に繋がる集落は、いつから存在したのだろうか。古代の柱穴は多数検出したが、これが現在の集落に続くとは考えられない。また、15～16世紀の遺物が数点出土しているが、中世の遺構はほとんどなく、調査成果からの把握は難しい。

大桒地区の南東に位置する嶋地区は、中世における今嶋保に比定されている集落である。永正10年(1513)「山名豊頼宛行状」には「野坂嶋村内屋敷」とあり、野坂に属していた(註9)。しかし、「慶長10年郷帳」に記録されない小規模な集落であったと思われる、複数の村で郷を構成する形態もとらなかった。このようなことから、記録にないから集落は存在しなかったとは言い切れない。「大蒲村」・「桒城村」も「嶋村」と同じような状況であったのではないだろうか。慶長18年の中旬以降、政矩が津和野へ転封となる元和3年の間の成立であれば、「因幡国郡郷保庄記」と合致する。

**大角村と大間村** 『正保国絵図』にも大間村・角間村と記載したが、『元禄国絵図』・『元禄郷帳』作成時に大満村・桒間村に改め、『因幡国変地其外相改之目録』にまとめられた。

しかし、その間の寛文10年(1670)に成立したとされる『寛文大図』には、大間村の位置に大角村と記載している(註10)。読みとしては、明治10年(1877)の名称である「大桒村」と同じ読み当たる。



#### 第4項 村土居とドイ

字名は先の項で述べたように、遺跡を考える上で重要な情報を与えてくれる。調査区の字名は、4・5区が「下前田」、6区が「村土居」、「僧ヶ谷奥」である（高草土地改良組合 1987）。ここでは掘立柱建物1が位置する「村土居」について考えたい（註11）。

**土居とは** 土居は中世に遡る言葉で、屋敷やその周辺の田畠にめぐらした土塁を指す。中国地方では鳥根県益田市にある益田城館跡の三宅御土居が有名で、鳥取市吉岡湯村では現在の集落と重なって「村土居」・「村上土居」・「村下土居」があり、吉岡氏の居館が置かれたとされている（中林 1977）。

**野坂谷の土居** 大柵地区の他、野坂・嶋地区などで「土居」地名が確認できる。野坂地区の土居は野坂川の左岸に位置する微高地である。「村土居」は現集落と重なり、野坂川との間に堤が設けられている。嶋地区の土居も現集落と重なる。旧河川が形成した微高地（註12）の上に位置し、もっとも高い場所に松嶋神社がある。集落の南から「村上土居」、東西に「村下モ土居」、北に「土居ノ下」がある。この3地区は立地が高いことが共通し、ほぼ現在の集落と一致している。

**周辺の土居** 近辺では布勢・徳吉・徳尾・古海・覚寺・富安・宮長・叶・海蔵寺などに「土居」があり、前後には上・下・前・村が付く。『鳥取県史』では、古海に「下村土居」、「上・中・下土居」、菖蒲に「中・下土居」、徳尾に「下村土居」、徳吉に「土居」があり、防御的性格をもつ中世的集落としている（建設省中国地方建設局 1978）。徳吉には「徳吉将監」などの有力者が伝えられており、中世的な土居が存在する可能性を窺わせる。

**ドイと村組** ただし、「土居」には、中世的な土居と異なる意味も存在する。「土居」という字名は中国地方に広くみられ、鳥取県東部の鳥取市・岩美町・八頭町・若桜町・智頭町では、村組を意味する言葉として使用されている。近世に入ると土地の勢力家（有力者）を中心とした小集落を意味するようになり、やがて集落そのものを土居と呼ぶようになり、これらの小集落を統合したものが藩政村（行政村）という形を取るようになったという指摘がある（註13）。このことは、「土居」地名が本来の土居を表しているとは、簡単にいえないことを示唆している。



第126図 寛文大図（部分）

#### 第5項 大型掘立柱建物と土居遺構

今回調査した大型の掘立柱建物1を検討し、地名や字名をとおして、古代から順を追って大柵地区を概観してきた。なかでもドイについての民俗学からの指摘は重要で、一概に「土居」地名だけでは、土居の遺構があるといえないことが分かった。溝を伴った大型の掘立柱建物1が土居を示すとする 것도可能であるが、部分的な検出でもあり、現状では中世後半から近世の掘立柱建物や土居の調査例が少なく、明快な答えをだすことはできなかった。このような事例が増え、土居遺構が解明されることを望む次第である。

## 第7章 総括

**追記** 大満地区で14世紀と思われる相輪と15～16世紀の五輪塔・一石五輪塔、桝間地区で16世紀の宝篋印塔と五輪塔などの石造物を確認した。現集落のはじまりは、中世後半まで遡ると考えられる。

### 註

- (1) 本書第6章第1節 自然科学分析参照
- (2) 延喜5年9月10日付「因幡国高庭荘検田帳案」(『平安遺文』1-193)
- (3) 野坂川の旧河道についての指摘がある。(建設省中国地方建設局鳥取工事事務所1978 p.105)
- (4) 錦織(1999) p.349
- (5) 平凡社地方資料センター(1992) p.69
- (6) 『石見亀井家文書』H-1031-16-2、国立歴史民俗博物館蔵
- (7) 鹿野町誌編集委員会編(1992) p.433
- (8) 鹿野町誌編集委員会編(1992) p.537、鳥取県(1979) p.186
- (9) 永正10年6月10日「山名豊頼宛行状」『北川家文書』(鳥取県立公文書館編2015)
- (10) 大井手土地改良区(2002) 付図「寛文之大図」倉田八幡宮蔵(複製) No.1
- (11) 小字名には「」をつけ、名称は高草土地改良組合(1987)を使用した。
- (12) 前掲、註3を参照。
- (13) 喜多村(2012) p.40 参照。ドイツのカタカナ表記は民俗用語を表す。( )は筆者による。

### 参考文献

- 浅川滋男・箱崎和久編 2001 『埋もれた中近世のすまい』 同成社
- 岩永 実 1959 「鳥取県における条里地域の研究(第1報)」『鳥取大学学芸学部研究報告 人文科学』10(2)
- 大井手土地改良区 2002 『大井手史』
- 尾高城址発掘調査団 1979 『尾高城址発掘調査報告書Ⅱ』 米子市教育委員会
- 佐伯元吉 1914 『因幡民談記』 因伯叢書1(復刻版) 名著出版
- 喜多村 正 2012 「鳥取県の村社会」『鳥取県立博物館研究報告』49
- 建設省中国地方建設局鳥取工事事務所 1978 『千代川史』 中国建設弘済会
- 坂本敬司 1991 「〔資料紹介〕慶長十年因幡国気多郡・高草郡帳」『郷土と博物館』37-1(73) 鳥取県立博物館
- 鹿野町誌編集委員会編 1992 『鹿野町誌』上 鹿野町
- 高草土地改良組合 1987 『礎』<高草ほ場整備事業記念誌>
- 竹内理三 1974 『平安遺文』1 東京出版
- 鳥取県 1979 『鳥取県史』3 近世 政治
- 鳥取県立公文書館編 2015 『新鳥取県史』資料編 古代中世1 古文書編上 鳥取県
- 鳥取市教育委員会 1973 『天神山遺跡発掘調査概報』
- 鳥取市教育委員会 2005 『鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』
- 中林 保 1977 「中世土豪吉岡氏の城郭とその居館集落」『鳥取市史研究』2 鳥取市
- (独) 奈良文化財研究所 2003 『上原遺跡群発掘調査報告書-古代因幡国気多郡衙推定地-』 鳥取県気高町教育委員会
- 錦織 勤 1999 「因幡国」『中国地方の荘園』講座日本荘園史9 吉川弘文館
- 平凡社地方資料センター 1992 「高草郡」『鳥取県の地名』平凡社

# 写真図版







1 調査前遠景（南西から）



2 調査前遠景（東から）



1 調査前近景  
(南西から)



2 東壁土層断面 (北西から)



3 北壁土層断面 (南から)





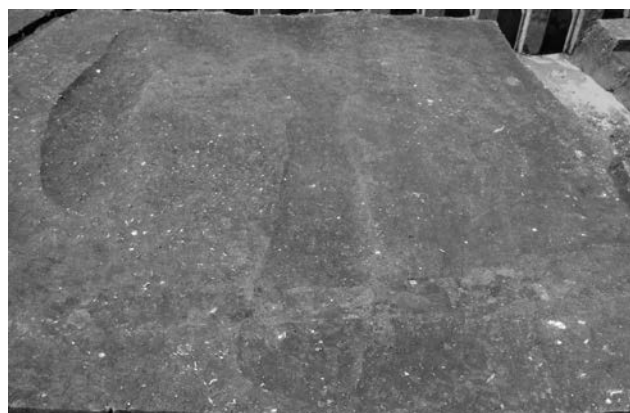
1 第1遺構面完掘状況（南東から）



2 4溝完掘状況（東から）



3 4溝土層断面（東から）



4 5溝完掘状況（東から）

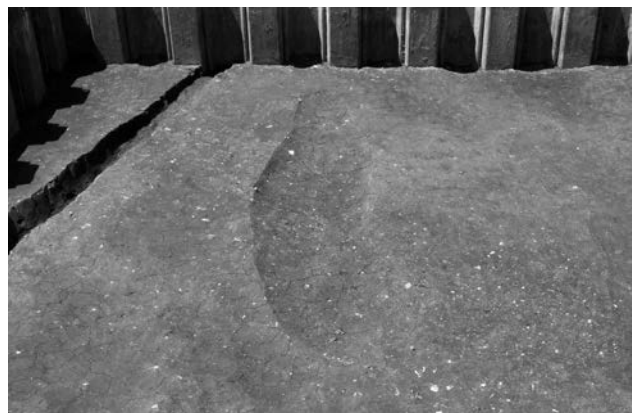


5 5溝土層断面（西から）

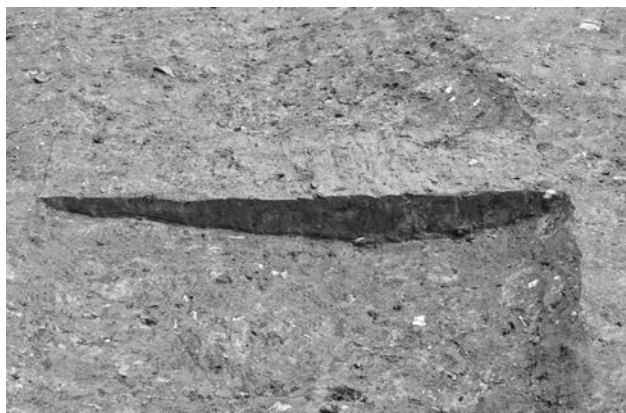


写真図版 4

4  
区  
第1遺構面・第2遺構面



1 6溝完掘状況（東から）



2 6溝土層断面（西から）



3 10溝完掘状況（西から）



4 10溝土層断面（東から）



5 第2遺構面完掘状況（南から）





1 8溝杭検出状況1 (北西から)



2 8溝杭検出状況2 (北西から)





1 8溝杭検出状況3 (南から)



2 8溝杭検出状況4 (南から)





1 8溝杭検出状況5 (北西から)



2 8溝杭検出状況6 (西から)





1 7溝・8溝土層断面（南東から）



2 8溝土器出土状況（南から）



3 8溝木器出土状況（北北西から）



4 8溝杭列群取り上げ状況（西から）





1 9溝完掘状況（北東から）



2 9溝土層断面（南西から）



3 9溝土層断面（東から）



4 13溝・15溝完掘状況（南西から）



5 13溝土器出土状況（南から）



6 15溝土器出土状況（南から）



1 11 土坑完掘状況 (北東から)



2 11 土坑土層断面 (東から)



3 12 土坑完掘状況 (北東から)



4 12 土坑土層断面 (南西から)

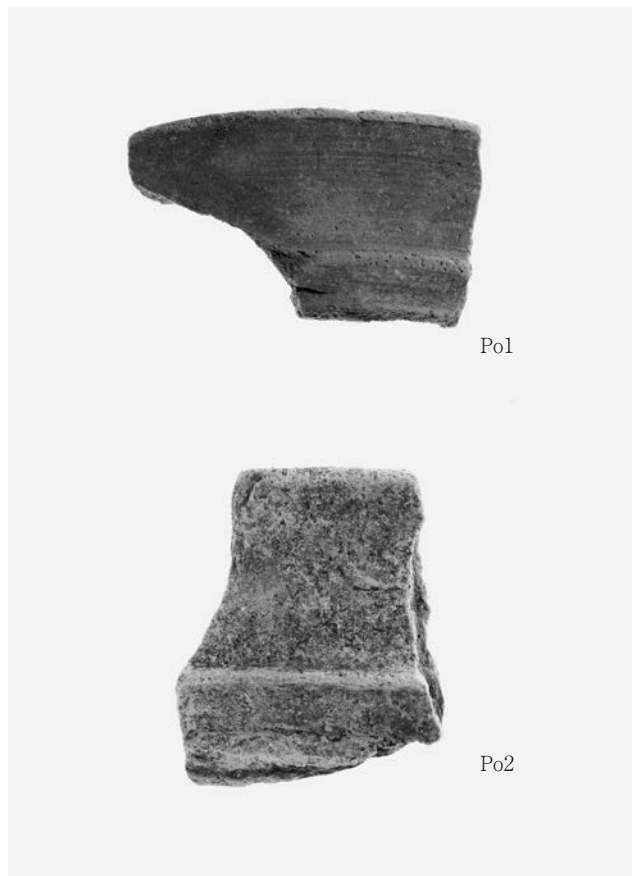


5 14 土坑完掘状況 (東から)



6 14 土坑土層断面 (西から)

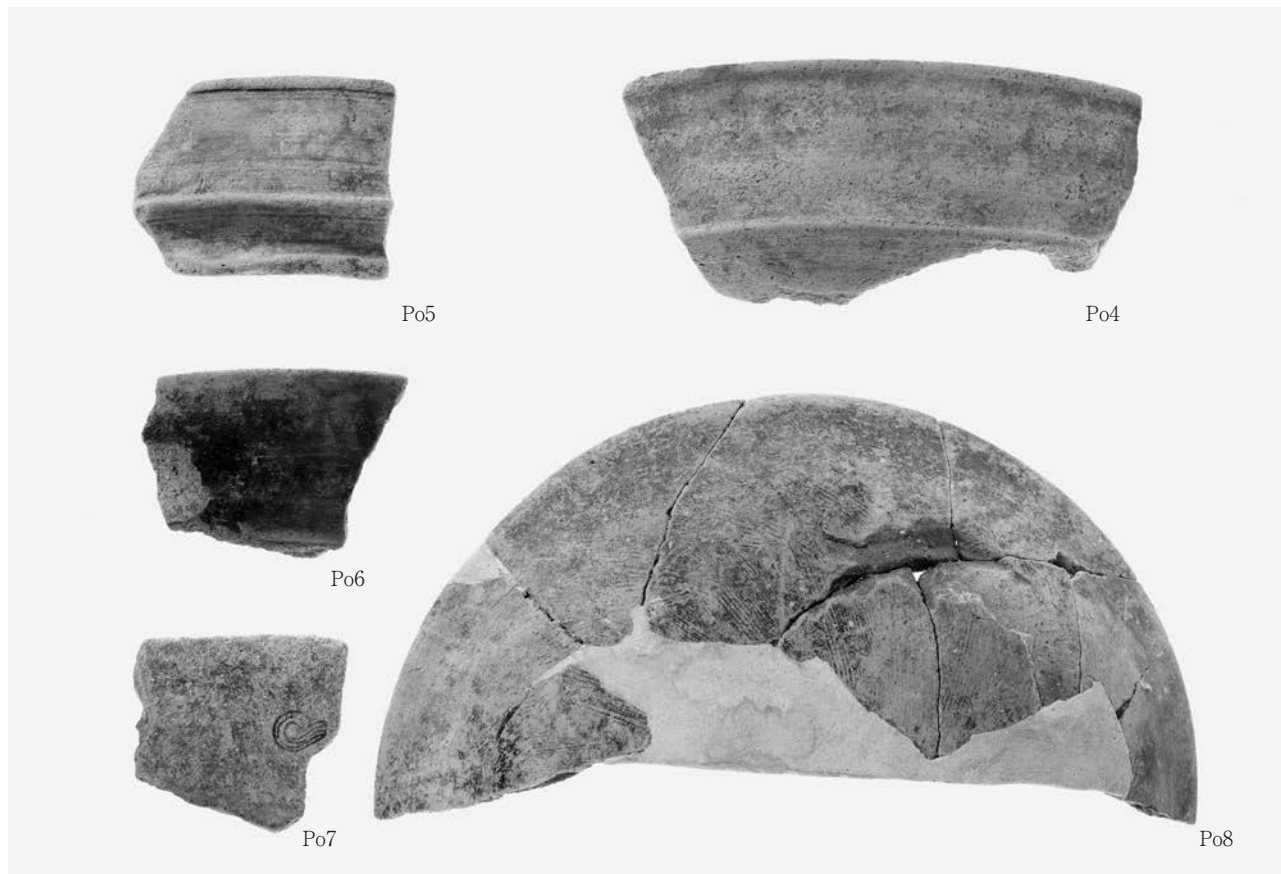




1 4 溝出土土器



2 4 溝・7 溝出土土器

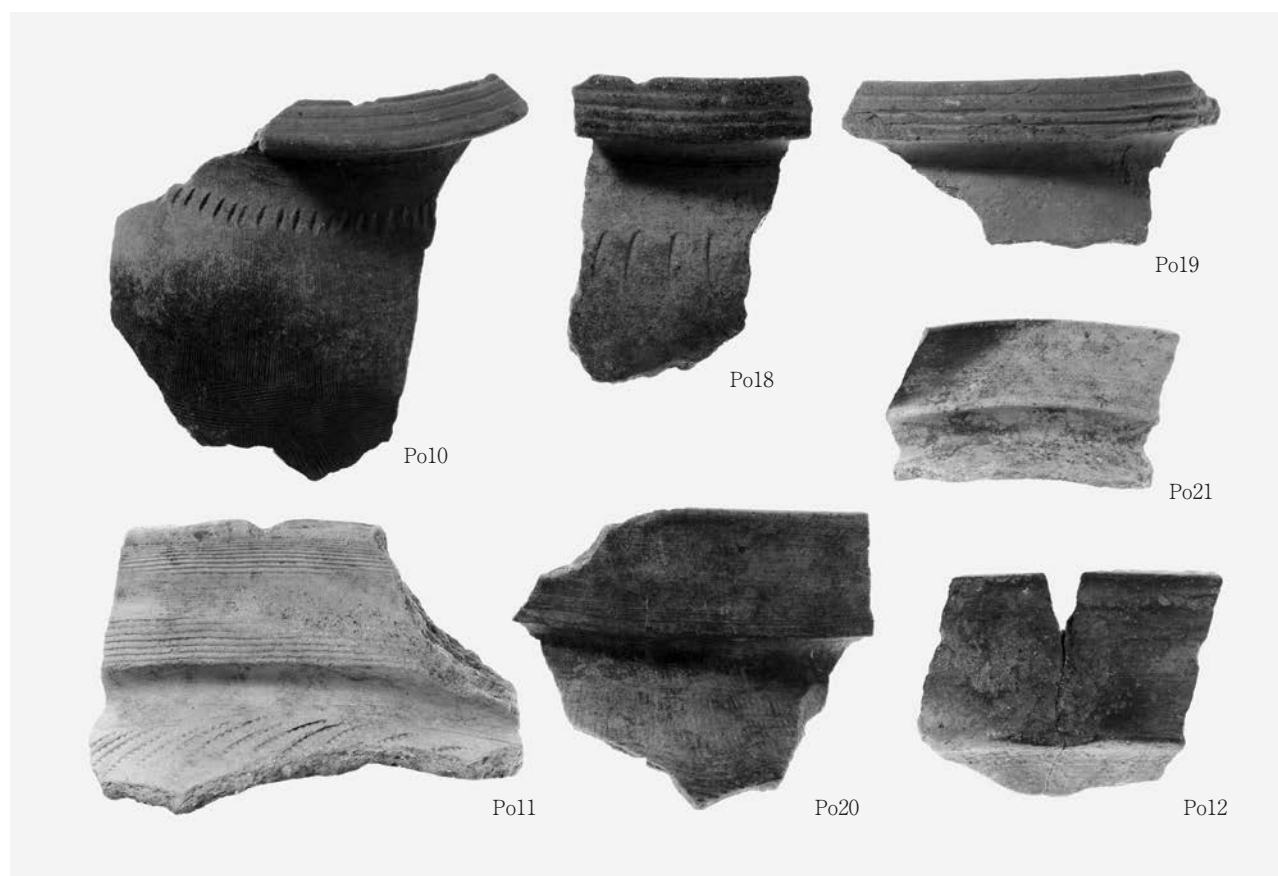


3 7 溝出土土器

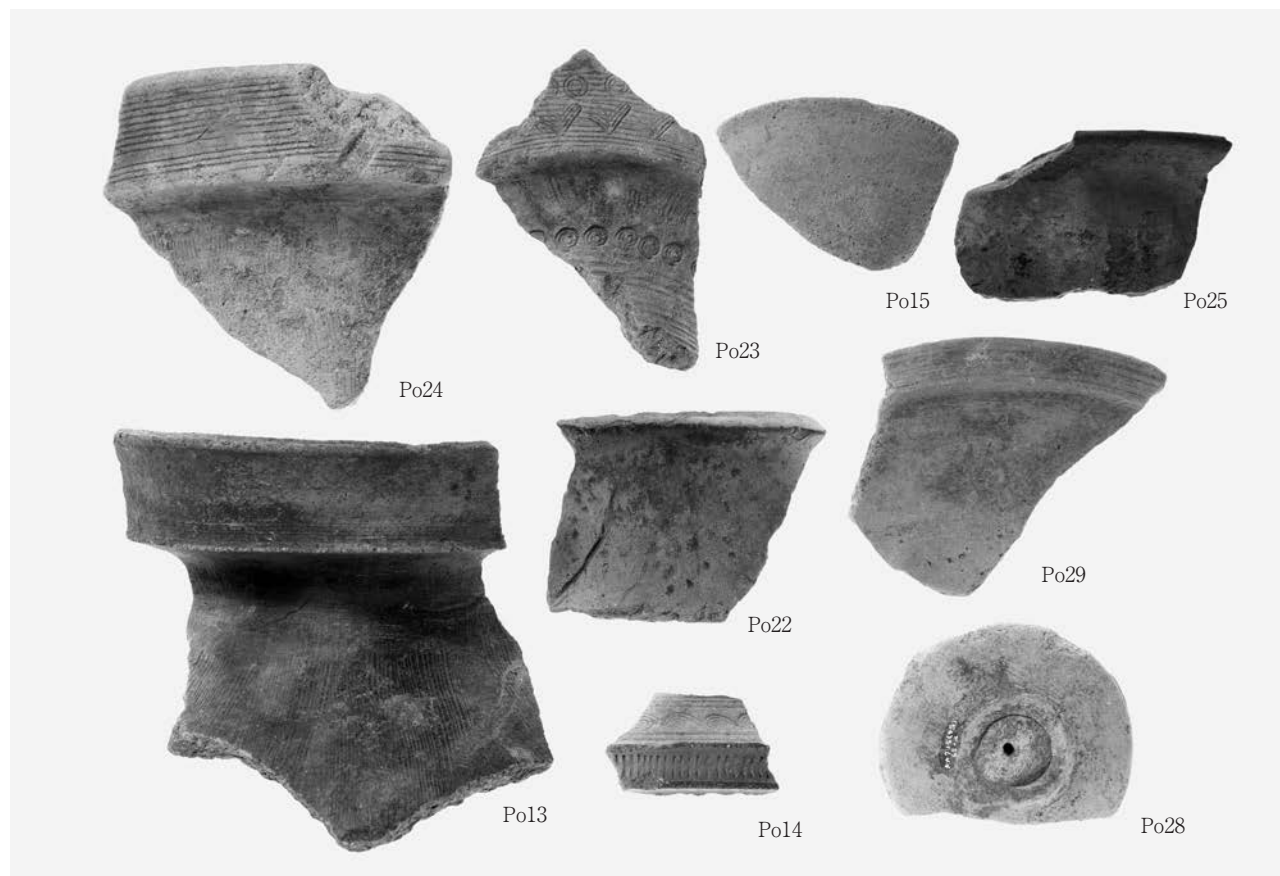




1 8溝出土土器 (1)



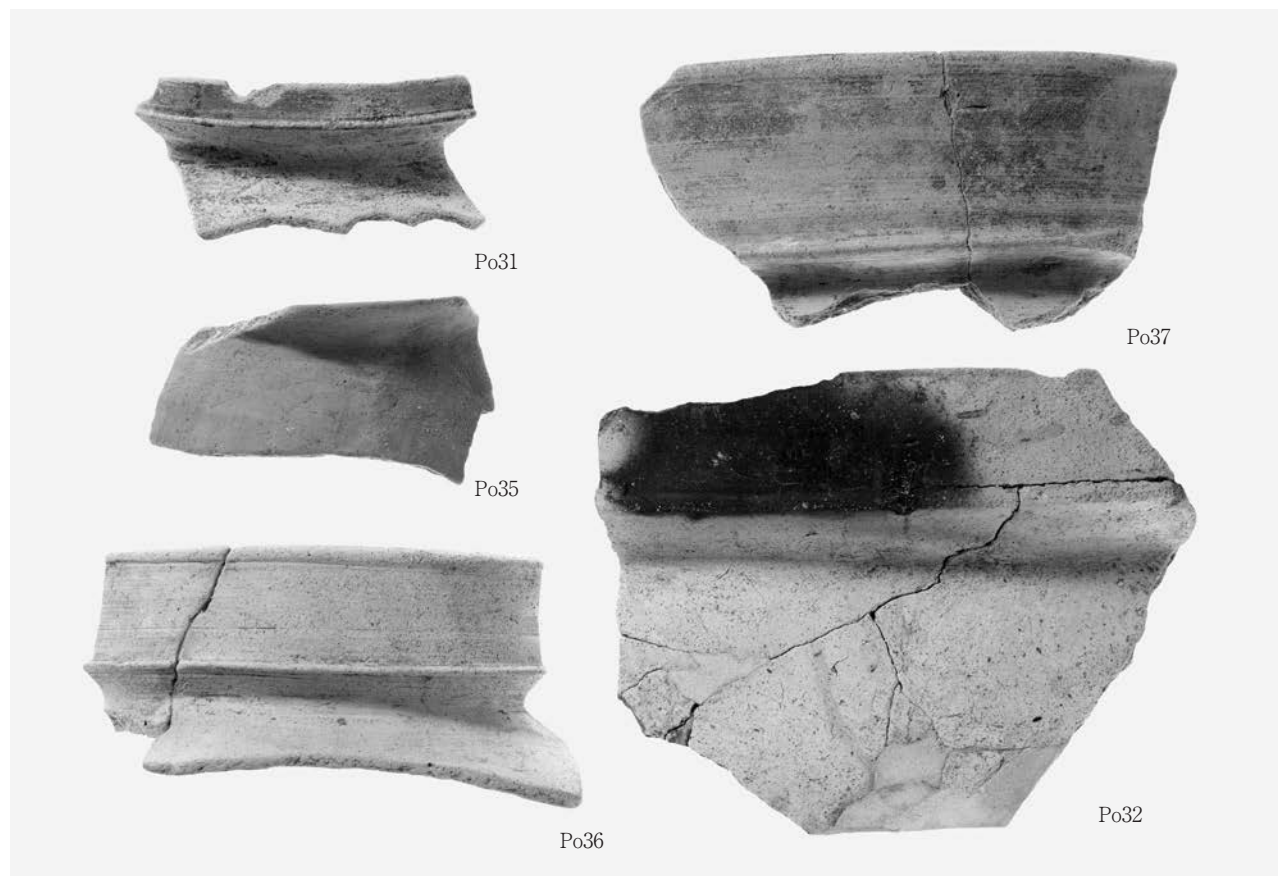
2 8溝出土土器 (2)



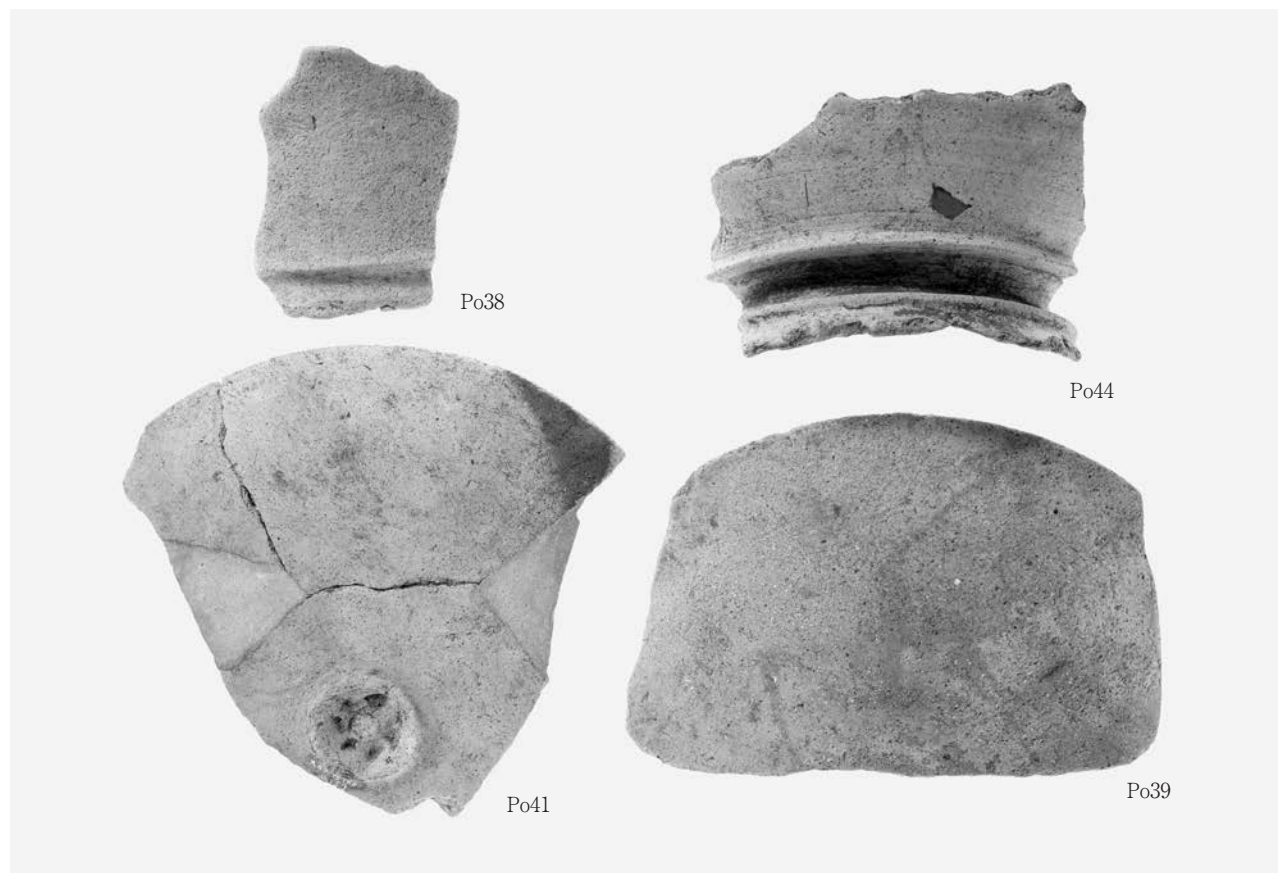
1 8溝出土土器 (3)



2 9溝出土土器 (1)

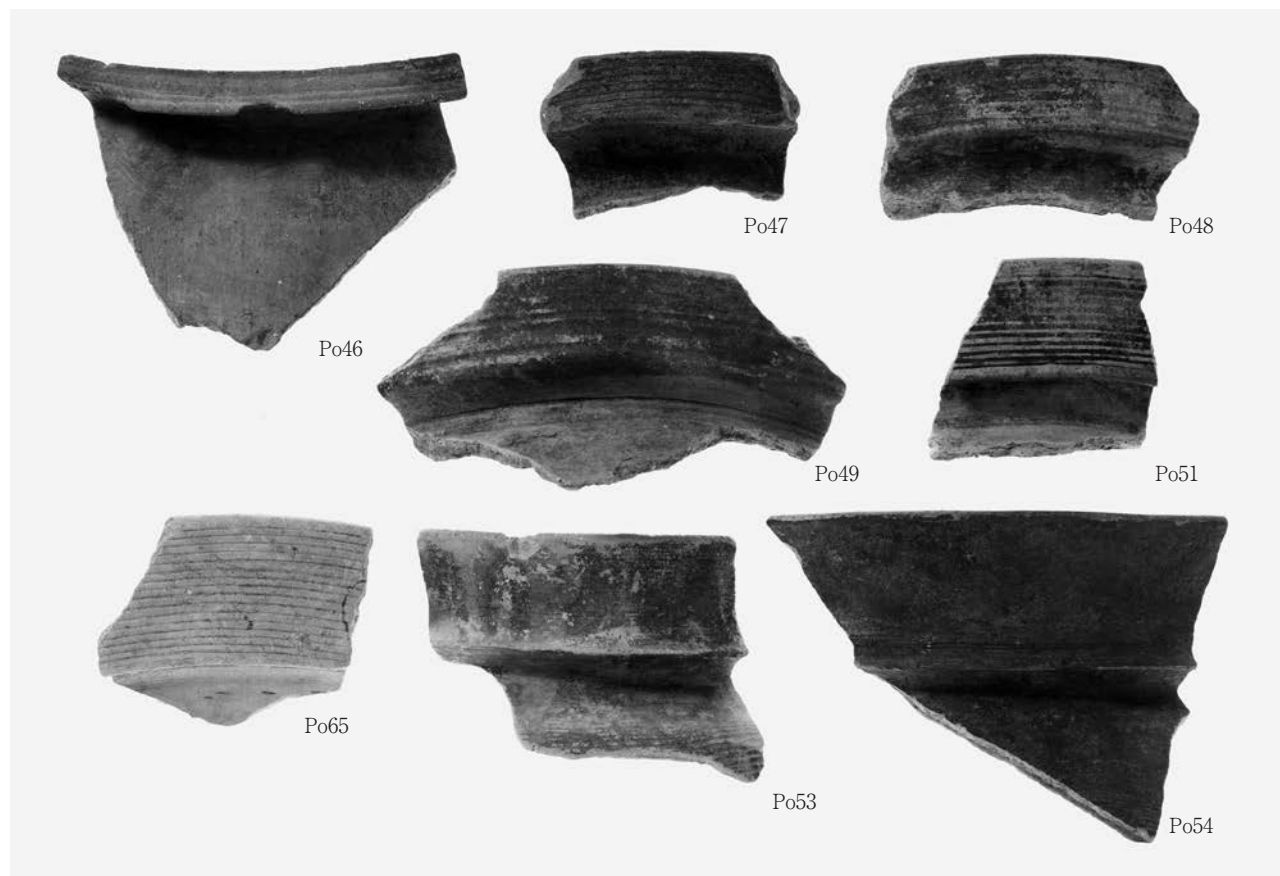


1 9溝出土土器 (2)

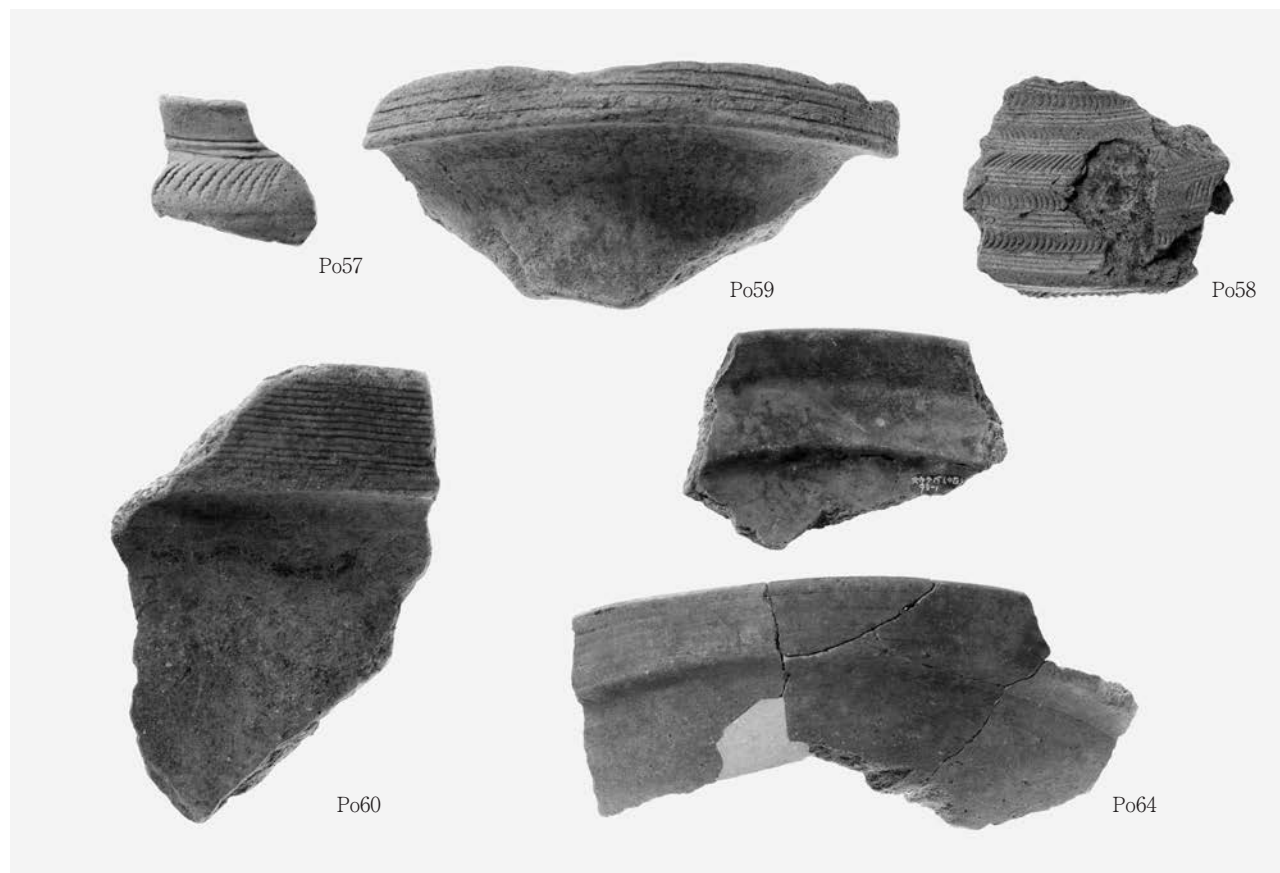


2 9溝出土土器 (3)



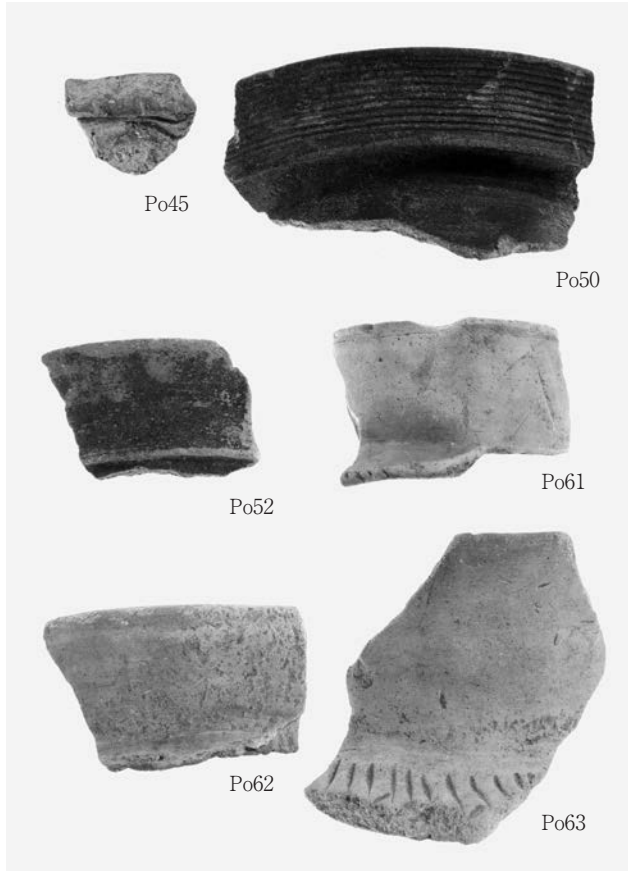


1 13 溝出土土器 (1)



2 13 溝出土土器 (2)

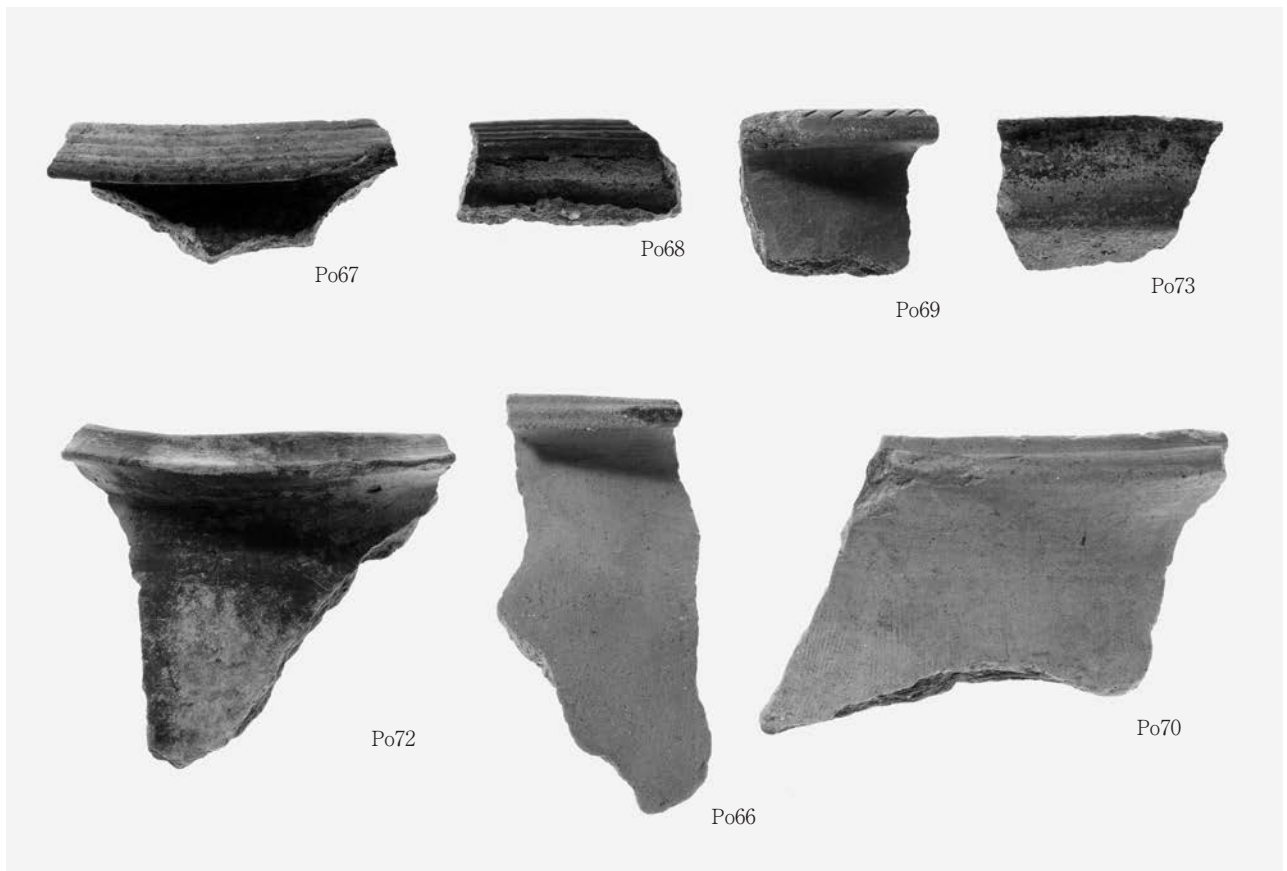
4  
区  
土  
器



1 13 溝出土土器 (3)



2 13 溝出土土器 (4) · 15 溝出土土器 (1)

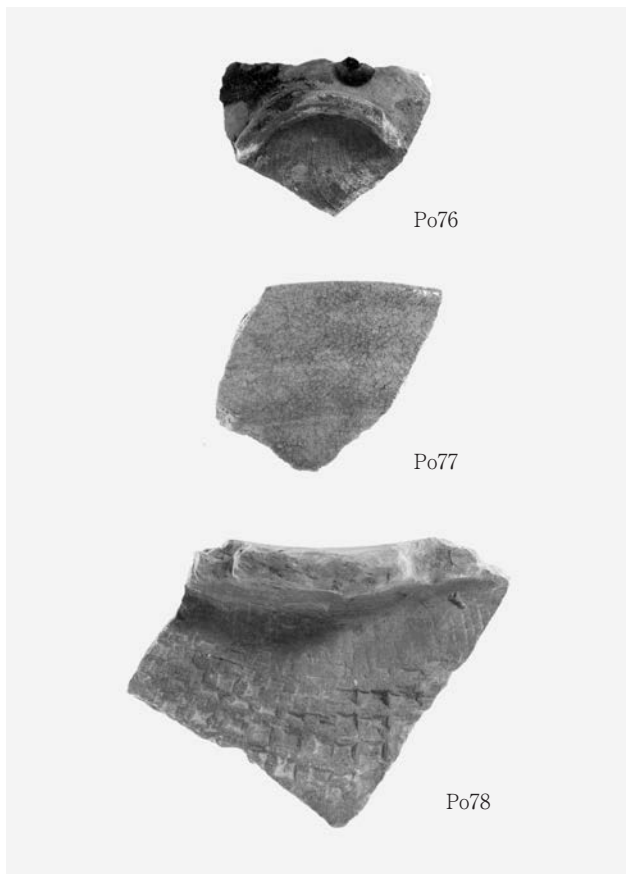


3 15 溝出土土器 (2)



Po74

1 11 土坑出土土器



Po76

Po77

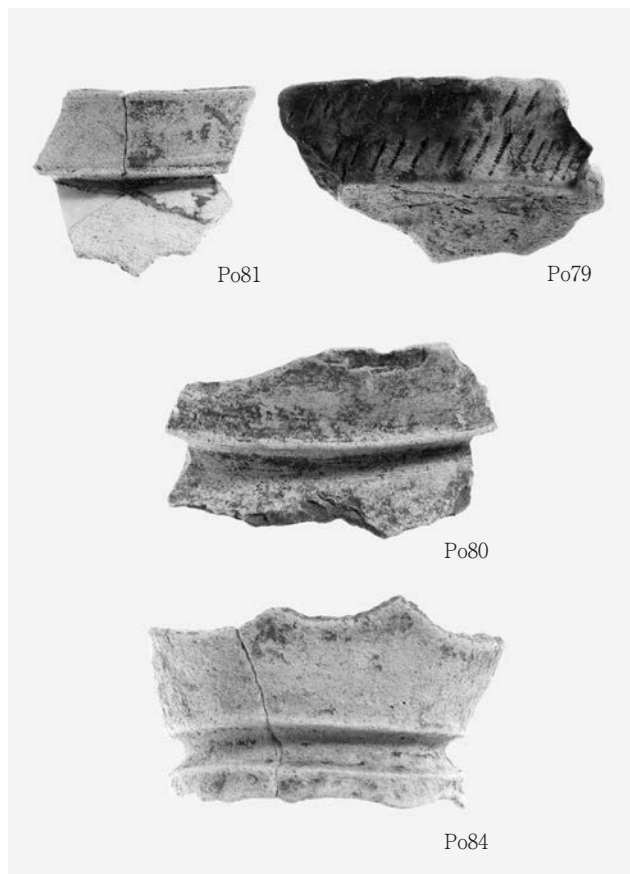
Po78

3 I 層出土土器



Po75

2 14 土坑出土土器



Po81

Po79

Po80

Po84

4 II 層出土土器 (1)

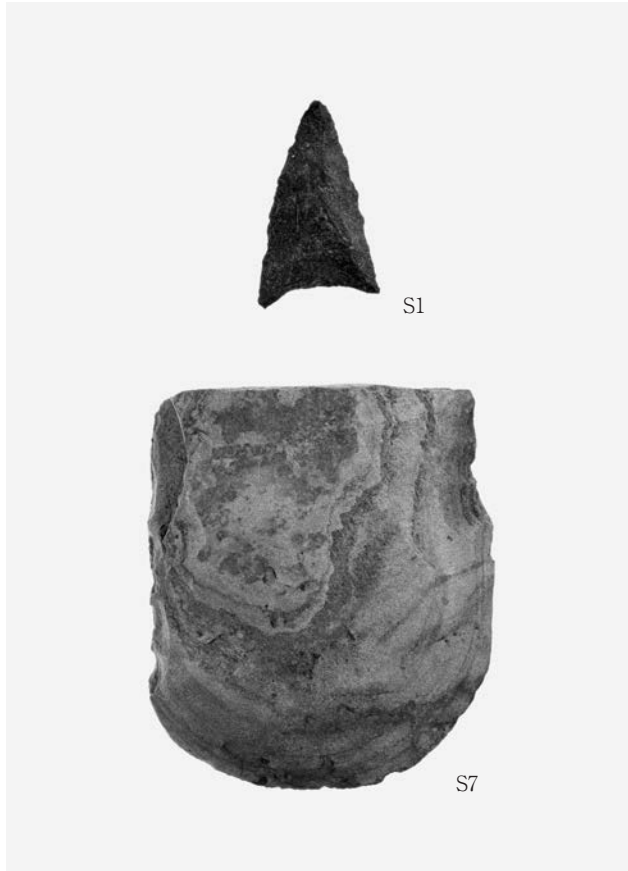


Po82

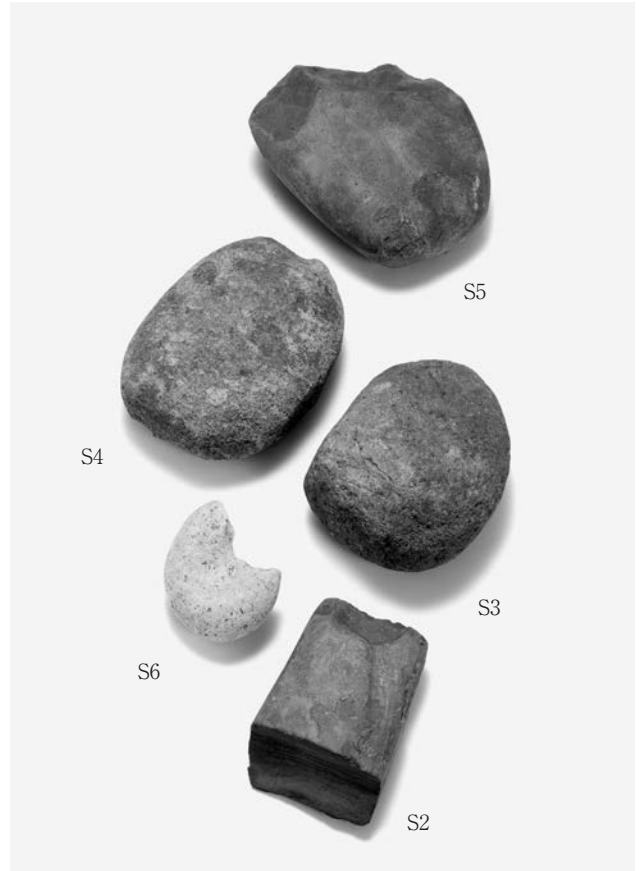
Po83

5 II 層出土土器 (2)





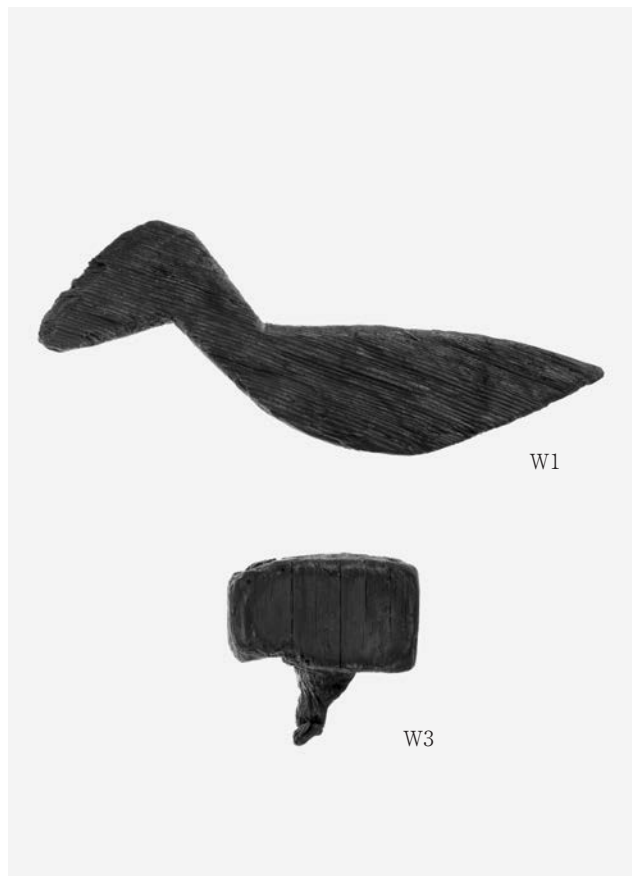
1 4区出土石器 (1)



2 4区出土石器 (2)



3 8沟出土木器 (1)



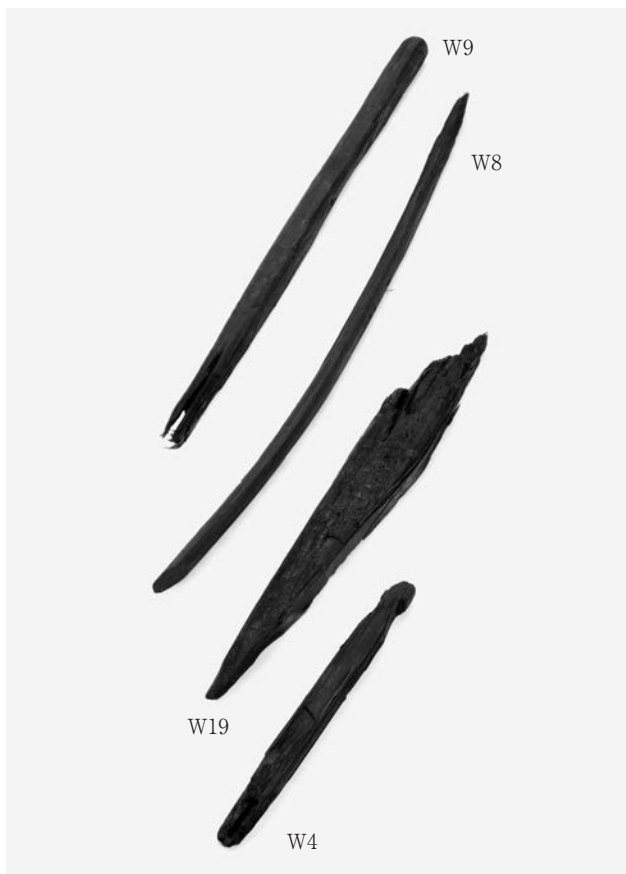
1 8溝出土木器 (2)



2 8溝出土木器 (3)



3 8溝出土木器 (4)



4 8溝出土木器 (5)



1 8溝出土木器 (6)



2 8溝出土木器 (7)



3 8溝出土木器 (8)



1 調査前近景  
(南西から)



2 北壁土層断面 (南東から)



3 東壁土層断面 (北西から)



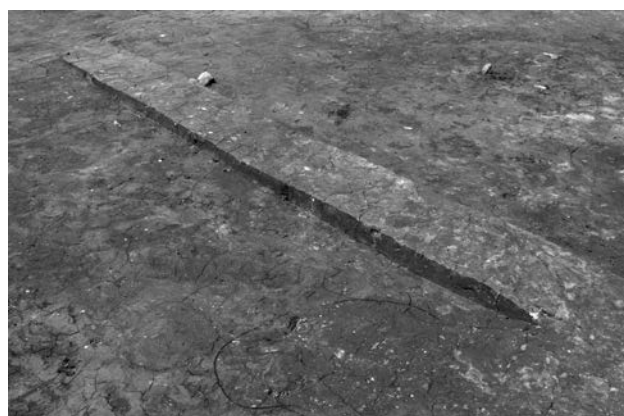
5  
区  
第1遺構面



1 第1遺構面全景（南から）



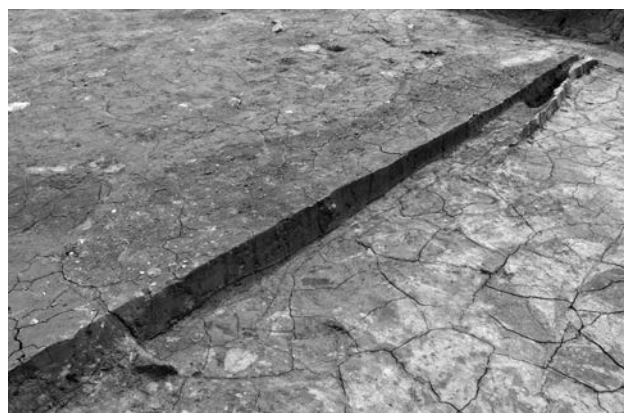
2 6溝完掘状況（東から）



3 6溝Aライン土層断面（東から）



4 5土坑完掘状況（北東から）



5 5土坑土層断面（北東から）





1 1溝・2溝土層断面（東から）



2 1溝完掘状況（東から）



3 2溝完掘状況（東から）



4 1溝土器出土状況（北西から）



5 1溝土器出土状況（南西から）



6 2溝土器出土状況（西から）



7 2溝木器出土状況（北西から）





1 3土坑完掘状況 (南東から)



2 3土坑土層断面 (西から)



3 4土坑検出状況 (東から)



4 4土坑完掘状況 (南東から)



5 4土坑礫等検出状況 (東から)



6 4土坑礫等検出状況 (南東から)



7 4土坑Aライン土層断面 (南東から)



8 4土坑Bライン土層断面 (南から)



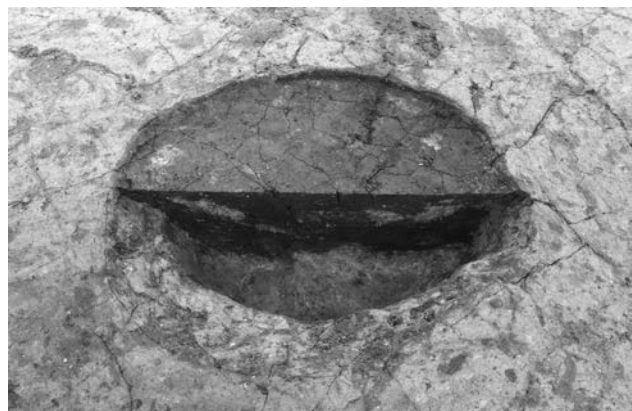


1 第2遺構面全景（東から）



2 掘立柱建物1・掘立柱建物3完掘状況（東から）





1 掘立柱建物1 22ピット断面 (北から)



2 掘立柱建物1 23ピット断面 (北から)



3 掘立柱建物1 24ピット断面 (北から)



4 掘立柱建物1 25ピット断面 (南から)



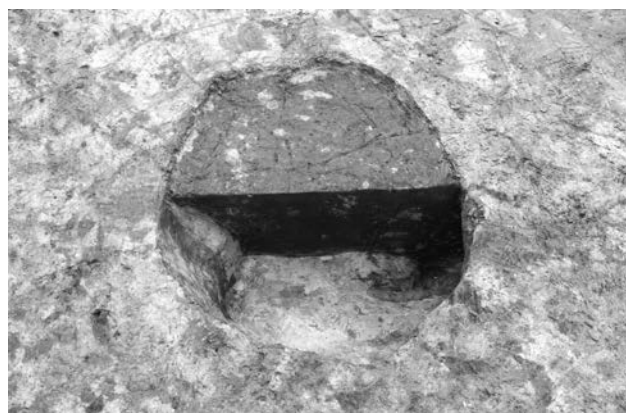
5 掘立柱建物1 26ピット断面 (南から)



6 掘立柱建物1 27ピット断面 (南から)



7 掘立柱建物3 8ピット断面 (南西から)



8 掘立柱建物3 18ピット断面 (南西から)





1 掘立柱建物3 19ピット断面（南西から）



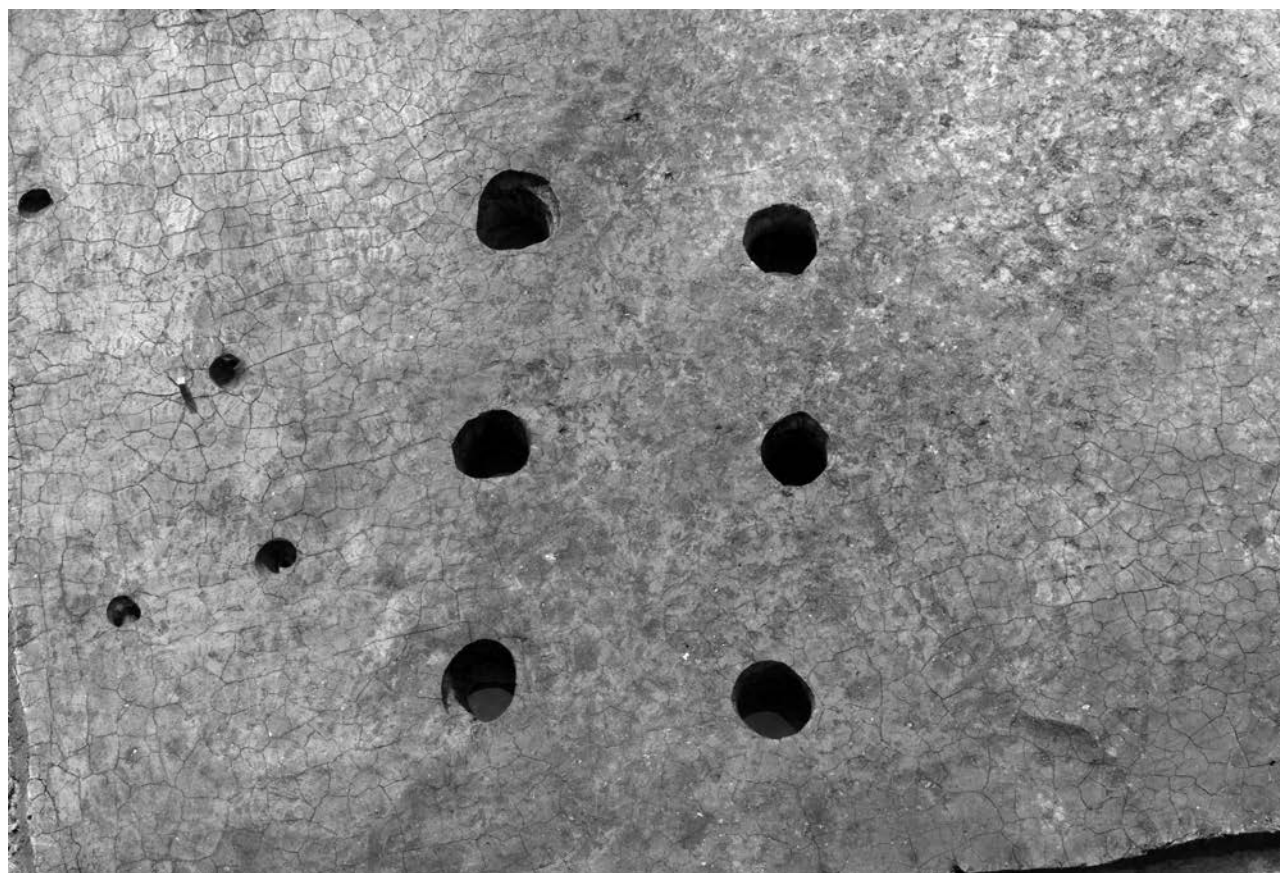
2 掘立柱建物3 20ピット断面（南西から）



3 掘立柱建物3 33ピット断面（南西から）



4 掘立柱建物3 34ピット断面（南西から）



5 掘立柱建物2完掘状況（東から）





1 掘立柱建物2 21ピット断面（南西から）



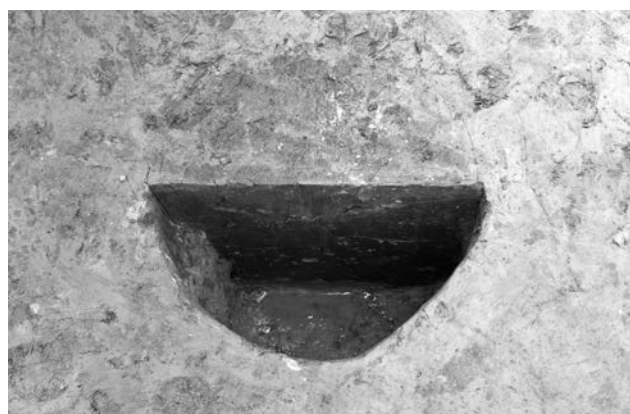
2 掘立柱建物2 28ピット断面（南西から）



3 掘立柱建物2 29ピット断面（南西から）



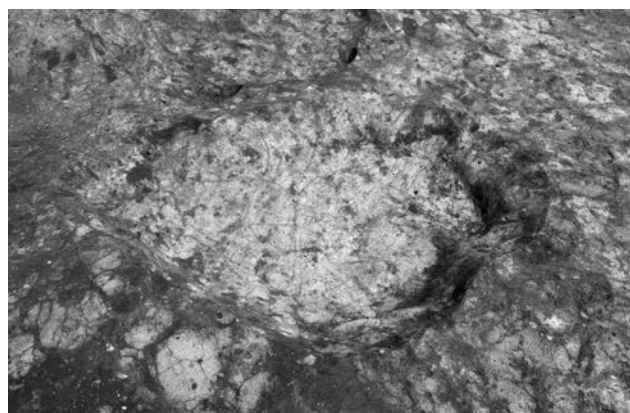
4 掘立柱建物2 30ピット断面（南西から）



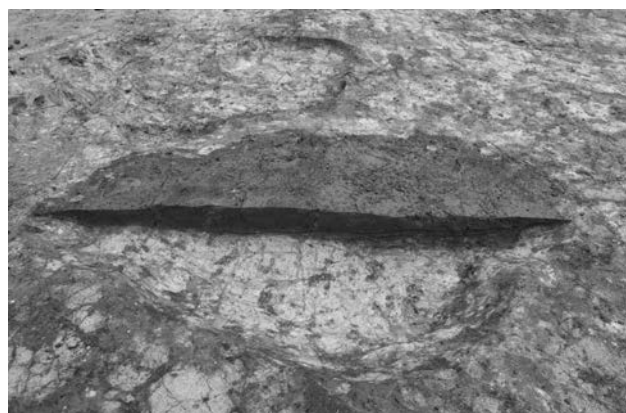
5 掘立柱建物2 31ピット断面（北東から）



6 掘立柱建物2 32ピット断面（北東から）

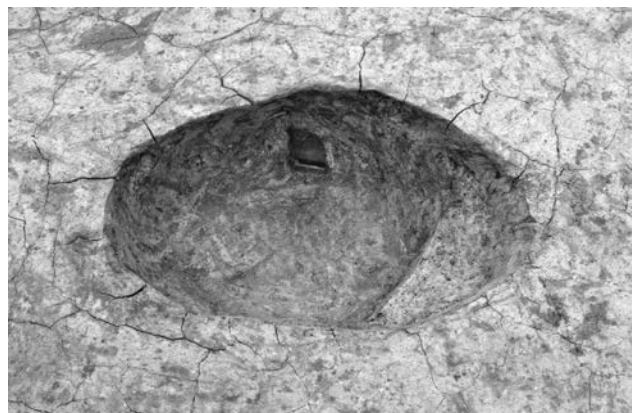


7 16土坑完掘状況（南から）



8 16土坑土層断面（南から）

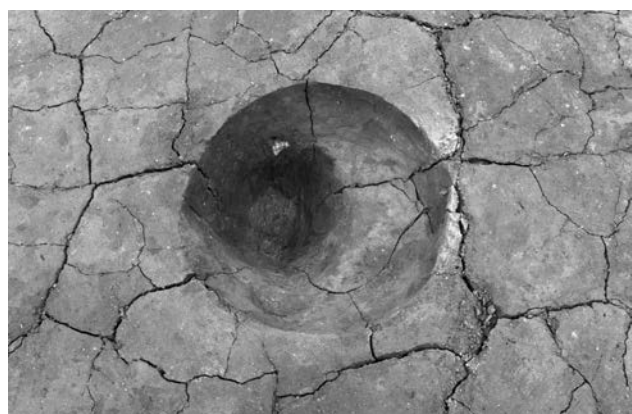




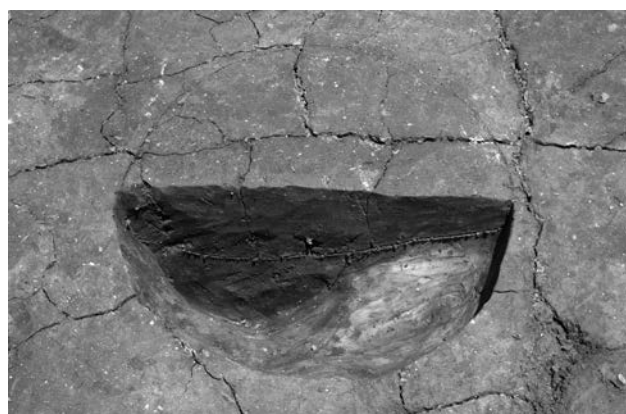
1 17 土坑完掘・土器出土状況（北から）



2 17 土坑土層断面（南から）



3 12 ピット完掘状況（南から）



4 12 ピット土層断面（南から）



5 35 ピット完掘状況（南から）



6 35 ピット土層断面（南から）

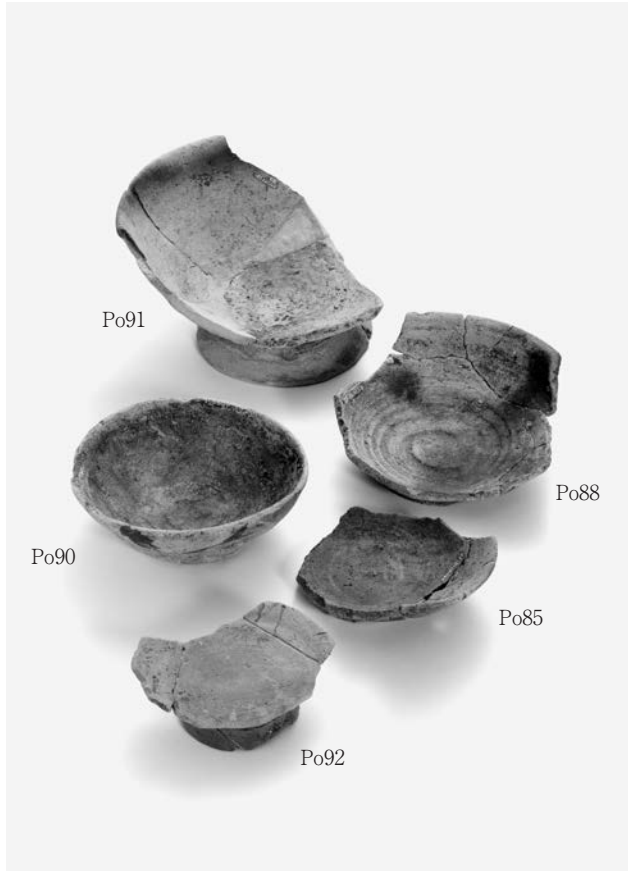


7 36 ピット完掘状況（北から）

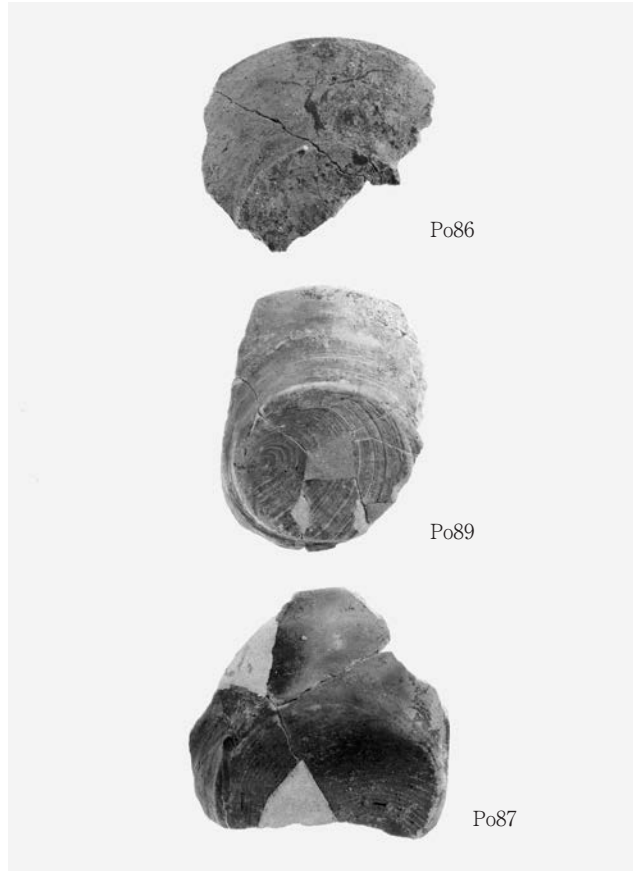


8 36 ピット土層断面（西から）

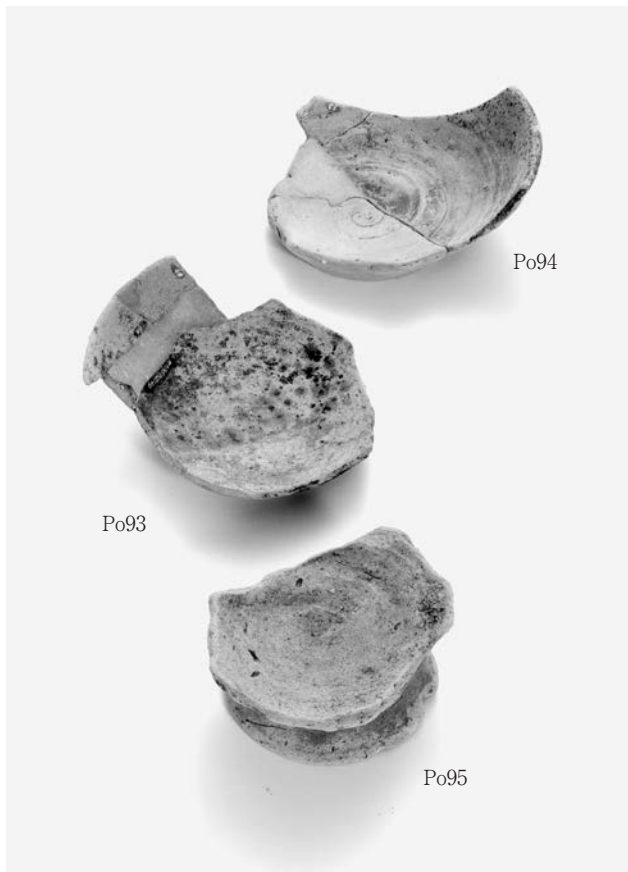
5  
区  
土  
器



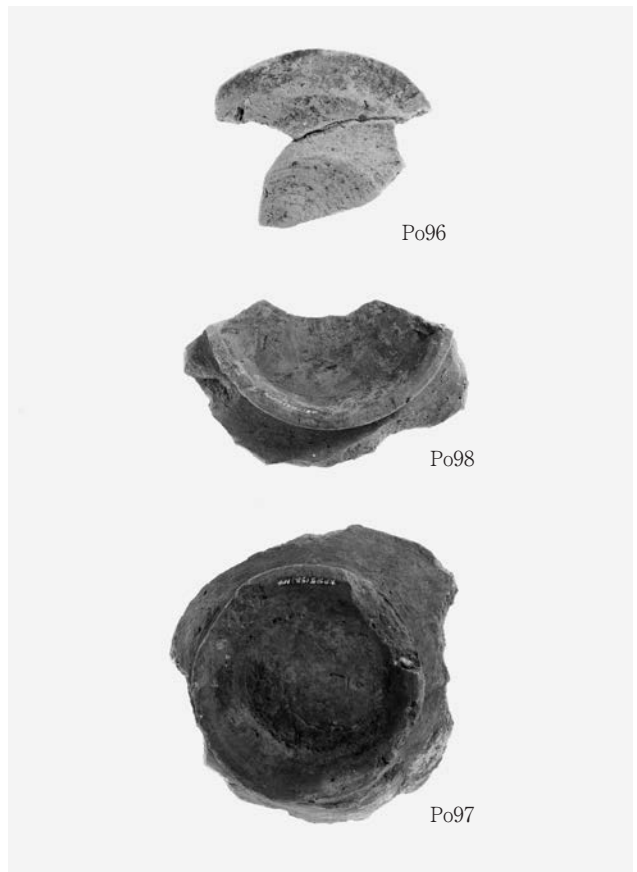
1 1 溝出土土器 (1)



2 1 溝出土土器 (2)

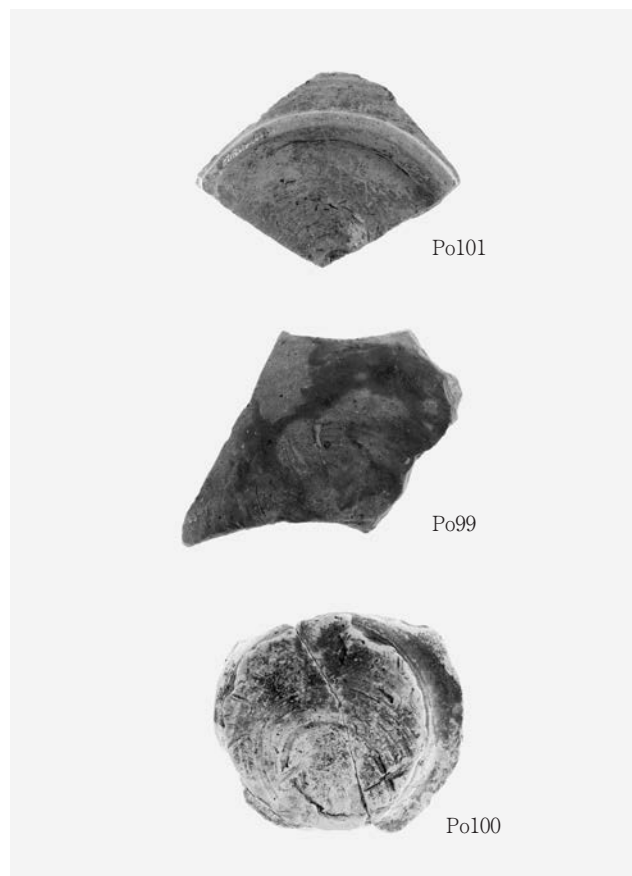


3 2 溝出土土器



4 6 溝出土土器

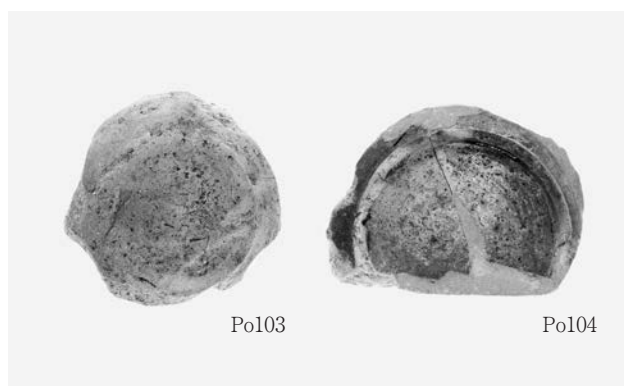




1 7溝出土土器



2 3土坑出土土器



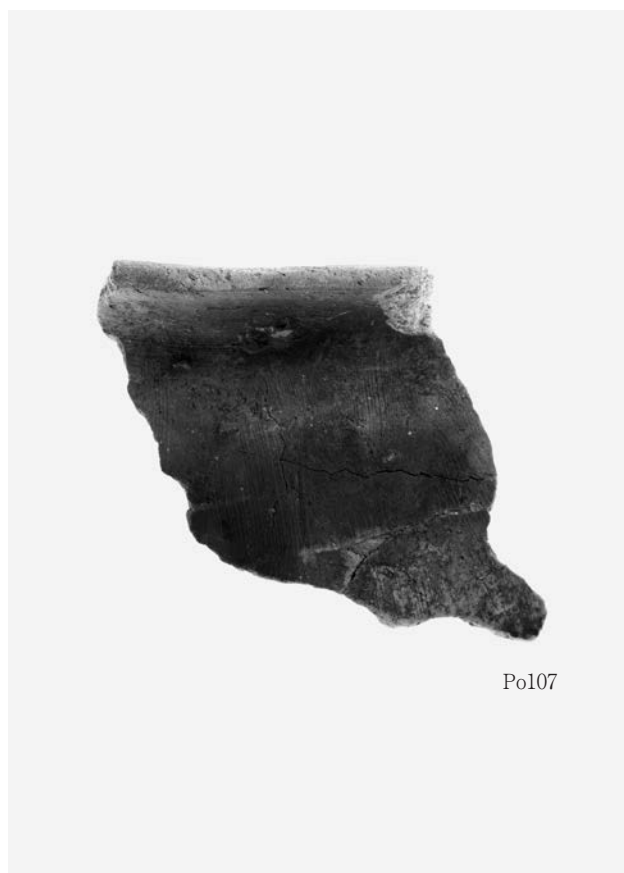
3 4土坑出土土器



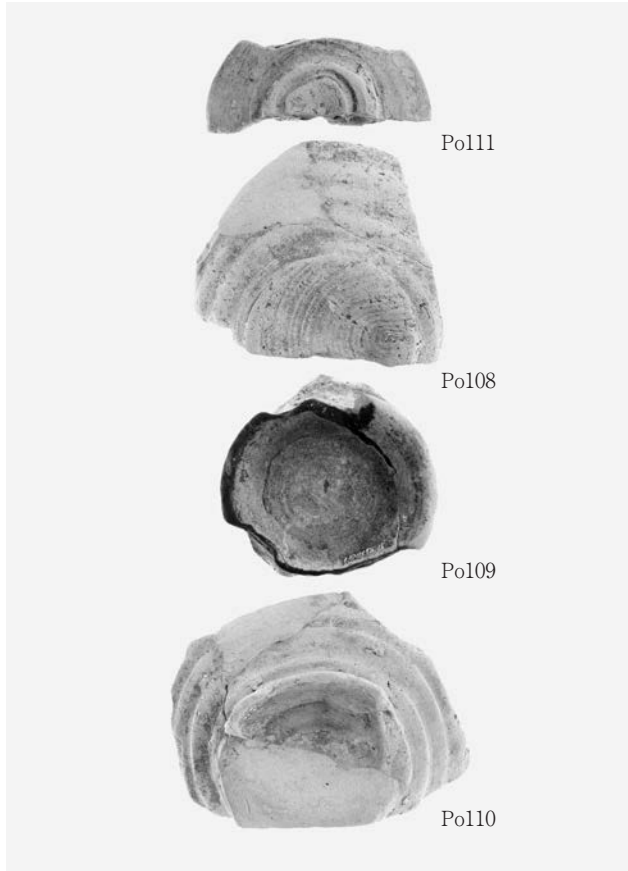
4 5土坑出土土器



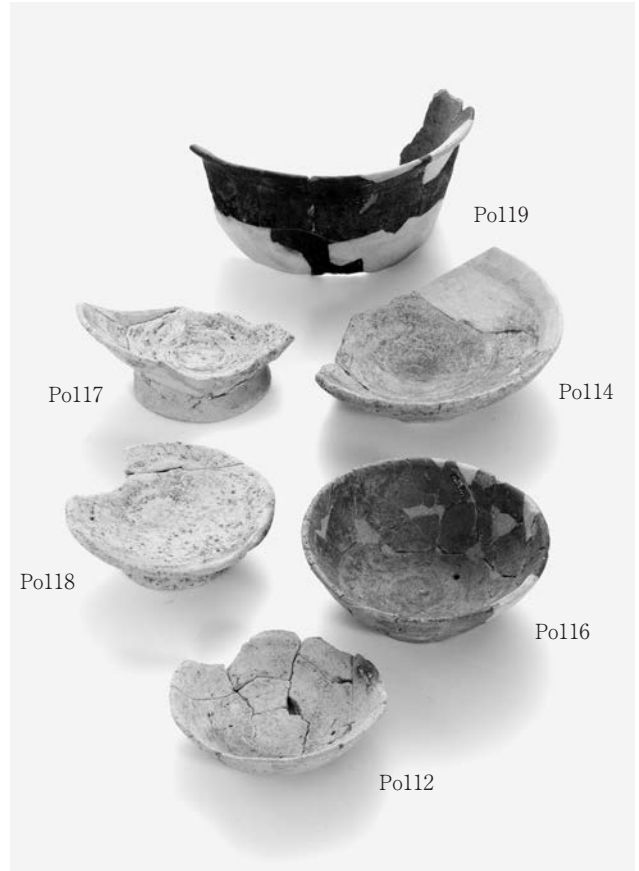
5 掘立柱建物2 (29ピット) 出土土器



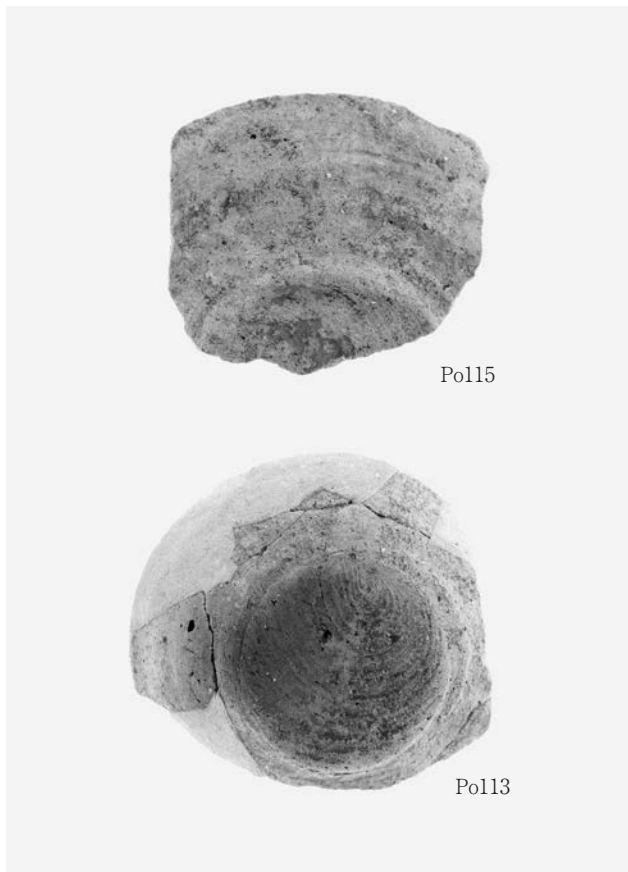
6 17土坑出土土器



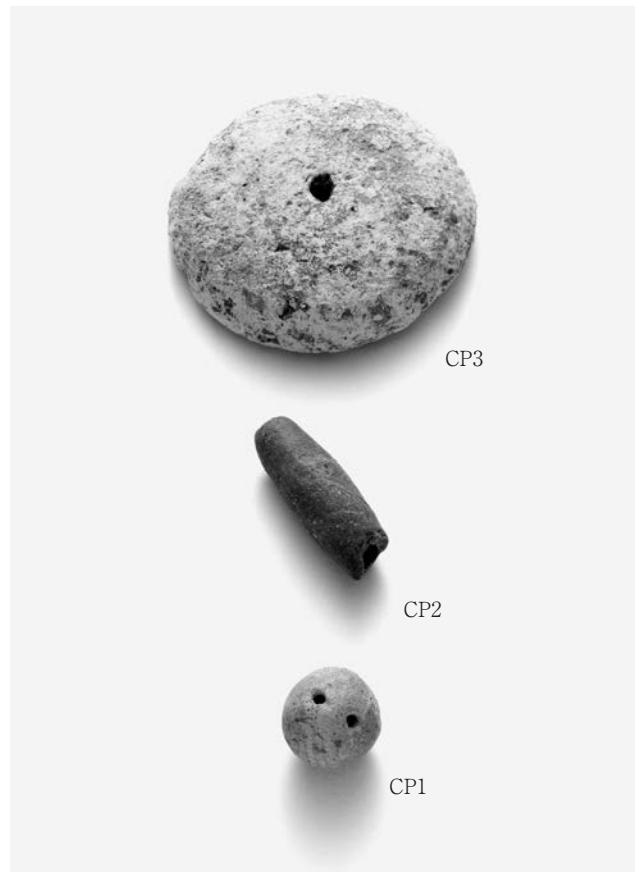
1 I層出土土器



2 II層出土土器 (1)

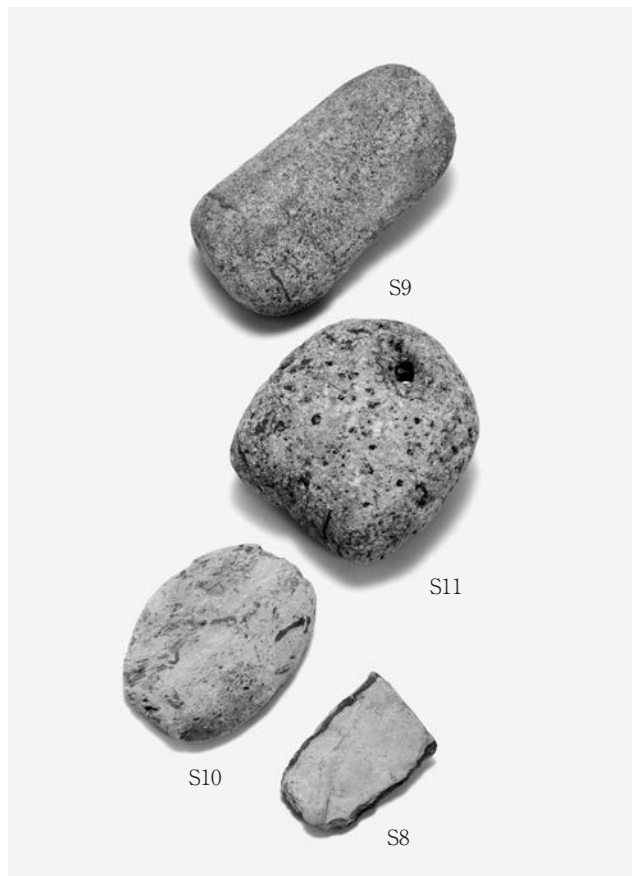


3 II層出土土器 (2)



4 5区出土土製品





1 5区出土石器



2 2溝出土木器



3 4土坑出土木器



4 II層出土木器



1 調査前近景  
(北東から)



2 西側東壁土層断面 (西から)



3 南壁土層断面 (北から)



4 東側東壁土層断面 (西から)





1 第1遺構面全景（北東から）



2 掘立柱建物1完掘状況（東から）





1 掘立柱建物1 12ピット断面 (南から)



2 掘立柱建物1 12ピット完掘 (北から)



3 掘立柱建物1 13ピット断面 (西から)



4 掘立柱建物1 13ピット完掘 (南から)



5 掘立柱建物1 93ピット断面 (北から)



6 掘立柱建物1 95ピット断面 (東から)



7 2溝完掘状況 (東から)

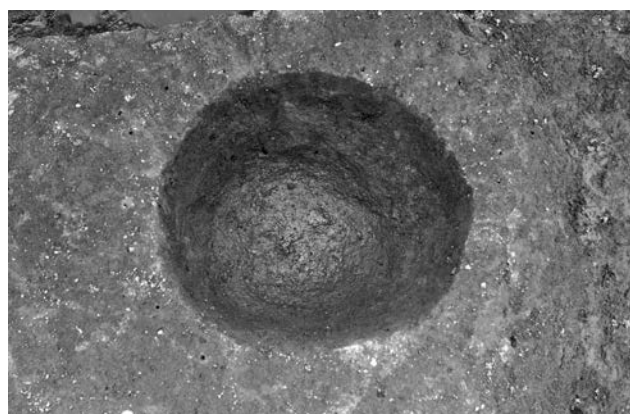




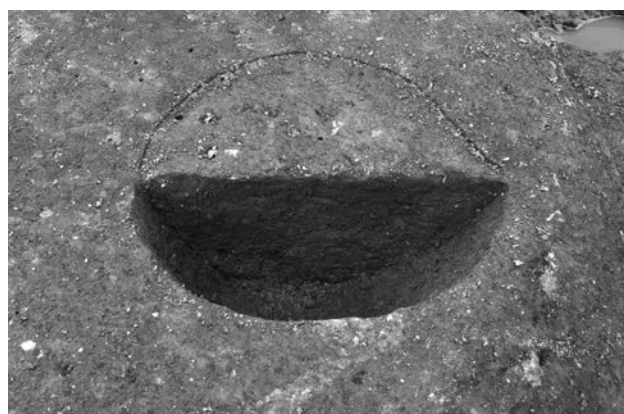
1 3溝完掘状況（東から）



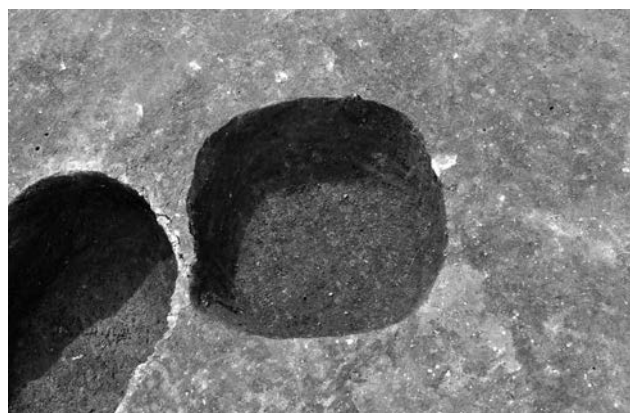
2 2溝（右）・3溝土層断面（南から）



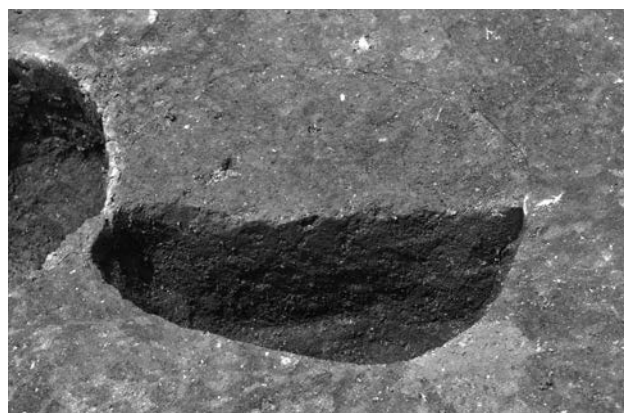
3 7ピット完掘状況（北西から）



4 7ピット土層断面（北西から）



5 10ピット完掘状況（東から）



6 10ピット土層断面（東から）





1 第2遺構面全景（北東から）



2 竪穴建物1・2完掘状況（南から）





1 竪穴建物1完掘状況(南から)



2 竪穴建物1東西セクション(南から)



3 竪穴建物1南北セクション(西から)

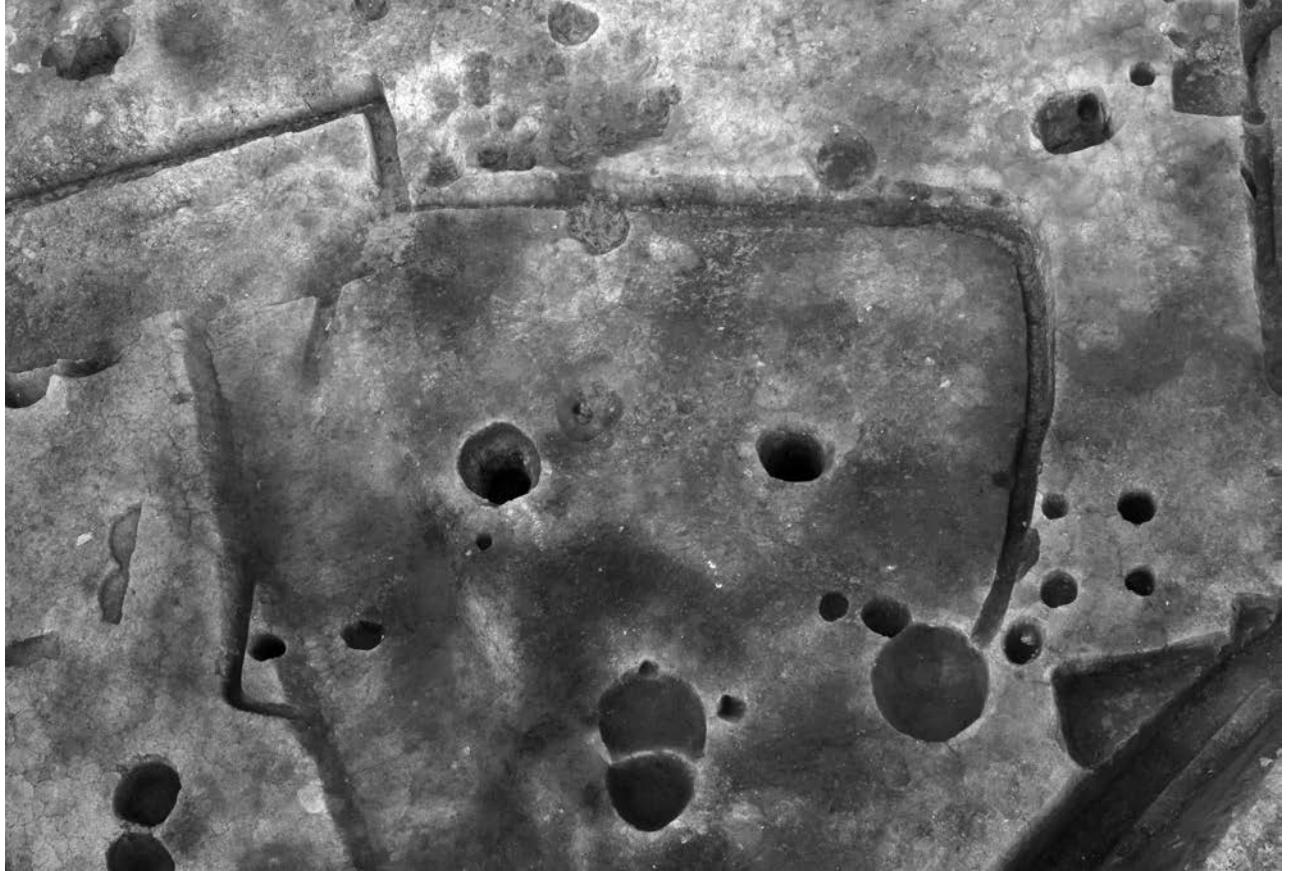


4 竪穴建物1遺物出土状況(南から)



5 竪穴建物1 77ピット完掘状況(北から)





1 竪穴建物2完掘状況（南から）



2 竪穴建物2東西セクション東半（南から）



3 竪穴建物2東西セクション西半（北から）



4 竪穴建物2南北セクション北半（西から）



5 竪穴建物2南北セクション南半（東から）

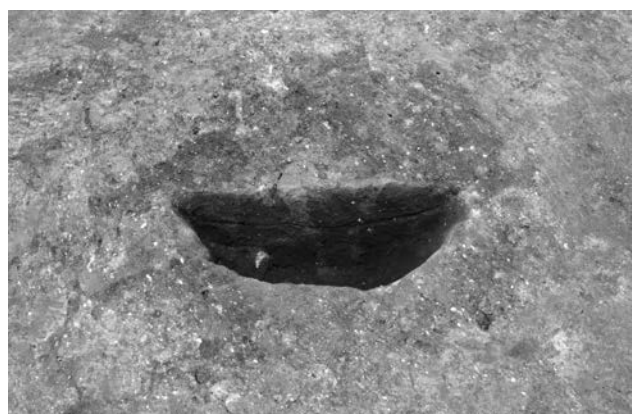




1 竪穴建物2 52ピット断面 (南から)



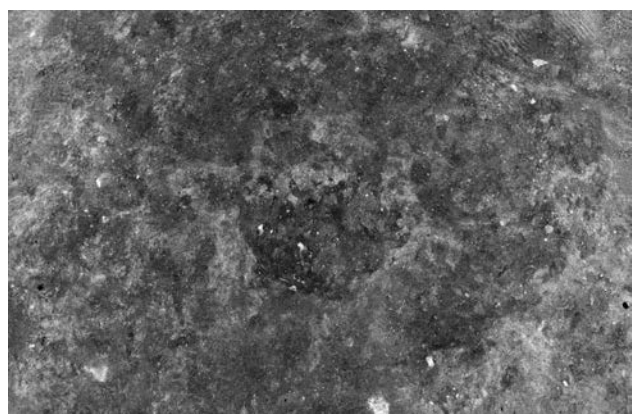
2 竪穴建物2 53ピット断面 (南から)



3 竪穴建物2 54ピット断面 (南から)



4 竪穴建物2 55ピット断面 (南から)



5 竪穴建物2 85炉完掘状況 (南から)



6 竪穴建物2 85炉断面 (南から)



7 竪穴建物2遺物出土状況1 (南から)



8 竪穴建物2遺物出土状況2 (南から)





1 掘立柱建物2完掘状況（南から）



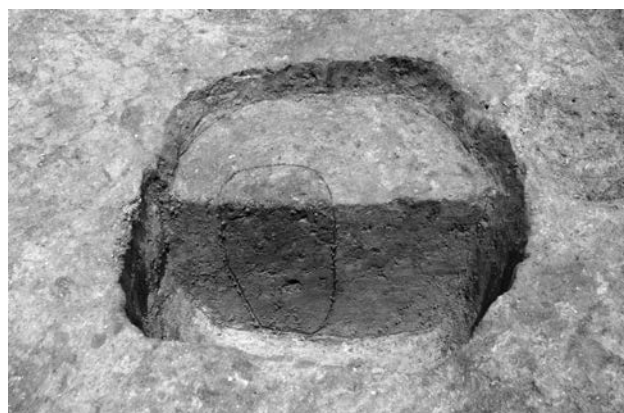
2 掘立柱建物2 70ピット断面（南から）



3 掘立柱建物2 73ピット断面（西から）



4 掘立柱建物2 87ピット断面（北東から）



5 掘立柱建物2 88ピット断面（南から）





1 26 土器溜り検出状況 (南から)



2 32 土器溜り検出状況 (北東から)



3 28 土坑集石検出状況 (南から)



4 28 土坑土層断面 (南東から)



5 28 土坑完掘状況 (南東から)



6 115 土坑完掘状況 (北から)



7 115 土坑遺物出土状況 (北から)



8 115 土坑土層断面 (西から)





1 39ピット完掘状況 (東から)



2 39ピット土層断面 (東から)



3 41ピット (右)・42ピット完掘状況 (南東から)



4 41ピット (右)・42ピット断面 (南東から)



5 43ピット (右)・44ピット完掘状況 (南東から)



6 43ピット (右)・44ピット断面 (南東から)



7 45ピット完掘状況 (南東から)



8 45ピット土層断面 (南から)





1 57ピット完掘状況（南から）



2 57ピット土層断面（南から）



3 64ピット完掘状況（北から）



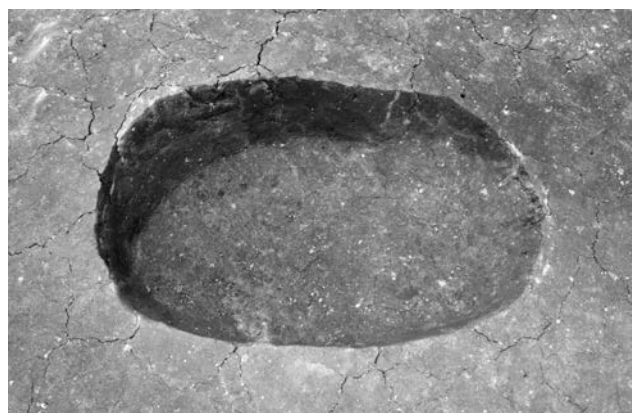
4 64ピット土層断面（北から）



5 84ピット完掘状況（北から）



6 84ピット土層断面（北から）



7 125ピット完掘状況（南東から）

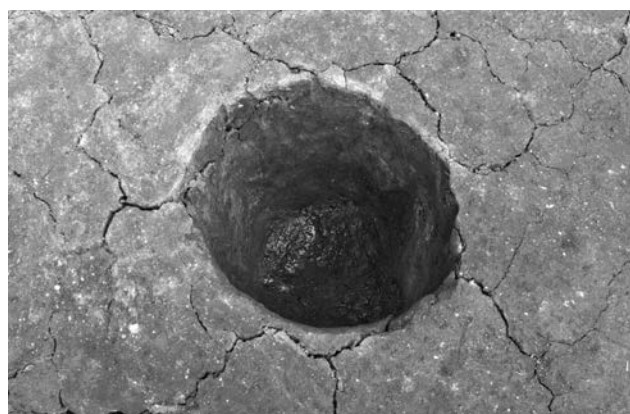


8 125ピット土層断面（南東から）





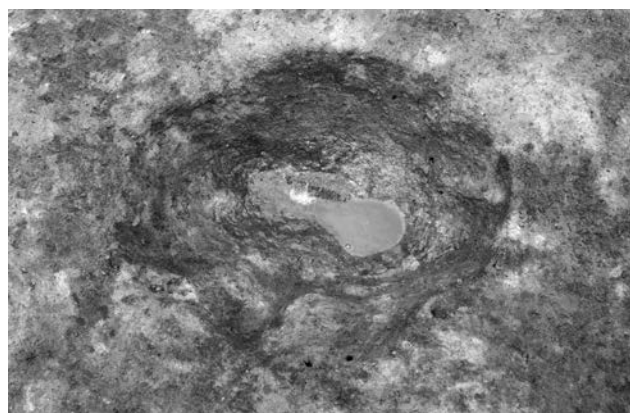
1 第3遺構面全景（東から）



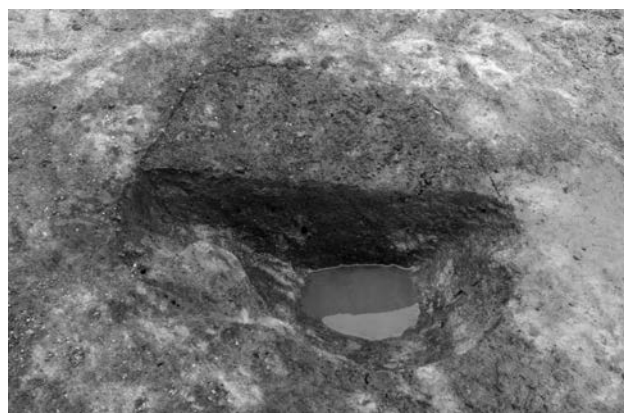
2 127ピット完掘状況（南から）



3 127ピット土層断面（南から）



4 134ピット完掘状況（西から）



5 134ピット土層断面（西から）

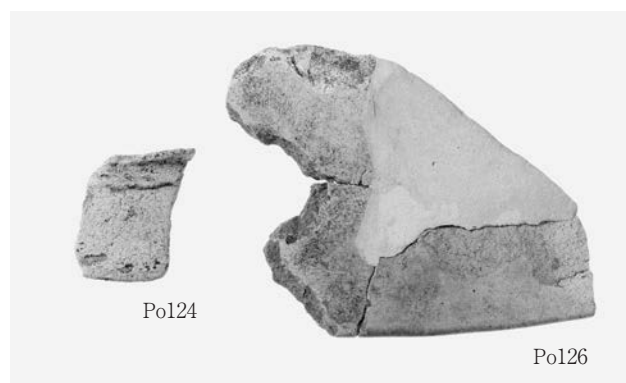




1 豎穴建物 1 出土土器 (1)



2 豎穴建物 1 出土土器 (2)



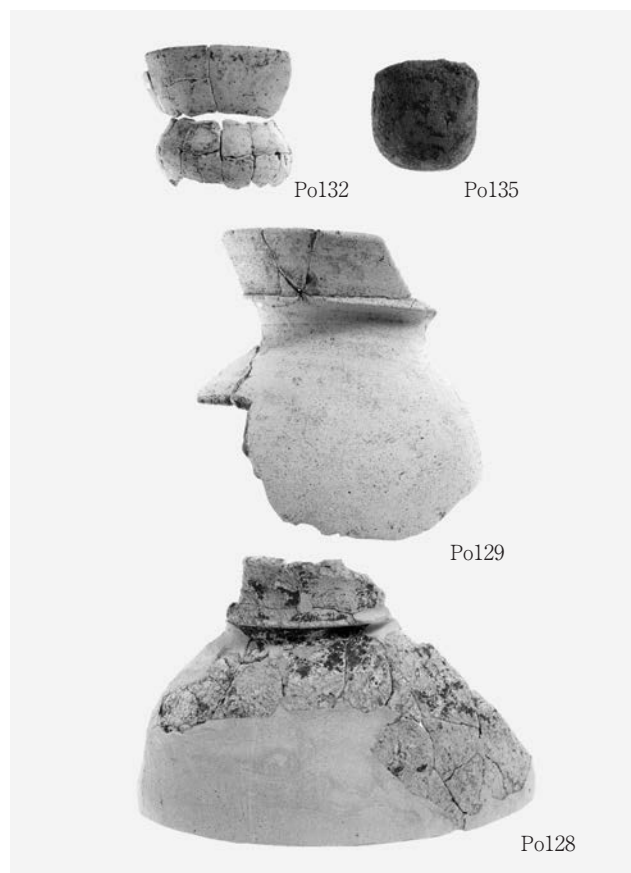
3 豎穴建物 2 出土土器 (1)



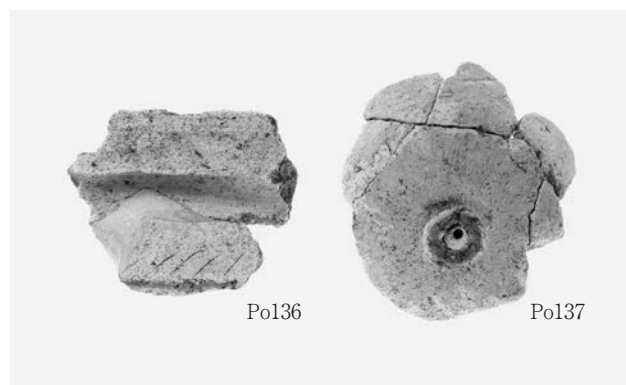
4 豎穴建物 2 出土土器 (2)



1 26 土器溜り出土土器 (1)



2 26 土器溜り出土土器 (2)



3 32 土器溜り出土土器 (1)

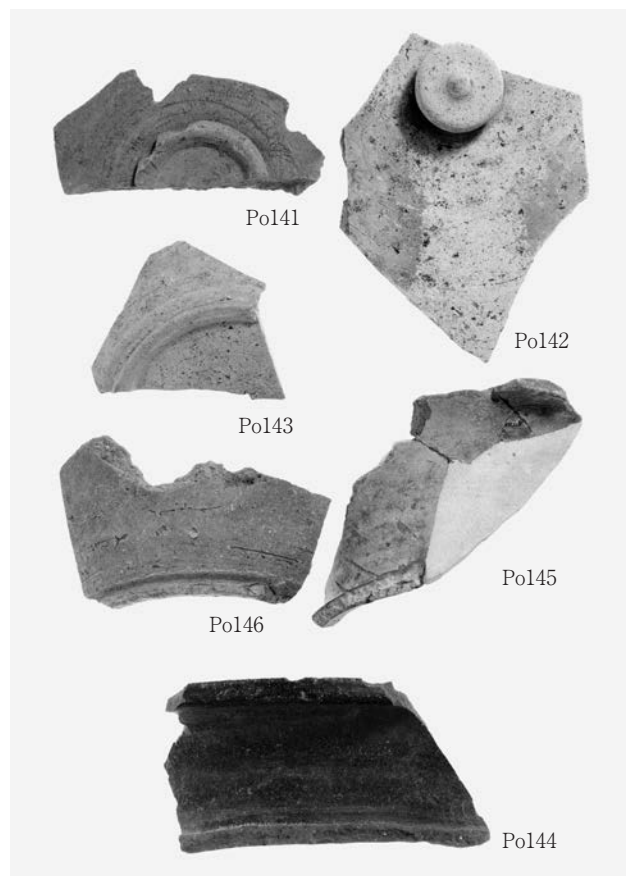


4 32 土器溜り出土土器 (2)

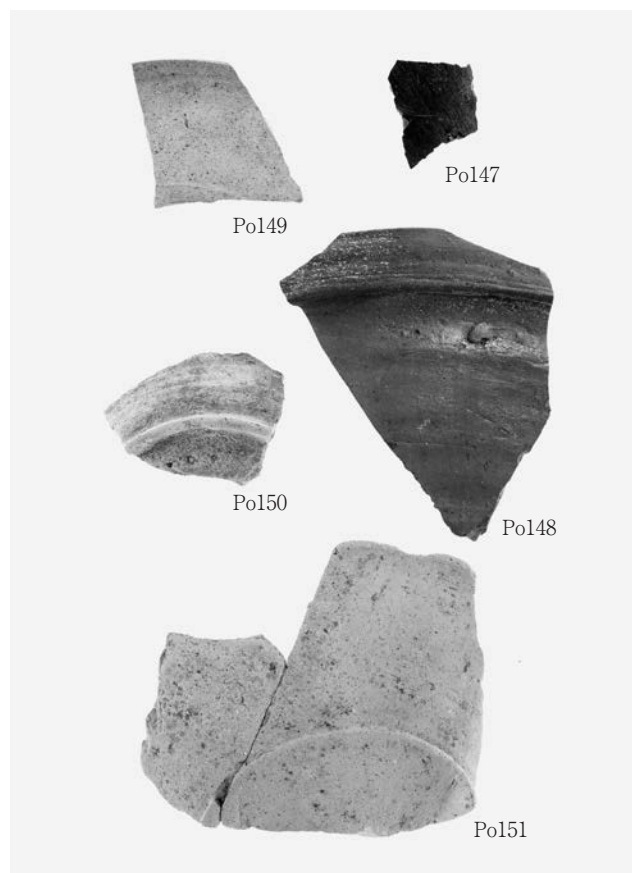




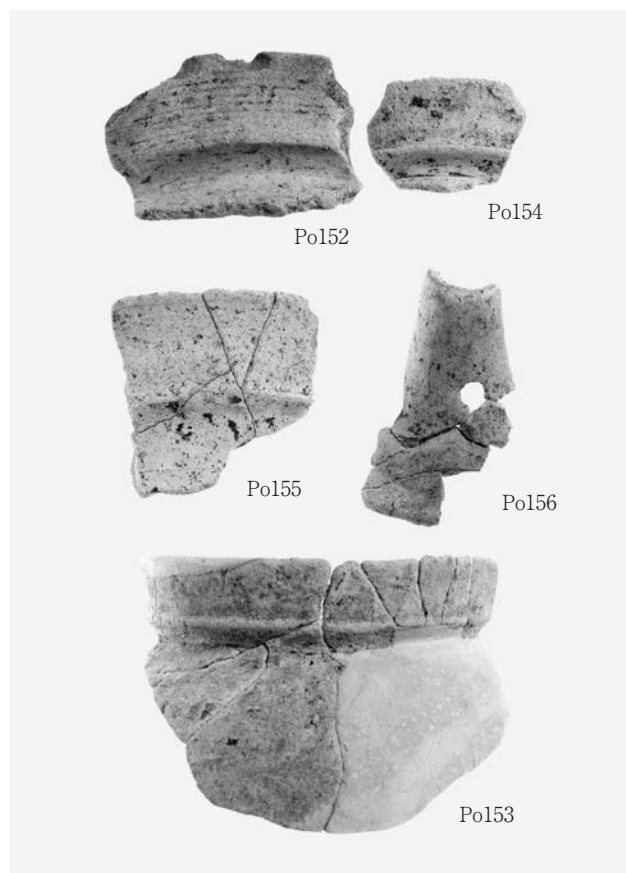
1 115 土坑出土土器



2 I 層出土土器



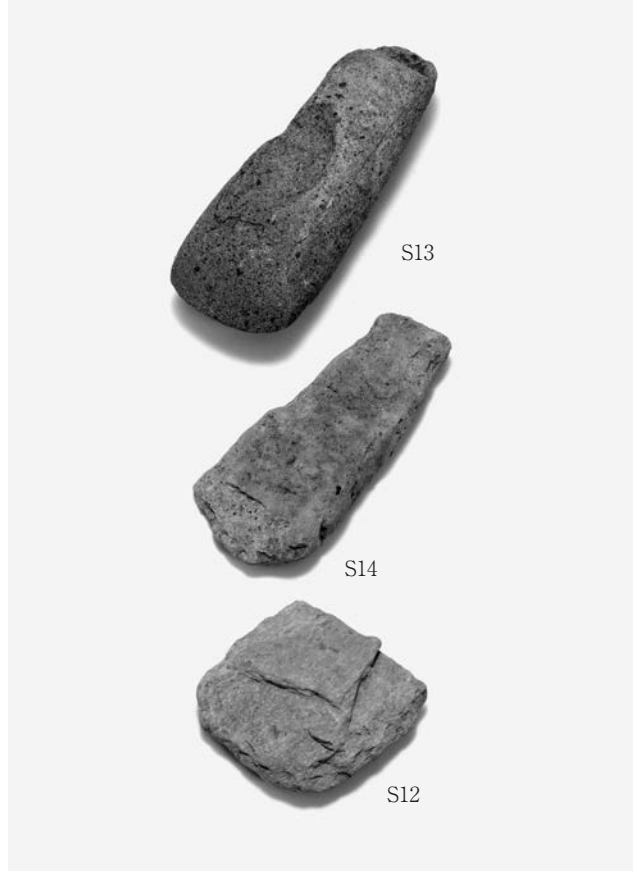
3 II 層出土土器



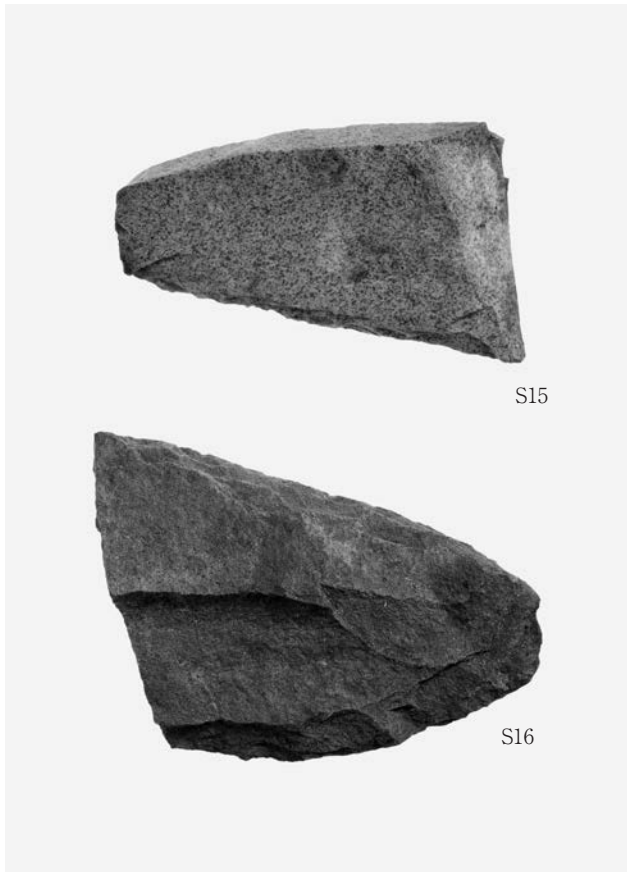
4 III 層出土土器



1 6区出土土製品



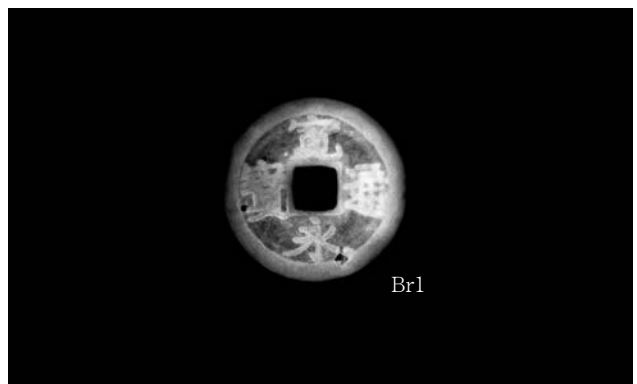
2 6区出土石器 (1)



3 6区出土石器 (2)



4 3溝出土銭貨



5 3溝出土銭貨 (軟X線透過)



# 報告書抄録

ふりがな	だいかくいせき2							
書名	大柵遺跡Ⅱ							
副書名	一般国道9号(鳥取西道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	XXVI							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	牧本哲雄(編)・西山昌孝・森本のぞみ・河合章行・村田泰輔							
編集機関	公益財団法人鳥取県教育文化財団調査室							
所在地	〒680-1133 鳥取県鳥取市源太12番地 電話(0857)51-7553							
発行年月日	2017(平成29)年3月17日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
だいかくいせき 大柵遺跡 (4～6区)	とっとりけんとっとりし 鳥取県鳥取市 だいかく 大柵 あざしもまえだ 字下前田、 あざそうがたにおく 字僧ヶ谷奥他	31201	1-261	35°29'42"	134°11'10"	20150401 ～ 20150713	756㎡	国道9号(鳥取西 道路)道路改築工 事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物、特記事項		
大柵遺跡 (4～6区)	集落	弥生時代		流路 土坑		弥生土器、石器、木器		
		古墳時代		竪穴建物 掘立柱建物 土坑 溝		土師器、須恵器、土製品、石器、木器		
		古代		掘立柱建物跡 土坑 溝 柱穴・ピット		土師器、須恵器、石器、木器		
		中世から近世		掘立柱建物 溝		陶磁器		
要約	<p>4区では、弥生時代から中世にかけての、流路・溝・土坑などを検出した。このうち、弥生時代後期から古墳時代前期には、集落を区画すると考えられる溝の一部や護岸又は流水調整として機能したと考えられる、流路内に打設された杭列群が検出された。</p> <p>5区では、古代から中世にかけての集落関連遺構が検出され、古代では掘立柱建物3、土坑1などを検出した。中世では、自然流路3を検出した。</p> <p>6区では、古墳時代及び中世末から近世の集落関連遺構を検出した。古墳時代では、前期の竪穴建物2、後期の土坑1などを検出した。竪穴建物から山陰型甑形土器が出土した。中世から近世では、柱穴内に礎盤石を据える大型掘立柱建物1が検出された。</p>							

---

一般国道9号(鳥取西道路)の改築に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書 XXVI

鳥取県鳥取市

## 大桝遺跡 II

発行 2017年3月17日  
編集 公益財団法人鳥取県教育文化財団調査室  
発行者 鳥取県教育委員会  
〒680-8570  
鳥取県鳥取市東町一丁目271番地  
電話(0857)26-7525  
印刷 有限会社米子プリント社

---